

櫻の宴

第一章 古刹

(一)

境内の奥。鬱蒼とした森に囲まれた空き地で、僕こと神崎浩平は呆然と立ち尽くしていた。山辺の道の古刹である。何故か境内には人っ子一人もいない。観光シーズンなのに。

大学受験も終わり、人心地のついた春休みだった。恋人と言うか、半ばフィアンセとなった彩宮鈴香嬢は、茶道の師範として忙しく、同行していない。おかげで、趣味の一人旅を楽しんでいたのだ。それでも、鈴ちゃんに「明日は山辺の道を歩いて来るよ」と事前報告する辺りは我ながら小心である。

鈴ちゃんは整った人形のような顔でジッと僕の目を見据えた。『絶対零度の魔女』の異名を取る凍り付くような視線。

見透かすような視線に晒されること数分。鈴ちゃんはふっと微笑みを浮かべた。

「よろしく言っておいて」

「——はい？」

「わたしもあの辺りには不義理をしてるからね」

鈴ちゃんが言った謎の言葉が脳裏に蘇る。

「にやあ」

又、可愛い猫の声がした。

どうしたものかと、僕は天を仰いだ。まばゆい新緑の輝きが柔らかな風に揺れていた。僕はぼりぼりと耳の後ろを掻いた。

「にやあ」

これで三度目。猫は明らかに僕を呼んでいる。

僕は吐息をついて、その猫を見た。境内のさらに奥、5メートルほど先に純白の気品ある猫が座って、じっと僕を見つめていた。毛並みも綺麗で、その純白の身体には汚れが一つもない。誰か手入れをしているのだろうか？ 僕もしゃがんで猫を見つめる。エメラルドのような瞳は気位の高さを示している。どこか鈴ちゃんに似ている。

猫の後ろには注連縄が張られていて空き地が区切られている。白い紙のシダがそよ風に揺れている。立ち入り禁止の看板こそないが、注連縄の向こう側が禁足地なのは明らかだった。

禁足地——人が入ってはいけない場所。

神社やお寺の禁足地には二通りある。一つは修行の場や重要な聖地で一般人の侵入を許さぬもの。もう一つは危険だから一般人の侵入を許さぬもの。この場合の危険は、霊的なものと物理的なものがある。崩れた崖でもあれば、観光客に怪我人がでないとも限らない。そして強い悪霊でも入れば、精神に異常を来す人も出るだろう。

この古刹の禁足地は明らかに後者で霊的に危険なものだと知れた。注連縄のこちら側と向こう側は空気の色も質も違う。

「——お前さ、式だろ？ 僕なんかに何か用？」

そう問いかけると、猫は一瞬、微笑したかのように表情を崩した。そして、招き猫のように右手で『おいでおいで』をした。ちなみに式とは使い魔のようなものである。

それまで微苦笑していた僕は表情を失った。驚いたのだ。驚くと無表情になるのは僕の癖だ。結構それで得をしているが『哲学者』などと呼ばれることもある。そんな小難しい顔をしているのだろうか？

純白の小柄な猫は優雅な仕草で立ち上がると、注連縄を潜って禁足地に入った。そして立ち止まると、又、僕を振り返り、「にやあ」と鳴いた。

こうもあからさまに誘われたら仕方がない。どんな神様の使いか知らないが、この猫には邪気が感じられない。高貴さがある。悪い事にはなるまいと、僕は腰の位置にある注連縄をまたいだ。

ひんやり。

境界を潜ると空気が変わった。微かに清い水気を含んだガラス質の空気になった。

「——なんだ？ これ？ 聖地の空気だぞ。それもただもんじゃやない」

僕は身を引き締めた。俗世の人間が入って良い空間じゃない。危険な禁足地かと思ったが、この古刹が守るパワースポットなのかもしれない。しかし、僕は俗人である。邪な人間が滝行をすると、流木や落石に打たれることがあると言う。せめて、敬虔な気持ちで歩を進めないといけない。僕は腰のポーチから先祖代々伝わる唯一の品の数珠を取り出し、拌み手でゆつくりと腐葉土を踏みしめながら、白猫の後をついて行った。

白猫は猫特有の体重を感じさせない足取りで一閃先をゆつくり歩む。時折、立ち止まり、僕がついて来ているか確かめる。

禁足地の中には意外に奥行きがあった。腐葉土の空き地がずっと続いている。天は新緑が覆っている。奥へ進む程に緑が濃くなり、空気の静謐さが増す。微かにせせらぎの音すら聞こえて来る。むせかえるような新緑の香りと土の匂い。清らかな水の気が強くなる。道はなだらかな下り坂だ。そして目の前にせせらぎが見えた時、猫は歩を止めた。

半眼で気を整えながら歩いて来た僕は、同じく足を止め、目を開いて周囲を見回した。

目の前に幅一メートル程の小川がある。底が見える程に清い水が流れていて、マイナスイオンを出している。猫は川の側の円形の窪みの中心に座り、痛い程の視線で僕を見る。

そこには崩れた小さな五輪の塔があった。

崩れてから放置され、随分経っているのだろう。崩れた石は苔むしていた。

「にやあ」

今までより、やや強い声で白猫は鳴いた。僕は猫が呼んだ理由を理解した。

吐息をつけて座り込む。リュックを下ろし、中からペットボトルを取りだして咽を潤した。これから一仕事しなくてはならないのだ。

一息つくと、リュックからスポーツタオルを取り出す。立ち上がり、小川の水にタオルを浸す。水は人に触れられるのを拒むように冷たかった。濡れたタオルを固く絞ると、僕は残っている五輪の塔の台座の苔を落としにかかった、唯一知っているお経・般若心経を唱えながら作業した。正直、鎮魂の思いをかけながらやらないと怖かったのだ。

白猫は微動だにせず僕を見つめている。

台座を拭き終わると、倒れている丸石や三角の石も拭く。何度かタオルを洗いに小川と往復した。小さい五輪の塔とは言え、石の塊だ。重い。苔を取るのもヤスリをかけるように力を入れるから、結構疲れる。その間、どこからか、ずっと見つめる視線を感じていた。途中で止めたなら、この視線の主はさぞかし落胆するだろうと思う、継るような視線だった。やりかけたからには止められない。唱えている般若心経が乱れがちになる。てっぺんに当たる屋根の形をした三角形の石を拭き終えた時、僕は般若心経を唱えるのは止めて、立ち上がり大きく伸びをした。腰が微かに痛い。体中汗だくになっている。僕は小川へ向かい、川の水で顔を洗った。清流の冷たさが、疲れをしばし忘れさせる。さて、これからが大仕事だ。もう、般若心経を唱える余裕はない。僕は軍手をはめ、倒れた石に手をかけると、腰を下ろして持ち上げ、台座に乗せる。凄い力仕事だ。一人でする作業じゃない。それでも五輪の塔を完成させた時には、大きな達成感と安堵を覚えた。

気のせいか、周囲の空気も安堵に緩んだ感じがした。

座り込み、ペットボトルの水を飲む。労働の快感が体中を弛緩させる。

陽が傾き始めているのに気付いて、立ち上がり、花でもないかと周囲を捜す。先程の視線は消えている。白猫は最初の位置から微動だにせず、僕に視線を向けている。

川辺にアマナの白い花を見つけたので、数本摘んで五輪の塔にリュックの中のチョコレートと一緒に供える。貧相だが、これが僕に出来る最大限の供養だった。

どうか、お静かにお眠り下さいと言う思いで、毎晩仏壇で唱えている光明真言をひとしきり献げて、さあ、帰ろうとすると、白猫が黒い棒のような物を啜えて近づいて来た。咽をゴロゴロ鳴らしている。白猫は僕の足に身体を擦り付け、顔を上げて棒を見せる。どうやら土産らしい。自然に猫の口から、僕はその棒を受け取った。しげしげとその棒を見ている間、猫は態度を豹変させて、僕にすり寄り咽を鳴らす。

棒には赤い珊瑚が輝いていた、タオルで拭いてみると、珊瑚をあしらった手の込んだ銀細工の簪かんざしだと分かった。こんな日くのありそうな物を渡されても困ると思ったが、ままよと受け取ることにした。

僕が帰るために立ち上がると、猫は五輪の塔の側に戻った。ちんまりと座る。

「じゃ、またな」

と手を振ると、猫はお辞儀をした。

また、びつくりした。礼儀が行き届いていると言うか、本当の猫なのか不気味に感じた。急がないと陽が沈む。

そう思っているせいかな、帰りは思ったより時間がかかった。何度か道に迷ったか？ と不安を覚えた。

注連縄までたどり着いた時、ぎよっとした。黒い影が立っている。

良く見ると僧衣の壮年のお坊さんだった。

(叱られるかな？)

そう思ったが、お坊さんは微笑んでいる。両の掌を上にして、白い絹の布を献げるように持っている。

それで「ああ」と納得した。

僕は注連縄を挟んで、お坊さんの前に立ち、布の上に簪を置いた。

「御苦労様でした」

お坊さんはそう言つて、頭を深々と下げ、簪を布で来るんで、すたすたと本堂に消えた。何も問わなかったし、叱られもしなかった。僕は取り残された形になった。

僕は空を見上げた。空の端が朱に染まりかけている。

「……いいように使われちゃった」

そう独りごちる。

急がねば、陽が落ちてしまう。

「まあ、悪くない」

そう言つて僕は古刹を後にした。

最終バスを逃したので、重労働の後、最寄り駅まで二時間歩くはめになった。家に着くのは乗り継ぎが順調に行つても午後九時を過ぎるだろう。今夜は妹の浩美が食事当番だ。浩美は料理が冷めるのを嫌う。浩美のむくれ面が頭に浮かぶ。なにか土産を買つて帰らないと怖い。携帯のアンテナが立つようになっていたので、メールをチェックする。三件着信があった。

最初のメールは友人の伊達から、嵯峨野旅行の打ち合わせを、明日、鈴ちゃん家ですると言うもの。

二件目は妹の浩美。午後七時には帰る約束を違えたことの文句と、僕の食事を愛犬のゴローに上げると言う脅し。機嫌を取つた返信を即しないと、本気でやるから怖い。

三件目は愛する鈴ちゃんから。「今日はありがとう。お疲れ様」とあった。意味は不明だが、今日一日の重労働が報われた気がした。今夜あたり電話をいれよう。

しかし重労働だった。明日は筋肉痛に苦しむだろう。まあ、僕的には満足のいく一人旅だった。

(一)

彩宮鈴香の家は城下町にあるお屋敷である。今は駅前立派なお店を開いて和菓子業を営んでいるが、お父さんは大企業の大株主らしい。相談役のようなことを頼まれて、滅多に家にはいない。なによりも、鈴ちゃんがお父さんと僕たちを会わすことを嫌い、顔を会わしたことはない。

夏の一件以来、三枝明美と伊達正彦のカップルと僕は彩宮家の常連となっている。もともと、姉御——もとい、明美は高校入学以来、彩宮家を何度か訪ねている。鈴ちゃんの親友なのだ。

お手伝いさんの藤沢さんの言によれば、鈴ちゃんが友人を家に招くことは、これまでなかったそうだ。その意味で藤沢さんは僕らの来訪を喜んでくれる。

彩宮鈴香はミス桜ヶ丘高校に選ばれたほどの美人さんで、男女を問わず憧れる者は多い。ただ、鈴香嬢の人を寄せ付けぬオーラで友人を作らない。

曰く、人嫌いなんだそうだ。

僕は恋人として、その悪癖を直そうと努力しているが、功を奏していない。僕の隣の家のお姉さん・響子きょうこ姉の人懐っこさと足して二で割ればバランスが取れるのだが……

その日は正午に彩宮邸を訪れた。

いつもより早いなと思っていたら、初めて座敷で豪華な日本料理をごちそうになった。ちなみに今日の鈴ちゃんの出で立ちは薄桜色の振り袖である。家に居る時は和服で過ごすよう仕込まれているのだ。鈴ちゃんは。

「茶室で話をしましょう」

食事が終わり、ゆっくりしていると、鈴ちゃんは感情のない冷たい声でそう言った。顔は人形のような無表情である。

財力もあるし、鈴ちゃんは茶道の師範なのだから、茶室くらいあって当然なのかもしれないが、それでも僕は驚いた。

茶室である。

普通の家にはない。

まあ、彼女の家には道場まであるから、今更、驚くことではないのかもしれないが……「えー？ 俺、作法なんか知らないぜ。鈴ちゃんの蔵で良いじゃないか？」

紫に染めていた頭を三枝の教育で黒髪に戻した伊達が畳に横たわりながら文句を言う。こいつは儀礼とか作法を嫌うのだ。ちなみに鈴ちゃんは蔵を改造したものを自室としている。

伊達は分かっている。鈴ちゃんが、こう言えばそれは決定事項なのだ。

「人目がなければ、いちやいちゃ出来るでしょう？ 作法なんかどうでも良いのよ」

珍しい。鈴ちゃんが冗談を言った。

「いちやいちゃ出来るのか？」

伊達が、がばりと起きあがる。げんきんな奴め。出来る訳がないだろう。

「わたし、今日は機嫌が良いの。みんなにお茶を振る舞いたいの。あ、明美は別よ。作法を忘れていないか見せて貰うわ」

「うーす」

げんなりした声で三枝が答える。

三枝は鈴ちゃんの門下生なのだ。

確かに、今日の鈴ちゃんは多弁だが、機嫌の良い顔かな？ 人形のような無表情だが？

「浩平君！」

いきなり呼ばれて、僕は視線を鈴ちゃんに戻す。

「今日は貴方の為のお茶会よ。昨日は力仕事したでしょう？ 和んでね」

そう言つて鈴ちゃんは微笑んだ。

昨日の謎のメールと言い、千里眼なのか？ 鈴ちゃんは？

赤い絨毯の敷かれた渡り廊下を鈴ちゃんを先頭に三枝・僕・伊達の順番で進む。周りには美事な日本庭園だ。前に行く二人が無口・無表情で、しずしずとすり足で歩んでいるのに、伊達は大騒ぎである。

「うおお！ 凄ええ！ この庭、俺の家が四軒建つておつりが来るじゃねえか？ お？ 小川がある。向こうは池か！ なんだ？ あの派手な鯉？ あの鯉一匹で俺の家が買えるんじゃないか？」

こんな具合である。僕も同感だが、空気を読んで欲しい。

「——正彦！うるさい！」

三枝が振り返って伊達をたしなめる。それだけで、伊達はしゅんとしてしまった。三枝恐るべし。

それでも伊達はうつむきながら、「資本主義と言うものは……」「差別社会だ……」などと呟いている。

茶室は古い農家に見えた。土壁に茅葺き屋根。ひどく地味だが、それは外観だけの話である。入り口はにじり口の本格的な茶室だった。

鈴ちゃんはにじり口の襖を開けると、器用に着物の裾を折りたたみ、するすると茶室に入る。着物越しでも、ヒップラインは分かる。僕の目は釘付けになる。

続く三枝はミニスカートだ。

伊達が身を寄せて来る。なにを期待しているのか良く分かる男だ。

三枝も器用にスカートに手を当て、するりと茶室に入る。パンツは見せなかったが、安産型だな？ 三枝よ。

伊達の舌打ちを背にして、僕も腰をかがめて、にじり口を潜る。何か作法があるみたいだが、知ったことか！

「なんか、ネズミみたいだな……」

伊達が呟く。うるさい。

茶室は六畳程度の狭いものだったが、にじり口から入ると、天が開けたような開放感があった。香を焚きしめているのか、伽羅の香りがする。奥の席に座るよう、鈴ちゃんから指示された。奥の床の間には、太い筆で書き殴ったような文字らしきものが掛け軸として、かけられていた。達筆すぎて読めないが、これもきつと値の張るものなのだろう。とりあえず先の二人が背筋を伸ばして正座しているので、正座する。

なかなか来ないなと思っていると、伊達がにじり口から首だけ出して、落ち着かぬ様子できよろきよろしている。

こいつは大胆なようで小心者なのだ。

「早く入りなさい」

三枝が声を落として叱咤する。諦めた表情で伊達は、ずるずると匍匐前進するように入って来て空いている下座であぐらを組む。

前言訂正。大物だよ。こいつ。

「なんか、入ってくるのは惨めだったけど、こうして入ると、広く感じるなあ〜」

伊達は脱力して天井を眺める。

一瞬、三枝の視線に剣呑なものが浮かんだが、三枝は小さな吐息と共にそれを消した。

鈴ちゃんは、端から見えていなかったように伊達の不作法を無視して小さな器に何かを盛っている。

中央の囲炉裏に火を付けると、鈴ちゃんは三枝を呼んだ。

「三枝さん、これを皆様に」

「はい」

僕の左側に座っていた三枝は優雅な動きで立ち上がり、ゆつくりと歩む。僕に一礼して、後ろを通ると、鈴ちゃんから器を受け取った。一瞬、三枝の動きが止まる。見ると目を剥いていた。だが、それも一瞬。三枝は器を僕の座る畳のやや横に「どうぞ」と頭を下げて

置いた。

波打つような四角い器は名のある陶芸家のものだろう。気品がある。そこに盛られたお菓子をみて、僕も三枝が驚いた理由が分かった。

載せられたお菓子は桜餅。

彩宮家の関係者で、特別の用があるときのみ限定生産される幻の桜餅だった。

桜餅を配り終わると、三枝は何事もなかったかのように席に戻った。伊達はその桜餅がどういうものか知らないで、ただ、つまらなそうに天井を見上げている。

全員に器が行き渡るとお湯がぐつぐつ言い出した。

鈴ちゃんは三つ指について頭を下げる。

「いらっしやいませ。ようこそ。どうぞごゆっくりお楽しみください」

鈴の鳴るような声でそう言った。対して三枝は、

「ありがとうございます。おもてなしの心が伝わって参ります」

そう答えて同じように三つ指ついてお辞儀をする。

その様子に、僕と伊達はぼかんと口を開けて見つめ合った。

伊達は慌てて正座して僕と二人で「ありがとうございます」と頭を下げる。場違いだ。こういう世界には僕と伊達は場違いすぎる。

しばし静寂が流れた。

「くすっ」と最初に笑いを漏らしたのは鈴ちゃんだった。それを見て、三枝が「あはははははは！」と大笑いして、畳の上に横たわりお腹を押さえて、身もだえする。

僕は訳が分からず、無表情になった。そっと鈴ちゃんを見る。

視線が合うと、鈴ちゃんは口元を押さえて「うふふふ」と堪えた笑いを漏らした。

「予想通り！ 予想通り！」

明美はそう言って苦しい息で、まだ笑っている。

「——お前ら、俺たちを嵌めやがったな！」

伊達は流石に察しが早い。怒鳴って立ち上がる。その伊達に鈴ちゃんが凍り付く視線を送る。

「——座りなさい」

伊達は青ざめて座った。流石、『絶対零度の魔女』の通り名は伊達じゃない。伊達よ。あんなもんじゃないぞ。鈴ちゃんの本当の怖さは。

「からかって悪かったわ。でも、いつも振り回されているからね。意趣返しよ」

しれっとした顔で鈴ちゃんはお茶を点てている。明美はまだ寝転がって「ひーひー」言っている。靴下を履いた足を顔先に突きつけてやると、「やん」と妙に色っぽい声を出し、ようやく立ち上がり、正座した。

「——でもさ、鈴。良いの？ この桜餅『彩宮』の秘中の秘じゃない？ 料理長みたいな人が一人で手作りするんでしょ？ 結婚式でもないと作らないと聞いていたから、真面目にやるのかと思ったわよ？」

「そうね。わたしが頼んで八つだけ作ってもらった。神崎君の特別な日なの。神崎君、一つ残しておきなさいね。また、山辺の道へ行けとは言わないけど、ウチの仏壇に供えて頂戴」

？

僕はまるで意味が分からなかった。眉間に縦皺を立てて考えたが、特別なことは思い浮かばない。

「鈴ちゃん。それ、どういうこと？」

僕の質問は聞こえたのだろうか？ 鈴ちゃんは、にじり口に視線をそらして言った。

「淡雪。出ておいで」

にじり口から白い何かが、飛び込んで来た。

それは一直線に僕へ突進し、膝の上で丸くなった。ごろごろと喉を鳴らし、僕の顔を見上げて「にゃあ」と鳴いた。

僕は驚きに息を飲んだ。昨日、古刹にいて僕を導いた猫に相違なかった。

「——お前か……」

「貴方、女神と縁を結んだのよ。こんな特別な事がある？」

鈴ちゃんは小首を傾げてそう言った。その顔は慈愛に満ちた笑みをたたえていた。僕の心臓はドクンと鳴った。全く、彼女にはかなわない。

「きゃー！ かわいい！ 猫だ！ 猫だ！」

明美が黄色い叫びを上げる。

「触っちゃダメよ。明美。それは生きた猫じゃないのだから」

「え？ まさか幽霊なの？ 本物みたいだよ？」

「わたしの式よ。神崎君がいるから実体化してるだけ。触ったら消えるわよ」

黙っていたが、この猫が鈴ちゃんの式だと言うのが、僕の中で妙にひっかかった。しつくり来ない。僕がいるから実体化しているとは、どういう意味だろうか？

「この猫が幽霊だって言うのか？」

伊達が驚いた声を出す。

「……う、うう。ねえ、鈴、ちよつとだけ、ちよつとだけ触っちゃダメ？」

明美の懇願に、鈴ちゃんが苦笑する。

「なんだか、伊達君に毎日言われている台詞のようね？」

明美はぼつと頬を染め、伊達は妙な手振りで踊っている。認めたに等しいが、卑屈だな。伊達よ。

「からかわないですよ。鈴。私、真面目にお願いしてるのに……」

「——いいわ。触ってごらん」

「神崎、前ごめんね」

三枝はそういうと僕の膝の猫に手を伸ばす。こういう時に三枝の巨乳が目がいくのは、僕は伊達と同レベルと言う事だろうか？

「あ、触れた！」

明美は喜びの声を上げる。だから、三枝、乳が、乳が触れてる。

淡雪と呼ばれた白猫は、額を撫でられ「みゃあ」と鳴いた。そして、名前の通り透けるようにして消えて行った。

僕と明美はその喪失感に同時に「あっ」と声を上げた。

伊達は「おお！」と叫びを上げる。「手品みたいだな」。

鈴ちゃんは揶揄を含んだ目で伊達を見る。

「女も『淡雪』のようなもの。無為に触ると消えるのよ。伊達君？」

鈴ちゃんの一瞥に伊達は黙って頭を下げる。

「……ああ、消えちゃったよ。神崎、鈴、ごめんね」

「悪いと思つたら神崎君から離れて。その体勢。気に障るわ」

鈴ちゃんの言葉に、僕と三枝は一瞬見つめ合い、お互い頬を染め、気まづく離れた。

茶室に所狭しと並べられたトラベルパンフレット。

僕と伊達が考えた春休みの卒業旅行プランだった。無論、明美の意見も取り入れて練つたものだ。で、一泊二日くらいで、親兄弟にばれずに行ける場所として選んだものだった。多忙な鈴ちゃんに計画を聞かすのは初めてになる。

「春休みの嵯峨野かあ」

鈴ちゃんは気乗りしない声で伸びをしながら言った。

「ん？ 鈴は気乗りしない？ 桜、本当に綺麗らしいよ。竹林も美事だそうだし、鈴の好きな寺社仏閣もいっぱいあるし、保津川下りも面白そうだと思うない？」

僕は三枝と鈴ちゃんのやりとりを冷や冷やしながら聞いていた。鈴ちゃんが気に入るうで、四人で楽しめる場所を探すのは結構な難作業だったのだ。鈴ちゃんは自宅の蔵に籠もっているイメージがあるが、彼女も一人旅が好きで実は結構あちこち行っていることを三枝から聞いていた。鈴ちゃんが嵯峨野を蹴ると候補地がなくなる。

「気乗りしないのは確かだね。春休みの嵯峨野でしょう？ 直指庵や祇王寺なんか年頃の女の子で溢れかえっていいそうだって……」

「ああ……。鈴は人混みキライだもんね」

「今までそれが理由で嵯峨野には行かなかつただけ……。これも天啓かな？ いいわ。行きましょう」

その声に僕と伊達は「おっしゃー！」と手を叩き合う。

「もうホテルも予約入れてたんだ。鈴ちゃんのおかげで無駄にならなくてすんだぜ！」

伊達はいかにも嬉しそうに声を上げる。

初耳である。確かにもう予約を入れないといけない時期ではあったけど。

「ああ、それか……」

鈴ちゃんは無表情で呟く。

「明美の歩法にわずかに乱れがあったのは、それね」

三枝はこくと頷く。

「こいつ。どんな部屋頼んだと思う？ 一泊五万円のスイート二部屋よ！ 私の操が無事で済むと思う？」

僕は息を飲んだ。五万円。大学入学用のため込んだ貯金を切り崩さないといけない。

「それは明美次第でしょ？ 伊達君は強姦まがいの事はしないわよ」

「だから、困ってるのよ。泣いて土下座までされたら情が動くじゃない！ 絶対、体触られまくるし……」

そこで、うっかり舌を滑らしたことに気づいて、三枝は頬を染め黙り込む。伊達はテクニシャンを自称しているが、嘘ではないらしい。しかし、泣いて土下座って……伊達、性欲の前にプライドはないのかよ？

鈴ちゃんは三枝の様子にクスリと笑うと、僕に視線を投げかけて来た。淫靡な視線だった。

「ねえ、神崎君。わたしたちはどうするの？」

「二人の時に言う」

僕は無表情でそう答えた。実は狼狽していたのだが、混乱すると、表情がなくなるのが幸いした。僕たちはまだBまでの関係だが、鈴ちゃんの感度は凄く良い。秘所を触るだけで、のけぞって喘ぎ、腰をすりつけて来る。あ、思い出したら勃ってきた。六根清浄。六根清浄と自分に言い聞かす。

「あー！ お前たち、もうやったんだろ？」

「ノーコメントだ」

伊達の問いに、僕は鉄面皮で答える。

「ふふ……」

鈴ちゃんが視線を絡ませたまま笑う。からかっている。いつか男が皮剥けば狼だと思いを知らせてやる。

「鈴はスイートでも良いの？」

「いっこうに構わないわよ」

明美のすぎるような声に、鈴ちゃんは涼しく答える。

その答えに「ぶーー」と三枝はむくれて、膝に顔を埋めて拗ねてしまった。

「じゃ、スイートを男部屋と女部屋に分ける？」

「鈴ちゃん、やめてー！ー！」

「野宿の方がマシだ！」

おお。珍しく伊達と僕の意見が一致した。

「わたしも神崎君の腕枕で寝てみたいわ。明美はどうなの？ わたしと寝る？」

鈴ちゃんは際どいことを言う。三枝は恨みがい目で見上げて顔を上げた。

「ヤダ」

「なら、決まりね。明美、楽しい旅行にしましょうね」

鈴ちゃんは三枝の肩を叩いて笑った。

三枝が相手とは言え、鈴ちゃんも随分人間味が出て来た。僕はそれが何よりも嬉しかった。こうして僕たちの卒業旅行は決まった。

第二章 邂逅

(一)

オーラと言うのはあるものだ。
僕はその時、つくづくとそう思った。

阪急電鉄の嵐山駅で僕たちは朝の10時に待ち合わせをしていた。まさか4人で揃って出かける訳にはいかない。お忍びの道行きなのだ。僕は伊達と始発電車に乗り、ここまで来た。女性陣はTAXIで来るらしい。鈴ちゃんはその美貌でとかく目立つ。三枝も黙っていたれば、人目を引く美人さんだ。そんな二人が早朝から旅仕度で町を歩けば噂を呼ぶ。そんな噂が流れば、響子姉や、妹の浩美は間違いなく僕たちの道行きに気づく。で、TAXIと言う訳だ。まあ、庶民の発想ではないけれど……

爽やかな早春の朝。遠くに見える嵐山公園は水墨画に淡い桃色を彩ったように見えている。八分咲きと言ったところだろうか？ 桃色の霞に覆われているようだ。

僕はコインロッカーの横の壁に背中を預けて、遠くの山々の彩りを愛でていた。遠くを見ていたのには理由がある。

駅の構内はもちろん、手前の道も人でごった返していたからだ。

僕は鈴ちゃん程ではないが、雑踏を好まない。それがどうだろう。目につくのはうら若き女性のグループと若いカップルばかりで、黄色いくちばしから甲高い喧騒が溢れている。

これは鈴ちゃんはへそを曲げる。僕は遠景を眺めながら、無意識に打開策を探していたのだ。

「遅せえな……」

うんざりした伊達の声が腰の辺りで響いた。伊達は僕の隣でうんこ座りをしている。胸元から煙草を取り出し、火を点ける。三枝がいたら頭を張り倒しただろうが、僕は注意をする気も起こらないので、あえて無視した。本当に煙草を好きで吸っているのではない。格好をつけているのだ。伊達は服にも奮発している。僕は言われないと分からないが、伊達のジーンズは2万円もするブランド品らしい。パステルピンクの派手なポロシャツは、やはりブランド物だ。派手なこと極まりないが、こいつにはこういう派手な格好が似合うのだから仕方がない。

僕は伊達の言葉に時計を見た。10時半だ。確かに鈴ちゃんにしては遅い。と言うか、彼女は遅刻をしたことがない。待ち合わせの30分前には来ている娘だ。

連絡するかな？ と思っていたら、携帯が鳴った。鈴ちゃんからだ。TAXIが渡月橋で、渋滞のため、もう10分も動かないと言う。渡月橋で下りるから、荷物を取りに来て欲しいと言う。

快諾して、渡月橋を見る。丁度、橋の半ばで止まっていた黒塗りのリムジンから、鈴ちゃんが下りるところだった。

豆粒のようにしか見えないはずなのに、まるで眼前にあるかのように鈴ちゃんの姿が見えた。

輝いていたのだ。鈴ちゃんは。

凜とした美しさのオーラは、周囲の空気を変えて、人目を奪った。それで騒然とした空

気までが変わった。老若男女を問わず、人々は息を飲み淡い桜吹雪を彩った振り袖の少女に魅入った。

「誰？ モデル？」

「芸能人じゃないの？」

そんな囁きが聞こえる。

続いて下りてきた三枝も注目を集めた。明るい若草色の着物を着こなすには、美人であることが絶対条件だ。三枝はその条件を満たしていた。三枝は着物美人の見本のようだった。

周囲がざわめくのと、鈴ちゃんが周囲をゆっくりと睥睨するのは同時だった。

『絶対零度の魔女』と学校で異名を取るだけのことはある。皆、言葉を飲み込み、後ずさって道を空ける。

(モーゼかよ?)

内心、そう思いながらも、渡月橋へ急ぐ。電話を聞いていた伊達も煙草をもみ消し、僕の後に続く。あの二人の元へ駆け寄るのは若干勇気を要した。不釣り合いもはなはなだし

い。「おい。振り袖で来るなんて聞いてたか？」

伊達が困惑の表情で尋ねて来る。僕は激しく頭を振った。

あいにく僕たちには鈴ちゃんのようなオーラはない。焦りながら、人混みをかき分けて、渡月橋へ急ぐ。鈴ちゃんと三枝は、僕と伊達が入混みに溺れるようにして進んでくるのに、鈴ちゃんは深々と頭を下げ、三枝は「おくい。こっちだよー」と声を上げて手を振る。その間、運転手の方はリアボックスから、大きなトランクケースを取り出していた。

彼女たちの下にたどり着いた時には、僕も伊達も肩で息をしていた。

観光客は何故か遠巻きに彼女たちと僕たちを見つめている。

「遅れてごめんなさい」

鈴を転がす声で鈴ちゃんは頭を下げる。ぞわりと背筋が総毛立った。彼女の周囲だけが二、三度温度が下がっている。顔を上げると作った笑顔が張り付いていた。くりくりした瞳が青く輝いている。とことん機嫌が悪くなっているのが僕には分かった。

「すいませんが、こちらの荷物をお願いします」

運転手さんの声に振り返ると、大きなトランクケースが三つもあった。海外旅行でも行く気なのだろうか？

僕が荷物を取りに行こうとすると、僕にだけ聞こえるように鈴ちゃんが囁いた。

「ここは青山？ 表参道？」

ぞわり。背筋に冷たい汗が出る。聞こえなかった振りをして、「すいません」と運転手さんに頭を下げて、荷物を受け取る。

「明美。着物で来るなら言ってくれよ。驚いたぞ。どこの美人かって。似合ってる。似合ってる。綺麗だぞ」

流石に口先の魔術師。伊達は鈴ちゃんの剣呑な空気にも気づかず、三枝を褒め称える。僕は無言で伊達の方にトランクケースを渡す。伊達はこちらも見ずに明美とじゃれ合いながら、それを受け取る。二つめを渡したところで、荷物の尋常ならざる量に気づいたようだ。

「何だあ〜？ この荷物？」

素っ頓狂な声を上げる。

「ほら、着物だしね。女の子だし、色々あるのよ。あなた達の荷物は？」

姉御が手をぱたぱたして言い訳する。

「駅のロッカーに入れた。着替えだけだから荷物と言う程ないよ」

伊達が疲れた声で呟いた。気持ちは分かる。一泊二日の旅 行にこんな荷物はあり得ない。

「こりゃ、ロッカーは無理だな。先にチェックインして荷物預けてしまおう」

幹事役の伊達が言う。無論、僕に否やはない。

鈴ちゃんは彫像のように無言で前の川面を睨んでいる。瞳が青くなって、見開かれている。この表情はヤバイ。怒り心頭に達している顔だ。誰が悪いと言う訳ではない。それは彼女も理解しているのだろうが、怒りの矛先がない事が余計怒りをつのらせているのだろう。それで彼女は黙って、目の前の川を親の敵のように睨み据えているのだ。冷え冷えとした何者をも廃絶するオーラは、他の観光客も感じるのだろう。鈴ちゃんの美貌に見とれながらも遠巻きにして、通り過ぎる。彼女の回りだけ人のいない空間が生まれていた。橋姫でも裸足で逃げ出すような怒気を放っているから当然だろう。

僕は、どうしたものかと耳の後ろをぼりぼりと描く。流石の伊達も気がついて、僕に近寄り小声で言う。

「おい。なんとかしてくれよ」

「……出来ると思うか？」

僕は絶望的な気分で答えた。僕の顔を見て伊達の顔色が白くなる。余程、酷い顔をしていたのだろう。どこか静かな場所で二人きりになれば、手は幾つかあるけれど、この嵯峨野にそんな場所が——！

まさに天啓！ その瞬間、閃いた。忘れていたけど、幼い時、僕は一度、父に連れられて嵯峨野に来たことがあった。そして、あの場所なら人気はない筈だ。

「伊達、僕と鈴ちゃんの荷物頼めるか？」

「あれを何とかしてくれるなら、何でもするぜ」

僕は渡月橋の西端を指さした。

「行き止まりに左に回る小道があるのが分かるか？」

「ああ。向こうは何もないぜ。人もまばらだろう」

「そこが狙い目さ。左へ暫く歩けば、山辺への階段がある。その階段を登ると小さな社がある。そこで待っているから荷物を頼む」

「——それは良いんだが、明美がべそかいてるだよ」

あの気丈な姉御が何故べそをかくのだろうか？

「なぜだ？」

「明美の振り袖、鈴ちゃんに押しつけられたらしんだが、時価で二千万はするらしい。荷物なんか持てないと言うんだ」

鈴ちゃんの家は昔からの富豪だ。着物も年代物が揃っている。元々、最上級の品にプレミアがついている。僕は伊達の両肩に手を置いた。

「頑張れ」

伊達は太い吐息をついた。

「ま、鈴ちゃんの機嫌が治るなら、なんでもやるさ。あのままじゃ恐ろしくてたまらない」
僕は伊達から離れると、鈴ちゃんの側へ近づいた。観光客の好奇の目が集まる。

「鈴ちゃん」

声をかけると水面を睨み据えていた視線を、睥睨するようにこちらに向ける。この見下すような視線が最近快感になりつつある。危ない傾向だ。

「——なに？」

鈴ちゃんは怒りで青くなった視線で、まっすぐ僕の瞳を見つめる。思わず背筋が総毛立つが、これで旨く機嫌を取り持てば鈴ちゃんは手のひらを返したように明るい美少女に戻るのだ。踏ん張りどころだ。

「電電宮って知っているかい？」

「知らない。パンフレットにも無かったわよ」

「観光地じゃないからね。ほら、西の端、人気がないだろう？ あそこを左へ回って階段を登ると中腹に小さな社があるんだ。人もいない。電気関係の人が奉る社で、虚空蔵求聞持法で明星が輝いた場所なんだ。なんで電気関係の会社が参るのかは知らないけれど……」

鈴ちゃんの顔つきが興味深いものに変わった。これはいける。

「虚空蔵？ 真言宗のお寺でもあるの？」

「階段を登り切れば法輪寺に出る。こちらも観光地としては有名ではないから、渡月橋のような人気はない。ほら、西の山並みを見てご覧よ」

言われて、鈴ちゃんは山並みを舐めるように見据えた。見開かれた目が徐々に細くなり、何かを追っている。口元に不適な笑みが浮かんだ。

「——龍脈りゅうみやくが走っているわね。なるほど、秦氏の西の結界いわけみたいね。岩磐いわぐらも点在しているようね。……登れるの？」

「その格好で登る気？ いずれにせよ無理だよ。江戸時代前から禁足地だ」

僕は内心ほくそ笑んでいた。鈴ちゃんは怒りを忘れ、靈的呪詛に興味をい抱き始めている。

「電電宮、見に行かない？ たぶん人はいないよ」

そこで鈴ちゃんは伊達と三枝がいらないことに気づいたようだ。

「明美と伊達君は、どこ？」

「ホテルに荷物を運んでくれている。姉御は流石に大きな荷物は持てないけどね」

「——ああ。気を遣わしたわね。悪いことをしたわ。神崎君もごめんなさい。ああいう人混みは、どうしても性に合わないの。頭に血が上って周りが分からなくなっていたの。ごめんなさい」

鈴ちゃんは深々と頭を下げた。怒気は消えている。第一関門はクリアしたようだ。

「なんで三枝にあんな高価な振り袖着せたのさ。萎縮してるぜ」

「あの程度の着物は着こなして自由に振るまえるようになってもらわないと、師匠として困るの。まあ修煉ね」

「なんか三枝が気の毒になった。」

「電電宮で待ち合せている。行こうか？」

鈴ちゃんは不適な笑みを浮かべて頷いた。

渡月橋を渡り切り、そのまま真っ直ぐ行こうとする僕の手を鈴ちゃんは握った。鈴ちゃんは立ち止まっている。感情の見えない青い瞳で僕を見据えている。

「……なに？」

その言葉に鈴ちゃんは氷のような表情で言った。

「何故、無視するの？ 貴方が気づかないとは言わせないわよ」

(……流石だ。やはり気づくのか)

内心、舌を巻いたが、僕はすつとぼけた。

鈴ちゃんは右側の川沿いの小道を、鋭い視線で見据えている。

「わたしが貴方を選んだのは、貴方も感じる人だからよ。貴方への好意の根拠を一つ潰すつもりかしら？ わたしと別れたのかしら？ そんなことしたら殺すわよ」

鈴ちゃんは詰め寄って来る。笑顔で……怖い。

「そ、そんな事はない！ でも、あれはヤバイだろう？ 蛇じゃないか？」

「冷たいのね。でもこの一帯を仕切る土地神よ。どんなに瘴気を放とうとも。それに、貴方は特別だし、わたしにも気づいている。あちらにおわす方はね。無視する方がやばくないかしら？」

僕はため息をついた。僕が特別と言うところは相変わらず納得出来なかったけれど……。

「君は何にでも筋を通すんだね？」

「あれは祟るわよ」

「分かった挨拶だけはしに行こう」

実は橋の上から気づいていた。それほどに瘴気が強い。桜に囲まれていても、入り口の朱の濃い鳥居は目に焼き付いていた。ただ、体の中で警戒警報が鳴っていたので、デートに相応しくないと無視していたのだ。女の気を強く放つ蛇身の神は怖い。相前に古い神のようだが、荒魂だ。これほど古い神なのに、瘴気は渡月橋まで届いていた。正直、恐ろしい。

でも、鈴ちゃんが行くと言うなら、僕は盾として行かざるを得ない。僕はむき出しの土の道へ踏み出した。鈴ちゃんは僕の左手に指を絡めて、斜め後ろから着いて来る。湿った土の匂いが鼻を突く。むせ返る程の瘴気が小道を覆っている。悪い意味で、人氣がまるで無い。およそ生き物の気配がないのだ。僕は緊張せざるを得ない。相手は夏休みに僕たちが対峙した凶つ蛇以上の怪物のようだ。(参るのも命がけだな……)僕は嘆息した。

ものの五分で神社の入り口に着いた。急勾配の細い石の階段の上に鮮やかと言うか、毒々しい朱色の鳥居がある。

(うわあ)

見上げて思わず驚嘆した。風が降りている。自然の風ではない。溢れる靈気を風と感ずるのだ。ふと気づくと、鈴ちゃんは僕の手を放し、絶対零度と称される視線で神社の由来書を見ていた。小馬鹿にしたような笑みを浮かべている。

見ると「棕谷宗像神社」とあり、市杵島姫を祀ると言う。嵐山の弁天様と言われ、金運向上・縁結びの御利益があると言う。そりゃ、鈴ちゃんが笑うのも当然だろう。この神は贄を求める崇神だ。贄が足りない災いをなす類の神だ。ご利益を望むのがおかしい。鈴ちゃんは絶対零度の視線を僕に向ける。クイとアゴを上げて、先に行けと促した。

「えく。ヤダよ。二人で行こうよ」

心細くて、僕は馬鹿な事を言ってしまった。予想通り、鈴ちゃんの視線は氷の矢となり、表情が消えて氷の彫像となる。

ボリボリと僕は頭を掻いた。

「あく。悪い。失言だった。行きます。先に一人で行きます」

そう言つて、万歳する。鈴ちゃんは『早く行きなさい』とばかりに、表情の消えた顔のままで、氷の視線で僕を射る。前門の狼、後門の虎つて、こーいう状況を言うのだろう。

まあ、弁天と言われる神にアベックで参るのは馬鹿だ。誰だよ？ 弁財天を縁結びの神様にしたのは？ あれは嫉妬深いので、男女の仲を裂くものなのに……。

階段を昇り、朱色の鳥居を潜ると、凄まじい冷気が僕を押し戻そうと押し寄せた。その瞬間、僕の中の何かが変わった。すーっと体が冷えて行くのが分かる。

「そう凄むな。巫女風情が……」

薄ら笑いを浮かべて、僕の形をした者が冷たい声で囁く。

「消し去るぞ」そう凄むと、靈気が萎縮した。社にすーっと戻って行く。

境内に入る。猫の額ほどの境内だ。神社は寂れている。

鈴を鳴らし、柏手を打ち、頭を下げる。そして念じる。

『我が参るのだ。向こう百年蟄居せよ』

その言葉に僕自身が驚いて、我に返った。夢から覚めた思いがした。自分の体を見て、あちこち叩いてみる。ちゃんと僕の体だ。さっきの台詞は悪い病気が出たようだ。なんだか安心する。

階段を下りると、由緒書に背中を預けていた鈴ちゃんが笑顔を向けた。

「流石ね乱気が消えたわ」

えっと思つた。確かに瘴気が消えている。でも僕は何もしていない。

「ええ。ええ。そうでしょうとも。貴方は何もしていないのよね。蛇の方が勝手に萎縮しただけ。わたしはフォローしてくるわ。待つて」

鈴ちゃんはその言うのと、振り袖なのに器用に階段を駆け上つて、境内へ姿を消した。僕は女性の嗚咽を聞いた気がした。恐らく空耳だ。鈴ちゃんが階段を下りて来る時には、神社の気は柔らかく変わつていた。どんな魔法なのかと思つたが、鈴ちゃんに何をしたらのかは聞かなかつた。

降りて来る鈴ちゃんは満面の笑顔だった。

トンと階段の途中でジャンプすると、そのまま僕の首に抱きついて体を預けて来た。危うくこけるところだったが、なんとか抱きしめた。鈴ちゃんはそのまま、僕の唇を吸った。頭が白くなった。不意打ちだったから。僕は本能の脊椎反射で、さらに鈴ちゃんを強く抱きしめ、こちらからも舌を絡めて攻めていた。

「——ああ」

鈴ちゃんは切ない声を上げて。軟体動物のように体の力を失った。唇を放し僕の首筋から、へなへなと地に落ちる鈴ちゃんの体をそっと支える。鈴ちゃんは荒い息をして僕に体重を預けて居たが、それも暫しの愉悦。ゆっくりと力を取り戻し、自分の足できちんと立った。僕と目が合うと、顔を朱に染め、背中を向ける。結った髪の毛が眩しい。着物でも背中中のラインと、形の良いお尻は隠せない。僕は今晚、理性が保つのだろうか？

そんな事を考えていると、鈴ちゃんは、くると振り返った。ひまわりのような笑顔を向ける。

「じゃ、行こうか？ 電電宮へ」

僕は笑顔で答えて鈴ちゃんの手を握った。

(11)

法輪寺の裏口へ続く階段の真ん中辺りに電電宮はあった。社は大きくない。ただ有名な鉄道会社や電気会社のお布施が集まっている。こんな小さな社にこれほどお布施が集まっているとは思わなかった。様々な電気関係の会社のぼりや石碑が集まっている。

社は階段の中腹の猫の額ほどの場所にある。予想通り人気は無かった。鈴ちゃんは魔女モードに切り替わった。不適な笑みは凄みを増している。

「虚空蔵求聞持法で、明星が降りたとあるわね」

「……うん。そう書いてあるね」

「笑わせるわね。ここは呪法の場所に替わっているわ。利用させてもらいましょう」

「利用って何をするのさ？」

「人払いの结界を作る。この人混みでもここでやれば、それなりの効果があるでしょう」

鈴ちゃんは僕の手を握ると抱き寄せた。いきなりなので、又、胸が高鳴ったが、鈴ちゃんに、そういう甘い雰囲気はない。

鈴ちゃんは、もう一方の手で虚空に陣を描いた。そして、僕の知らない真言を唱える。

「ええい！」

鈴ちゃんの裂帛の気合いが放たれると、確かに僕らを包む空気が変わった。五メートル四方の感覚で、空気が冷気を帯びる。

次の瞬間、鈴ちゃんは凄勢いで後方へ飛び下がった。きつとした視線で何か睨んでる。きつと前世は野良猫だったに違いない。そう思わせる動きだった。

僕はその気配に気づかなかった。鈴ちゃんの視線の先に、卒業式帰りと言う感じの艶やかな袴姿の若い女性が立っていた。女性は呆然とした表情をしている。落ち着かぬ様子で周囲を見回している。気弱な感じの女性で武道の経験があるとは思えなかったが、僕は彼女に気づけなかった。己の不覚に歯がみする。

ウサギのようなイメージのその女性は唐突に現れたのだ。

階段を登って来た気配もなく、降りて来た気配も感じなかった。

「———貴女、何者？」

鈴ちゃんは目を細め、鋭く彼女を見据えて言った。

彼女が霊や怪異の類なら、鈴ちゃんもここまで殺気立たなかっただろう。彼女はきちんとした肉体を持ったごく普通の人間だったのだ。こういう時は物事に動じないように振る舞える僕の出番になる。正直、不気味さを感じていたが、目の前の若い女性は気弱な感じで、彼女自身動揺しているのが分かった。

「———どちら様です？ どこから来られたのですか？」

静かに訊いた。

袴姿の女性はその言葉にさらに動揺したようだ。そして言った。

「あの。ここはどこですか？ わたし、迷ってしまって……」

小馬鹿にされたかと思っただが、嘘をつけるタイプに見えない。典型的な世間知らずのお嬢様に感じられた。おどおどと怯えているのが分かった。

鈴ちゃんが、ゆっくりと歩み寄って来て、そのお嬢様と顔と顔がくっつくくらい近づくと、絶対零度の視線で訊ねた。

「わたし、彩宮鈴香と申します。こちらは神崎浩平君。わたしのフィアンセです。お名前を聞かせて頂けますか。迷われているのなら、道案内くらいはしますわよ」

お嬢様は、又、動揺した。

「フ、フィアンセ？」

「許嫁です」

鋭く鈴ちゃんと言う。絶対零度の視線でその口調は怖いよ。鈴ちゃん。

「——で、お名前は？」

「あの——」

お嬢様は後ずさった。

「名乗るのは困るんです」

この台詞はキツパリと言った。相当名の知れた名家の娘さんなのかもしれない。気が弱く見えるが、絶対零度モードの鈴ちゃんに、こうもきっぱり答えるのなら、芯は案外強いかもしれない。

鈴ちゃんはため息をつくど絶対零度モードを解いた。

「じゃあ、はいからさんだ。そう呼びますよ」

お嬢さんは顔を赤らめた。

「そんな、はいからさんだなんて……」

「だって、貴女、お洒落じゃない？ お召し物も流行のものじゃないですか？ はいからさんで良いですね？」

こういう時の鈴ちゃんは有無を言わさぬ迫力がある。

僕は違和感を感じていた。卒業式の袴姿に流行なんてあるのだろうか？ 確かに生地一つ取っても高級感が漂うのは、鈴ちゃんとの付き合いのおかげで分かるけど……

「お待ちせー！ー！」

突き抜けた明るい声で、恐る恐る階段を登る三枝を後ろに伊達が階段を上がって来た。

伊達よ。三枝の手を引く位のフォローはしろ。

まあ、伊達は鈴ちゃんが、まだ怒っていないか怖いのだ。だから、極力明るく振る舞っている。

しかし——この、はいからさんをどう紹介したものか。迷子だと言うし、捨て置く訳にもいかないだろう。なんとも奇妙な組み合わせになったものだなと思った。

「ああ。伊達。早かったな。荷物、済まなかった。三枝も済まなかったな」

僕がそう答えると、鈴ちゃんが、とととと階段を下りて伊達の手を取った。

「ごめんなさい。伊達君。わたしのせいだ……」

普段の鈴ちゃんからは考えられない言動に、伊達は狼狽えた。見る見る顔を赤くして、握られた手を振りほどいて、空中でひらひらと踊らせる。

「こ、これぐらい、何てことないぜ。鈴ちゃんの為なら広沢の池で泳いだって良い」

「それは死ぬから、止めた方が良いわね」

唐突に冷静な声に戻って、鈴ちゃんは言う。その豹変が恐ろしかったのだろう。伊達は奇妙な踊りの格好のまま固まった。

そんな伊達を無視して、鈴ちゃんは遅れて階段を上って来る明美の元へ駆け寄る。

「大丈夫？ 気を遣わせたわね？」

三枝は憔悴した顔に無理矢理笑顔を浮かべる。そして言った。

「それより、彼女は誰なの？」

目ではいからさんを見つめて、三枝は問う。伊達がうんうんと頷いている。

「はいからさんよ。迷子だと言うから、道案内して上げようかと思っただけだけど、駄目かな？」

姉御。もとい、三枝明美は大きく目を見開いて、息を飲んだ。他人には、いや、人間全般にとことん排他的な彩宮鈴香が、怪しげな袴姿の娘の為に道案内をしよう。それはもう、驚天動地の出来事だったのだろう。三枝は大きく息を吸い、鈴ちゃんの耳元に小声で言う。

「鈴。分かっているの？ 私たち初めてのお泊まりデートなんだよ？ そこに他人が混じって良いの？」

鈴ちゃんは意味ありげな含み笑いをした。

「わたしは連れて行きたいな。彼女、面白いよ。良いスパイスだわ」

その答えを聞くと、三枝は真っ直ぐに『はいからさん(仮称)』の下へ歩み寄った。

「こんにちは」

スポーツマンらしく爽やかに声をかける。はいからさんは、ぴくりと体を震わしたが、手を前で揃えて深々とお辞儀をする。「こんにちは」。綺麗な声で答える。

「今日は卒業式ですか？ どちらの学校ですか？」

はいからさんは驚いたようだ。

「なぜ卒業式だと分かるのです？」

「だって、袴姿なんて卒業式でない shouldn't でしょう？」

「———？ 学校にはいつも袴姿で通っていましたけれど？」

噛み合わせぬ会話に、はいからさんは、おどおどとする。

姉御はこめかみを抑えた。

「私、三枝明美と申します。お名前をお聞きして良いですか？」

「ああ、駄目。駄目。明美。彼女、匿名希望なの。だから『はいからさん』」

『はいからさん』ってマンガの？」

「そうよ。似てるでしょ？」

鈴ちゃんは明るく笑う。

「確かに似てるけど……」

三枝は難しい顔になる。気持ちは分かる。名前は言えない。そして迷子だと言う。怪しいこと、この上ない。

「迷子とおっしゃいましたね？ どこから来られたのですか？ どこへ行かれるのですか？」

はいからさんは、とたんにオドオドし始めた。不安が滲み出ている。

「……あの、分からないんです」

「はあ？」

僕と姉御がはもった。

「東京から汽車で来たのは覚えてるんです。でも、嵯峨野で会おうと言う約束だけで、今まで自分がどこに居たのか分かりません。ここは嵯峨野ですよね？ 嵯峨野のどこなんでしょう？ 気が付いたらここに居たんです。あの、あの、お二方は華族の方なんですよか？ そのお召し物、華族の方でもないし着れないですよね？」

姉御はその言葉にぼかんとして、言葉を失った。僕も言葉の意味が分からなかった。

鈴ちゃんが間に入る。

「まあまあ、問い詰めないで上げて。はいからさん。わたしは華族です。彩宮の家はご存知？ でも、心配しないで。貴女のこと言い触らしはしません。待ち合わせの御仁は思いませんか？」

はいからさんは、顔を朱に染めながらも「はい」ときっぱり答えた。

「わたし達は思い人と観光へ来てます。付いて来なさいな。その内、思い出すでしょう。約束しますよ。貴女の思い人と会わせて差し上げますわ」

どんな自信があるのか？ 鈴ちゃんはきっぱりとそう言った。はいからさんは目に涙を浮かべた。

「よろしく願います」

深々と頭を下げた。

「じゃ、法輪寺の境内に行って、ちよっとお茶でもしましょう。伊達君。水筒は持って来てくれた？」

伊達は黙って頷く。僕は伊達が一言も発していないことに気づいた。なんであれ、こんな可愛い娘がいれば黙っている伊達ではない。どうしたのかと視線を向けると、伊達は青ざめていた。

伊達は僕の視線に気づいて、近寄って来た。耳元で囁く。

「なあ、神崎。お前、幽霊とか分かるんだよな？」

何を言おうとしているのか分からない。女性陣は石段を上がり、法輪寺の境内へ向かっている。

「まあ、分かるよ」

「あれは人か？」

「なんかピントが外れているけど、間違いない生身の人だよ。なんなら、お得意のセクハラしてみなよ」

「——影がねえ」

「え？」

「だから、あの『はいからさん』か？ 影がないんだ。気づかなかったのか？ 影のない人間がいるのか？」

夏休みに怪異に襲われた伊達は必要以上に怯えている。

僕は何か分かってしまった気がした。

「吸血鬼が回るには陽が高い。そういう人間もいるさ。怯えるな。伊達」

「そんな人間、俺は聞いたことがねえよ……」

僕は伊達の肩を掴むとその目を見据えた。

「気にするな。あれは怪異ではない」

そう言つて肩を、ぽんぽんと叩いてやる。伊達は納得し難い顔つきだったが、不承不承「分かった」と答えた。

「他言無用だぞ。姉御にも言うな」

伊達は黙って頷いた。

(三)

電電宮から石畳の階段を少し上ると法輪寺の境内にでる。境内に出た瞬間、僕の視界は薄桃色の霧に覆われた。霧は境内全体を覆っており、西の山並みから降りて来る風にオーロラのように変化する。その霧の中に華やかな振り袖姿の少女がいる様は桃源郷を見るようで、現実感が失われた。見事なまでに桜が満開だった。しかも、僕たちの他に誰もいない。絶好の穴場と言えた。他に人がないのは鈴ちゃんの「人払いの結界」が働いているのだろうか？ このような場所を僕たちだけで独占するのは、罪を犯しているようで、どこか不安を感じる。桜に酔うとは、こういう心地を言うのだろうか？ 皆も感嘆の声を上げ、このような穴場を選んだ僕を褒め称えた。気恥ずかしい。僕はあまり人が来ない程度のことしか知らなかったのだ。皆も桜に酔っているのだろうか？ 妙に高揚してはしゃいでいた。

ただ、僕は境内のあちこちに、無造作に岩磐いわくが転がっているのが気になった。しめ縄をしていないから、伊達や三枝には大きな岩の塊位にしか思っていないだろう。岩磐は只の岩ではない。古代祭祀で神が宿る岩として崇められ、儀式が行われたものだ。当然、只の岩にはない靈気を帯びている。境内を囲む様に散在する岩磐。それは人為的パワースポットを形成していた。偶然ではない。誰かが仕掛けたのだ。

伊達がいそいそとシートを敷いている。鈴ちゃんが敷く場所を指示している。パワースポットの中心を指し示している。流石だ、この寺の呪的構造を一目で看破しているのだ。

シートに座る時には「本堂にお尻向けて座らないでね」と忠告するのも忘れない。

本堂の気は強い。仏教の虚空蔵菩薩が祀られているとは思えない。この気は神社のそれに近い。山沿いの敷地の一角に立派な仏塔が建っている。それは何かを隠しているか、境界として、山から下りてくる何かを塞いでいるように見える。

後ろの仏塔を見据えていると、隣に座る鈴ちゃんが「浩平君」と声をかけ、紙コップに紅茶を注いでくれる。鈴ちゃんは小声で言った。

「あまり見ない方がよいよ。あれはもう対処出来るものではないわ。貴方は引き込まれ易いのだから、旅行の間は、そう言うのを忘れましょう」

いつにない優しい声色。そこに鈴ちゃんの僕に対する不安を感じた。僕がいなくなることで、なによりも鈴ちゃんは怖いのだ。それ位は分かっている。日頃の毒舌・お説教はその裏返しだ。

僕は鈴ちゃんからポットを受け取ると、一人、本殿に向かっている『はいからさん』にお茶を注いだ。

「あっ、すいません」

はいからさんは、恐縮しながら紙コップを差し出す。お茶を注ぎながら、彼女を観察す

る。こうやって対峙すると、肉体を持つ若い女性だと分かる。抑えても華やかな色気が出ている。シートがお尻の形に凹んでいるから、体重もある生身の女性だとしか感じられない。だが、伊達の指摘の通り影がない。ふむと僕は考え込む。影が出来ない人間は希に居る。例えば、死期が極端に近い人間は影が無かったり、写真に写らなかつたりする。「影が薄い」と言う表現はこの事から生まれた言葉だ。

僕は、はいからさんを見る。死期が近い気配は無い。彼女はおちよぼ口で紅茶を啜って、「あら？」と驚嘆の声を上げた。

「こんな美味いお紅茶は、初めて頂きます。銀座のカフェにもありませんね」
驚きと微笑みが入り交じった表情で、鈴ちゃんを見据える。

「そう？ お気に召して何よりですわ」

鈴ちゃんは満面の笑みで返す。はいからさんが鈴ちゃんを見る目に尊敬が加わった。僕は怖気に首を竦めていた。

なに？ その笑顔？ その台詞回し？ 作り物じゃないか。鈴ちゃんは、はいからさんに心を許した訳ではないようだ。鈴ちゃんのこういう対応は普通は敵対する者へ向けられる。そして、相手の油断を誘ってとことん地獄へ送り込むのが鈴ちゃんの手法だ。

はいからさんは、その点、とことんウブだった。

「尊敬いたしますわ。驕るところがないのですね。貿易商でもされておられるのでしょうか？」

「照れます。これはわたしの趣味で仕入れた物ですよ。それに家は貿易商ではありません。しがない和菓子屋です」

また、極上の笑顔で答える鈴ちゃん。

はいからさんは芯から驚いた顔をした。

「貴女が仕入れをされたのですか？」

「人に頼んだだけですわよ」

「お若いのに、これだけの品を人を使って、ご自分で楽しまれるなんて……凄いわ。感服します」

「そこまで褒められると悪い気はしませんね。どうぞ、お茶受けです。家の品です。こちらにも気に入って頂けると嬉しいのですけど」

その言葉で、計ったようなタイミングで、三枝が和紙に載せてくず餅をはいからさんの前に置く。無言で頭をはいからさんに下げると、正座のまますと自分の席に戻る。

気づくと僕と鈴ちゃんの前にもくず餅が置かれていた。

鈴ちゃんは目の端で三枝の挙動を見ていたようだ。にっこり笑うと三枝に頭を下げる。

はいからさんだけでなく、伊達も驚いた表情で三枝を見ていた。

茶道は奥が深い。三枝の無駄のない挙動は着物をさらに引き立たせ、三枝自身をも輝かせていた。

「紅茶にくず餅と言うのは気が利いていませんが、流石に野点の用意は出来ませんから」
鈴ちゃんはにっこりと笑顔を作る。それに多弁だ。そう言えば、鈴ちゃんは父親から家督を継いだと言っていた。卒業したら家督を継ぐ約束だったらしい。どういう経緯でそんな約束になったのか、あまり考えたくない。ただ、鈴ちゃんはバブルの崩壊も事前に予言していて、彼女を信望して相談に来る経済人が多かったと言う。その為、彼女が家督を継

ぐのも、周囲の経済関係者からも歓迎されたと聞く。鈴ちゃんは、卒業後、色んな会社の役員会にも出席している。これぐらいの芸当は出来て当然なのだろうが——僕には過ぎた彼女だな。

はいからさんは気を飲まれていた。鈴ちゃんと三枝を交互に見つめる。驚嘆している。そりやそうだろう。自分より年下とおぼしき少女が二人、見事な挙動を見せたのだ。

伊達に至っては、惚けたように口を開け、表情を崩さない三枝に見入っている。伊達よ。分かったか？ 三枝は極上の女なんだよ。こういう挙動が出来る女なんだ。普段はお前の馬鹿に付き合っているだけなんだ。鈴ちゃんが僕には過ぎた彼女であるように、三枝もお前には過ぎた女なんだよ。お互い捨てられないように精進しようぜ。

はいからさんは気を取り直したように、大きく息を吐くと、くず餅を上品に竹の棒で切り、その小さなおちよぼ口へ運ぶ。

目の端で僕はそれを見ていた。

おや？ 中々……。挙動に無駄が無い。はいからさんもただ者じゃない。余程良家の娘さんだと思った僕の目も確かなものだったようだ。

はいからさんは、くず餅を口に入れて目を丸くした。

「……極上の和三盆。極上の吉野葛。職人さんの卓越した技術。これは素晴らしいの一言に尽きます」

喜色を浮かべて本当に嬉しそうにはいからさんは叫んだ。

吉野葛は判るけど、和三盆ってなんだ？

そう思いながら、僕はくず餅を手に取り、丸ごと口に運んだ。作法じゃない事は何となく判っていたが、そんな堅苦しい真似は出来ない。出来ない事はしないのが僕の主義だ。

僕の仕草を見て、伊達も安心したように、くず餅を口に豪快に放り込む。そして叫んだ。

「旨めえっ！ 口の中で溶けるぞこれ！」

はいからさんは、それにクスクスと笑った。なんだ可愛いじゃないか。

「殿方は豪快ですね。それでいて野卑じゃない。武道を修めた方ですね」

「えっ？ なんて判るんすか？」

伊達が素つ頓狂な声を上げる。

「わたしも薙刀を嗜むのです。恥ずかしながら」

はいからさんは楽しげに笑う。

「かなりの達人とお見受けしました」

流石は伊達。はいからさんの心を開かせた。

「いやあ、俺なんかまだまだっす。こいつは凄いですよ。今年の全日本剣道大会で優勝しやがったんです。顧問の鬼教官を病院送りにもしてるんですよ」

要らぬことを言う。

「瀬尾が出ていなかったからな。運が良かった。悪かったな。本当はお前が出る筈だったのに」

「良く言う。オール一本勝ちなんて、あの鳴神先生以外じゃ初めてじゃないか。その鳴神先生を病院送りしているんだ。流石は鳴神四段の秘蔵っ子とみんな言ってる」

「次は勝てないよ。鳴神先生はそんなに甘くない。見ろ。このみみず腫れ。未だに引かないんだ。片手打ちでだぞ。女だぞ。化け物だよ。鳴神先生は。それに瀬尾は鳴神先生と同

じ域に高校一年で達しているんだ。奴とやらんと鳴神先生は納得してくれない」
首筋の傷を見せながら僕は言った。

「そう言えば、お祝いをしていなかったわね……」

鈴ちゃんがぼそりと呟く。

「そんな気を遣ってくれなくて良いよ」

「あら？ 自分の夫が日本一になって喜ばないわたしだと思ったの？ そうね。今晚、わたしの大事なものを上げると言うのはどう？」

その意味するところを想像して、僕は耳たぶまで朱に染める。はいからさんまで真っ赤になっている。

「あら？ 真っ赤になって……どうしたの？ 何が欲しいのか言っただらんさいな」

鈴ちゃんはここぞとばかりに責めてくる。悔しいが何を言っても敵わないだろう。

「拒否権を行使する」

僕はそう言っただけ、口を真一文字に結び、腕組みして瞑目する。

「あら、突っ込み甲斐がないわね。——なによ。初めてじゃない癖に」

鈴ちゃんの拗ねた口調に、心臓が口から出るかと思うほど僕は動揺した。だが、動揺すればするほど無表情になるのが、僕の性癖である。傍目には泰然としている様に見えただろう。だが、面子が悪かった。

鈴ちゃんは当然、もう僕の性癖を知っているし、伊達と三枝は中学からの付き合いである。三枝が目を輝かせて、にじり寄り、上目使いで僕を見る。獲物を見つけた猫の顔だ。

「へえ、神崎。経験者なんだあ。鈴をさしおいてやるじゃない？ 相手は誰よ。ほら、吐いて楽になれ」

クスクス笑って何を言う。僕は刑事に尋問される容疑者か？

「ほれほれほれ」

三枝は下手から、僕の顎をくすぐる。止せよ！

「おい、姉御。鈴ちゃんの前でそういう真似をするな」

嫉妬深いんだぞ。鈴ちゃんは。

三枝は、一瞬、鈴ちゃんを振り返る。

「良いわよ。吐かせなさい。三枝刑事」

冷たい声で三白眼になった鈴ちゃんが言う。異端裁判受けている気がした。

「そうね。今まで試合じゃ弱かった神崎がいきなり強くなったのは夏よね？ 正彦？」

「んだ。んだ。でも、マジかよ？ 神崎？ お前、童貞やと言っただよな？」

そんなやり取りを、はいからさんは、口元に両手を寄せた乙女チックなポーズで、興味しんしんと見つめていた。

「じゃ、心当たりがあるわ。今までどんな女の子にも興味を示さなかった神崎が籠絡されるような相手。しかもこの夏。そうなると答えは絞られる訳なのよ」

指を天に向かって指しながら、三枝は得意げに言う。クスクスと含み笑いをしながら。今から、ダッシュで家に帰ろうかと思った。

「ずばり言うわよ。相手は桜ヶ丘高校が誇る才媛にして、桜ヶ丘高校の歴史に名を残す随一の美女。パーフェクトビューティーの名を冠する杉浦響子先輩！ どうよ？」

雷に打たれたような衝撃を味わった。心停止するかと思った。

その瞬間、『この、戯けが！』と高く響く女性の声が境内に鳴り響いた。

お姉さん。あんた、なんちゆう事をするんや！

一瞬、皆、無言になり動きを止める。

「なんだ？　なんだ？　今、声が響いたよな？　凄いやらしい女の声、聞こえたよな？」

伊達が動揺する。

「聞こえた！　この声聞いたことある！」

三枝も叫ぶ。

「わたしも聞こえました。凄い声。でも気品のある声がしました」

皆が動揺する中、僕と鈴ちゃんだけが無言で居た。もともと僕は死を前にした死刑囚の無言。脂汗がしたり落ちる。鈴ちゃんは怒りの無言。三白眼が青く輝いている。

「鈴！　あんたも聞いたわよね？」

「はあ……」鈴ちゃんは大きなため息をついた。怒りのオーラが消えていく。

鈴ちゃんは、すううと全員を見回す。僕を除く全員の視線が彼女に集まる。

「神崎君の後ろのお姉さんの声よ。あの人が神崎君から異性を排除してきたんだけど、女としては杉浦さんの情欲の方が強かった。そういうことよ。余程、腹に据えかねていたのね。後ろのお姉さん……」

その言葉に皆が言葉を失う。はいからさんまで事情を知らないのに雰囲気飲まれて黙り込む。

沈黙を最初に破ったのは、歩く無節操男・伊達だった。

「え？　え？　マジ？　あのトップモデルクラスの美女を神崎が抱いたの？」

「抱いたんじゃないくて、犯されたようなものだったんだけどね……」

まるで見て来たように、鈴ちゃんは言う。その諦観の籠もった声の方が僕の心を傷つけた。

「……鈴。あんた、それで良いの？　何時から知っていたの？」

「仕方ないよ。明美。わたしと付き合う前だったんだから……。明美だって、伊達君を責めてないでしょう？」

「じゃあ、杉浦さんがプールに一緒に来たのは——」

「あてつけ。だったんでしょね。今でも杉浦さんは怖いよ。わたし、言われたもの。神崎君が傷つくようなことがあったら、いつでも横取りするって。あの人に勝てると思う程、自惚れていないわ」

ここで僕が黙秘をしていたら、僕は最低の男になる。

僕は意を決して目を開け、鈴ちゃんを見つめた。

「鈴ちゃん！」

「は、はい！」

怒ったような僕の声に、鈴ちゃんは反射的に返事をする。

「僕は鈴ちゃんを愛してる。他の誰よりもだ。自分自身よりも鈴ちゃんが大事なんだ！」
衆人環視の中、僕はとんでもない台詞を叫んでいた。見栄も体裁もなかった。

「何があっても離さない。逃げたって地の果てまで追いかけてやる！」

叫んで、我ながら悪質なストーリーカーみたいな台詞だと思ったが、本心なのだから仕方がない。

いつの間にか、僕は立ち上がり、鈴ちゃんの肩を掴んでいた。

鈴ちゃんは魂が抜けたように、体から力が抜けていた。呆けたように僕を焦点の合わない瞳で見つめていた。それは皆も同じだった。いくら身内同然の面子の前とは言え、とんでもない迫力で、神社の中心で愛を叫んだのだ。そりゃ、呆れる。

どこからか、嗚咽が聞こえて来た。見ると鈴ちゃんの顔がみるみる崩れて、涙まみれになっている。それと何故かはいからさんまで泣いていた。

「だって、貴方、誰でも助けるじゃない。後ろのお姉さんだって、貴方が助けたから離れないんじゃない。わたし、お姉さんを説得するのに二年もかかったんだよ。ようやく、お姉さんを納得させることが出来たから、告白したんじゃない。でも、貴方、困ってる人がいたら、困ってる女の人がいいたら、死んでも生きてても、助けるじゃない。貴方、気づいてる？ お姉さん背負ってることで寿命削っているのよ。杉浦さんだって、助けを求めて来たら、貴方助けるに決まってるじゃない」

泣きじゃくりながら、鈴ちゃんと言う。僕は鈴ちゃんの力の抜けた体を抱きしめた。強く強く抱きしめた。

「響子姉が助けを求めたら、助ける。響子姉は僕にとって本当の姉以上の存在だから。でも、愛じゃない。誰が僕を助けてくれたと思う？ 鈴ちゃんだよ。鈴ちゃんは僕を助けてくれた。僕に愛を教えてくれた。だから離さない。絶対にだ」

「本当に？ 絶対に？」

鈴ちゃんは継るように僕を見上げた。「離さないよ」そう囁いて僕は鈴ちゃんを抱きしめてキスをした。

長いキスの後、鈴ちゃんと僕はなんとなく体を離れた。お互い気恥ずかしくなり、赤くなった顔を下に向けて、ゆっくりと体を離れた。

「ブラボー！」

伊達が立ち上がり拍手しながら、そう叫んだ。それで僕たちは我に返った。今度は羞恥に真っ赤になる。三枝は啞然とした表情で僕たちを見つめている。僕は又、無表情に戻って何事もなかったような顔をしたが、一部始終を見られていた事実は誤魔化しようがない。

鈴ちゃんも「止めてよ」と真っ赤な顔で言ったが、まだ涙は止まらず、しゃくりを上げている。はいからさんが立ち上がり、シルクのハンカチを取り出して鈴ちゃんの顔を拭きながら、背を撫でている。

僕と鈴ちゃんの卒業旅行はとんでもない幕開けから始まった。

(一)

鈴ちゃんは化粧を直すと言って、手水へと席を立った。はいからさんが脇から支えるように、付き添って行った。鈴ちゃん、化粧なんかしてたかな？ 僕は首を傾げた。ファンデーションくらいはしていたかもしれないが、彼女は化粧の必要がないのだ。肌は新雪を思わすような白さで、唇は薄く、紅をささずとも朱をさしたように鮮やかだ。気を落ち着けるのと、涙目を直しに行つたのだろうと思つた。

一見、表情のない冷たい顔で鈴ちゃんの背を見つめていた三枝が、鈴ちゃんの姿が視界から消えた時、静かな挙動ですつと立ち上がる。伊達が何故か怯えた表情で三枝を見上げた。

(——なんだ？)

そう思っていると、背筋に定規を当てたような真つ直ぐな姿勢で、三枝は言つた。

「——正彦。ここ片付けてくれるかな？ 茶器は私がやるから、割らないように隅へ寄せて置いて頂戴」

「分かつた。やっておく」

答える伊達は青ざめて見えた。三枝は冷え冷えとした声で視線を動かさずに、更に言う。

「神崎。ちよつと来てくれる」

鈍い僕にも三枝が体の芯から怒っていることが分かつた。僕は黙って立ち上がる。三枝は弓を射る時の目で、一瞬、僕を射貫くと、かかを軸にくるりと反転して、電電宮へとやや早足で進む。頭の上下動が殆ど無い。流石、弓道と茶道で鍛えているだけのことはある。僕はそのそりと立ち上がり、姉御の後ろに付く。立ち上がる時、伊達が目線で『気をつけろ』と言つた。僕は頷き、腹をくくつた。

三枝は振り返ることもなく、電電宮の前まで進んでピタリと止まつた。止まつたまま、又、かかをを支点に180度回転して、真つ正面から僕を見据えた。血の気が失せた青白い顔に表情は無い。瞳の瞳孔が死人の様に開いていて映画「ジョーズ」に出て来た巨大ホオジロサメを連想した。背筋が総毛立つた。その瞬間、三枝の背後から風が吹き上げた。三枝は櫻吹雪の中、静かに佇んで、僕を見ている。瞳孔が開いているから眼が深遠に続く漆黒の闇へ誘う深い穴に見える。鬼女だと思つた。

「神崎、目を瞑ってくれるかな？」

地を這うような低い声で、姉御は言つた。僕は気圧されて、少し後ずさつた位置で止まつて、「お、おう」と答えて素直に眼を閉じた。次の瞬間、僕は全くの無意識で顎を引いて上体を後ろにずらしていた。鼻先をブンと風を斬って何かが通り過ぎた。「何だ？」と思うって目を開けると、全体重をかけた右の拳を空振りして、たたらを踏んで三枝が倒れるところだった。僕は反射的に三枝の胴を抱えて支えた。三枝は憤怒の表情で、抱きかかえられた姿勢で怒鳴る。

「なんで、よけるのよ！」

「避けるわ！ お前、グーで男を殴るのかよ！」

「離せ！ この外道！ 私に触るな！」

「——離しても良いけど、良いのか？ お前、この着物の値段分かつているのかよ？」

その言葉に、三枝は黙って姿勢を整え、自ら立ち上がる。表情は仏頂面だ。

「で、なんで僕が鉄拳制裁をうけるんだよ？ 姉御？」

心臓がバクバク言っていたが、伊達に哲学者とあだ名を付けられていた訳じゃない。僕は無表情になって、何事も無かったように訊ねた。

着物の襟を直して、三枝は真顔で訊いた。

「アンタ。自分が何を言ったか理解してるの？」

——？ 意味が分からなかった。大恥かいて、キスシーンまで演じたのに、何が三枝を怒らしているか分からない。

「僕は鈴ちゃんを愛していると叫んだぞ！ ちゃんと鈴ちゃんを抱きしめた。それが悪いのかよ？」

三枝は怒った猫の様に僕を見据えて黙り込んだ。怖いから止めて欲しい。

「その前よ！ あんた、杉浦先輩を助けるって断言したんだよ？ まさか、忘れたと言うの？」

「当たり前じゃないか！ 響子姉は、僕の身内だ。本当の姉以上の人なんだ！」

「それ、二股と言うんだよ。神崎、姉弟で肉体関係が成立する？ 杉浦さんを助ける？」

どうやって助けるのさ？ あの人は又、貴方を求めるわよ。貴方はそれに贖えるの？ 貴方はね、大音声で二股宣言したんだ！ 鈴があそこで引いたのは、神崎、アンタを失いたく無かったからよ！ 今、ここで誓いなさい。もう二度と杉浦先輩とは行き会わないと！」

三枝はここに来て、大音声で僕を怒鳴り付けた。その気迫は今の剣道の師である鳴神先生に匹敵するものだった。以前の僕ならその気迫の前に素直に頭を下げて、意味もなく謝ったかもしれない。だけど僕は鈴ちゃんと死線を潜り抜けたのだ。三枝が怒るのも理解出来るようになっていた。

僕は三枝の右手を両手で包み込むように握り、三枝の瞳を見つめた。そして微笑んできた。

「明美。ありがとう。心配してくれて」

三枝は僕の言動に狼狽えた。

「な、なによ。そんな台詞は要らない。誤魔化さないで！ ちゃんと杉浦先輩と切れると近いなさい！」

「それは無理だよ」

その瞬間、三枝の左手が振り上げられた。避けられる平手打ちだったが、僕は避けなかった。『ばーん！』良い音が参道にこだました。首で受け止める姿勢だったから、三枝の満身の力が籠もった平手打ちを受けても、体勢は崩れない。僕は微笑んだまま、三枝を見つめる。そして三枝は左の掌を僕の頬に当てた姿勢で動けなくなった。三枝は阿修羅の様な顔で僕を見据えて叫ぶ。

「この、大嘘つき！」

「そう言われても仕方が無い。三枝。だから、今のは避けなかった。だけど、三枝。今の僕がここにあるのは、響子姉きょうこねえがいたからだよ。響子姉がいなかったら、僕は人を愛することが出来ない欠陥品になっていた。あの震災の日に響子姉が僕を抱きしめて泣いてくれた。それで、ようやく僕は泣けるようになったんだ。だから、響子姉が救いを求めたら、僕は救うよ。僕と響子姉の間に、確かに間違いはあった。けれど、それは一度きりのものだよ。

もう、間違いは犯さない。響子姉もそう言っていた。そう言う心の切り替えは出来ている。僕は鈴ちゃんしか愛さないし、抱きもしない。それだけは誓える。でないとお泊まり旅行になんか来る資格もない。僕を信じてくれないか？ 三枝？」

僕の対応が三枝の想像を超えていたのだろうか？ 明美は毒気を抜かれた表情で、陸に打ち上げられた魚の様に口をパクパクさせていた。そして、次に左手で僕の顔面を鷲掴みにして遠のける。

「——離して！ 離しなさいよ！ この鬼畜！」

僕が三枝の右手を握っているので、三枝が身じろぎ出来ないことによく気づいて、僕は三枝の右手を離れた。三枝は飛び下がるようにして、僕との距離を取る。僕の間合いから外れて三枝は息を整える。顔も赤くなっていた。

「アンタ。女には魔物だわ。全くだういいう体術よ？ 剣道にはそんな体術があるの？」

「……？ お前が勝手に動けなくなったただけだろ？ 僕は何もしてないぞ？」

三枝は荒くなった呼吸を整えると、大袈裟にため息をついた。

「——本当に魔物。神崎。何時か言おうと思っただけ、アンタ、女への対応考えてやりなさいよ。本当に魔物だわ——」

僕は言われた意味が分からなかった。分からないから黙っていると、三枝は又、ため息をついた。

「アンタって昔からそうよね。人の良い顔しているのに、変に頑固。誰にも言わずに勝手に決める。そして決めたことは絶対に曲げないんだから。杉浦先輩も鈴も被害者よね。こうなると——」

そして三枝は笑っているのか泣いているのか分からない顔で僕に近づき、右の拳をゆっくり伸ばして、僕の額をコンと小突いた。

「神崎、そんな顔するなよ。私も辛い。私は神崎がそういう奴だって知っていたから、被害者になれなかった。それはそれで救いだと思うよ。神崎。これだけ約束して。次に泣きたくなったら鈴に縋る。誓える？」

僕は自分の顔を両手でゴシゴシとこすった。僕の顔つきが三枝を悲しませていると思っただからだ。そして自分に言い聞かせるように誓った。それで三枝はようやく笑った。苦笑に近い笑顔だった。

僕と三枝が境内に戻ると、伊達がビニールシートを綺麗に畳んでおり、鈴ちゃんとはいからさんが、茶器を片付けていた。鈴ちゃんが振り返ることなく、茶器を片付けながら呟く。

「二人してどこへ行っていたの？ 随分、長かったけど……」

剣呑な声色だった。僕は無表情の『哲学者』モードになって機嫌取りを考える。三枝は、先程の殺気はどこへやら、明るく笑うと鈴ちゃんの肩をバンバンと叩く。

「やーねー。鈴。私にも焼き餅ですかあ？」

三枝は快活に笑うと、鈴ちゃんの耳元に囁きかけた。

「う・ち・あ・わ・せ・よ。打ち合わせ。天竜寺では別行動したいでしょ？」

「——やんっ！」 鈴ちゃんが可愛い声で身をよじる。

「止めてよ。明美。耳元に息吹きかけないで！」

「あら？ 敏感。誰に開発されたんだ？ こら〜」

三枝は鈴ちゃんに抱きつくくと、なんだかややこしい箇所を触り始める。鈴ちゃんが身悶える。

「——っ！ 止めなさい！ 止めててば！ 明美！ 怒るよ！」

「おー。そいつは大変だあ。鈴が怒ると後々祟るからねえ。鈴く。ちよつと内緒話しよう」

明美は鈴ちゃんの肩を抱いたまま、社務所の影に鈴ちゃんを引っ張って行った。二人の姿が消えるのを呆然と見つめていた伊達とはいからさんは、二人の姿が視界から消えると、あんぐりと口を開けた顔のまま、ぎぎいーと視線を僕に向けた。その異様な光景に腰が引けた。彼らが僕に何か答えるような物を求めているのは分かったが、僕に分かる筈も無い。

僕はどっかりと地面にあぐらをかくと、伊達に言った。

「伊達。煙草を一本くれ」そう言うと、伊達は困ったように「……ここ、境内だけ？」とらしくない台詞を吐いた。僕はその言葉に拝殿を振り返った。神仏も僕を哀れんだのか、答める気配はない。

「構うものか。——しかし、伊達よ。らしくない台詞を言うじゃないか？」

「俺も吸おうとして、はいからさんに咎められたんだ」

伊達はそう応えると、頭をぼりぼりと搔いた。僕は目を丸くしている、はいからさんを見つめる。

「——咎めますか？」

暫しの沈黙。そしてはいからさんは太いため息をついた。

「いいえ。弁えている貴方が吸いたいののは、それなりの理由があるのでしょうか？ 止めませんよ」

伊達は「差別だ……」などと呟きながら、銀のシガレットケースから煙草を出す。ダンヒルのメンソールだった。思いつき見栄をはっている。僕が煙草を口にする、純銀のZipproで火を付けてくれる。見栄もここまで来ると格好良いと言って良いだろう。火が点いた瞬間、Zipproのオイルの香りが心地よく鼻孔を刺激する。僕は強く煙草を吸った。ダンヒルは国産の煙草に無い濃厚な味がする。その後強いメンソールの香りが口中から肺に染みこむ。普段、減多に煙草など吸わないので、血中にニコチンが染み渡り、人心地がついた。

「お前が煙草吸うとは初めて知ったよ。なんだ。お前も悪じゃないか？」

「——煙草を吸うのは、これで三本目だよ。貰い煙草ばかりで買ったことはない」

「にしちゃあ、堂に入った吸い方だな？」

「そうか？ 親父の真似だよ。親父はヘビースモーカーだったから……」

伊達は暗い顔でうつむいた。あの震災を思い返したのだろう。

「——でも、関心しませんね。煙草は体を壊します。分かっているでしょう？」

「分かってますよ。でも、季節の変わり目に一本吸う位です。大目に見て下さい」

はいからさんは黙ってヒマワリの様な笑顔で頷いた。なにか大人の余裕の様なものを感じた。

——一方、社務所裏。

「どういうつもりよ？ 明美？ カツアゲでもする気？」

「アンタにそう言うことして、無事だった奴を私は知らないなあ」

「まあ、良いわ。で、浩ちゃん殴れたの？」

「えっ——なんで分かるの？ 透視でもしたの？」

鈴は大きいため息をついた。

「何年の付き合いだと思ってるのよ？ アンタ、顔に全部出るんだよ。で殴れた？」

鈴の言葉に明美は両手を拳に握りしめ、全身に力を込めて悔しさに顔をしかめる。そして、溜め込んだ悔しさを吐き出すように叫んだ。

「——っ！ なんなのよ？ あいつ！ 目を瞑らせて、至近距離から渾身の正拳出したのに、柳に風みたいに避けたのよ！ 目を閉じたまま！ どんな化け物よ？ アイツ？」

「目を瞑らせて、正拳——？ アンタ、日本拳法の有段者じゃない？ エゲツないわね。

そんなに腹が立ったの？ でも、着物で正拳突きは足を開けないから無理よ。避けられたんなら転んだ筈だけど、着物、汚れてないわね？」

「いや——。突っ伏して頭からダイブする所を、神崎に抱き留められちゃった♪」

頭に手をやり、明美は「てへっ♪」と照れ笑いをした。その笑顔が凍り付く。

「——ほう。抱かれたと？」

鈴香の目が細くなり、その全身から冷気が放たれる。

「わたし、アンタに初めて殺意を抱いたよ」

じわりと鈴香は明美に歩みよる。明美は見る見る青ざめ後ずさる。

「ちよ、ちよっと、待って！ 鈴。その薄ら笑い怖いよ。殺すなら杉浦先輩やりなさいよ！」

鈴香は足を止めて、一瞬、空を仰ぐ。

「駄目よ。アンタを殺しても、浩ちゃんは許してくれるけど、杉浦さんに手を出せば、絶対許してくれないもの。ここでアンタに鬱憤晴らしても許されるわよね？」

「殺気まき散らして嗤うなあ——！ 命の価値に差はないわよおお——！」

「——何、寝言を言っているのよ。命に生まれながら価値の差があるのは当たり前じゃない？ 地球より重い命なんて無いのよ」

鈴香はにこやかに微笑んだ。冷気を撒き散らしながら。

「——待って！ 待ってよ、鈴香！ 私はあんた達の恋のキューピットをしようと思っ
ているのよ！」

「浩ちゃんに胸や腰を抱かれたキューピットなんか信じないもの」

「聞いてよ！ 鈴！ 頼むから！ 今晚、あんた達がムーディーにベッドイン出来るようにセッティングして上げるって言っているのよ！」

鈴香は歩みを止めた。見つめられる者の生命力を奪うような視線で明美を見据える。

「どうどう。鈴。落ち着いた？」

「——どういいうプランニングなの？」

低い声で鈴香は尋ねる。明美は頬に冷たい汗を流しながら、無理に笑顔を作って、右手を握って親指を立てた。

「今、アンタ達に必要なのは既成事実よ！ 避妊もなしでやりまくるのよ！ そうすれば、

杉浦先輩と同じスタート地点よ！ いえ、むしろ周回遅れで引き離せるわ」

「ストレートと言うか……オブラートに包まないと言うか……。下卑た発言ね。でも、わたしもそれを考えてない訳ではないのよ？」

鈴香はこぼれる笑みを右手で隠して俯く。頬が朱に染まっていた。明美にはそれが、とんでもない悪戯を思いついた悪ガキのように見えた。

「……鈴。アンタさあ、何か邪悪なこと考えているでしょう？」

「いいえ」鈴は顔を上げてにっこり笑う。「でも、そう言うことなら、天竜寺ではなるべく二人きりにして欲しいわ。大事なイベントがあるの」

「イベントおー？ あんな所に何か仕掛けたの？」

「天竜寺はね、彩宮の家と関わりがあるのよ。ハイカラさんを抑えてね。得体が知れないから、あの娘——」

「あれ？ 鈴、気が合ってたみたいやん？ ちょっと天然入ってるけど良さそうな人じゃない？」

その言葉に鈴香は大きくため息をつく。

「明美……。貴女、あの女性がまともな人に見えたの？ 話の齟齬にも程があるでしょう？」

伊達君は薄々気付いているようだけど」

その言葉に明美は青ざめる。

「——まさか、幽霊だと言うの？ ちゃんと体あったよ」

「幽霊？ 違うわね。分かり易く言うなら、彼女はシュレディングアの猫よ。観測者たるわたし達は、あちら側に踏み込んだ人間だからね。だから認識出来る」

小首を傾げながら言う鈴香に、明美はポカンと口を開ける。

「えつと……シュワルツエネツガーの猫？」

鈴香は盛大に吹き出した。

「筋骨隆々とした未来から来た殺人猫ロボット？ あはは。お腹痛い。ビジュアルがドラえもんと繋がっちゃうよ！」

ツボに入ったのか、鈴香は身をよじって笑い続ける。明美は頬を膨らました。

「なによー。笑うことないじゃない。私、理系ではないんだから、そんなややこしい名前嘔むわよ！」

鈴香が笑い止まないの、明美は聞きたい事を訊いた。

「——で、はいからさんは何者？」

「人間よ。わたし達がそう思っている内はね——」

「思わなかったら？」

「その思考の切り替えはわたし達には出来ないわ。貴方たちは夏の一件で、わたし達は生まれた時から、あちら側を認識してしまっただけだからね。ただ、あの女はわたし達に危害は加えない。見たとおりのお嬢様よ。迷子になっているのも嘘じゃない。普通に接して良いけど、電電宮で現れたからには意味がある。だから、天竜寺では貴女が抑えておいて。頼むわよ。明美」

「——良く分からないけど、任された！ 安心して鈴」

「ありがとう。じゃあ、戻りましょう。でないと浩ちゃんが心配して来るからね」

内密を交わして鈴香と明美は境内へ戻った。

(11)

庫裏の裏から鈴ちゃんがいつも通りの涼しげな冷気を放って現れた。その背後から現れた姉御は妙に胸を張って気合が入っている。呆然とそれを見ていた僕と伊達は、自然に視線を交わすと、同時に大きいため息をついた。あれは暴走機関車モードだ。本人に悪意が無くとも周囲に与える被害は甚大だ。そして面子から考えて、その被害は伊達と僕に降りかかるに決まっていた。僕は煙草の臭いが残っていないか気になった。

「お待たせ。行きましょうか」

鈴ちゃんが凜と言い放つ。さつき号泣したことなど信じられない挙動だった。

僕と伊達は無言で荷物を持って立ち上がる。

「次はどちらへ行かれるのでしょうか？」

まるで他人事のようにのほほんとした口調で、はいからさんが邪気のない笑顔で尋ねる。

「ちょ、ちよつと！ 貴女ねえ。忘れたの？ 貴女、迷子なんでしょう？ この冷血な鈴が道案内しようなんて驚天動地のことなのよ！ 貴女、行きたい場所とかないの？」

姉御が、がなり声を上げた。

「と申されましても……」

はいからさんは人差し指を顎にあて、首を傾げる。どこか表情が弛緩していた。

「嵯峨野は初めてですし——夜行で嵐山に着いたら、なんと申しましょうか？ 粗暴な男の方々に追われてしましまして、文の入った鞆は無くしてしまいましたので、どこへ行けば良いのやら？」

はいからさんは他人事のように言う。ひまわりのような笑みを浮かべて緊迫感がないが、こちらとしても聞き逃せる話ではない。

「追われていたとは穏やかじゃないですね。何か心当たりはありますか？」

そう僕が尋ねると、はいからさんは笑みを浮かべたまま首を傾げる。

「——さあ？ でも、お父様の放った追っ手かもしれませんわ」

反応のぬるさに軽い頭痛を覚えて、僕は黙って耳の後ろを掻いた。ふと隣の伊達を見る。厳しい表情で俯いている。はいからさんの足下を凝視しているのだ。なるほど。確かに影がない。僕は困惑の視線を鈴ちゃんに投げた。鈴ちゃんは視線で頷くと、はいからさんに声を投げた。

「思い人とお待ち合わせのお約束だったのですよね？ それでお父様から追っ手がかかると言うことは『みちゆき』をなさるおつもりでしたのね？」

はいからさんは、ここで初めてはつとした表情を浮かべた。ありありと動揺していくのが分かる。

「——いやだ。わたし、どうして健吾さんのことを忘れていたのかしら？ 文の一言一句覚えていたのに……思い出せないなんて……」

はいからさんは、白昼に龍を見たように青ざめて俯く。僕たちは無言ではいからさんを囲み、しばし彼女を凝視する。

「夜に嵐山駅に来られたのですね？ どうやってお逃げになったの？ 貴女は一晩どこで過ごされたのかしら？ なにか覚えていることはあるかしら？」

鈴ちゃんは怜悧な声で、名医がメスを振るうように、はいからさんの心へ踏み込む。

「ミルク色の濃霧が……足下も見えなくなるような白い霧に包まれて……まるで夢の中を彷徨う心地がして……」

そこで、はいからさんは、はっと顔を上げ、幽霊を見るように僕たちをしげしげと見回した。

「これは夢ですか？ あなた方は人ですか？ 夢なら得心が行きます！」

怯えた子猫のようになったはいからさんは、逃げ場を捜す。聞きたいのはこちらだ。『貴女は人ですか？』と。

「怯えないで」

鈴ちゃんは胸にずんと響く低い声で言った。そうして、そっと、はいからさんの右手を取り、両手で包むようにして、自分の頬へはいからさんの右手を押し当てた。動揺するはいからさんを、至近距離から、その眼力で縛って優しい声色で尋ねる。

「——温かい？」

「あつ——！ は、はい。とても温かくて柔らかいです。すいません。失礼なことを言いました」

「いいのよ。これは夢よ。そう思いなさい。『胡蝶の夢』ではないけれど、人生だって泡沫の夢のようなものよ。でも、夢で思い人に会えるなら、それに超したことはないでしょう？」

はいからさんが鈴ちゃんを見る目が、畏れから、幼子が母親を見るそれに変わった。

「ここでわたしと出会ったのも縁と言うもの。付いていらっしやい。きっと思い人に会えるわよ」

「——はい」と答えたはいからさんの目には涙が浮かんでいた。

「天竜寺へ向かいます」

鈴ちゃんは、はいからさんにそう告げた。

先ほどの理解不可能な会話の後だと、それはまるで託宣のように聞こえた。

『人払いの結界』

鈴ちゃんが張ったと言うそれが、どういう代物なのか、僕には分からない。ただ、その効果は如実に表れていた。

天竜寺へ行くには、再び渡月橋に戻り、橋を渡る必要がある。遠目で見ても芋の子を洗うように人が群れている。僕は又、鈴ちゃんが臍を曲げるのではないかと危惧したが、それは杞憂に終わった。

確かに人混みはある。歴然とごった返している。ところが、その人混みの間にエアポケットのように無人に近い空間が生じるのだ。そして僕たちは常にそのエアポケットの中に居た。僕たちの周囲10メートルは常に人は皆無に近かった。もちろん、僕らだけがそのエアポケットに居る訳ではない。まばらに数名の観光客がいる。その観光客達は振り袖姿の鈴ちゃんと明美に興味を抱かない。まるで見えていないかのようだった。おかげで好奇の目を向けられることもなく、僕たちは散策を楽しむ余裕すら得て、天竜寺へと向かうことが出来た。

『絶対零度の魔女』

鈴ちゃんの通り名は伊達ではなかった。実際、この奇跡のような状況は魔法じみて感じられた。鈴ちゃんがしずしずと先頭を歩む。顔は正面に向けられて、およそ隙と言うものが感じられない歩みであった。

その後を僕と伊達が荷物を持って続く。

明美はいからさんの横にびたりと付いて、しきりに話しかけていた。射法八節で話が合ったらしい、二人は談笑しながら言葉を交わしている。着物と袴姿と言う点を除けば、この二人は嵯峨野観光を楽しむ若い女性となら変わることはない。まあ、射法八節で話が弾むと言うのは、あんまり普通とは思えないけれど……。

嵐山公園の櫻は満開でピンクの靄がかかっているように見える。それを横目に橋を渡り、まっすぐ道なりに歩むと天竜寺の巨大な伽藍が見えて来る。創建当時は嵐山地区の殆どが、その境内にあったと言う古刹である。その存在は政治の世界にも大きな影響を与えて来た。現在の伽藍は殆どが明治時代に再建されたもので、規模も最盛期の四分の一と言われるが、京都五山の第1位に数えられることもある壮大なものである。元々は後嵯峨天皇と龜山天皇の離宮があった場所で、背後の龜山を取り込んで作られた庭園は当時のままの姿を今に伝えると聞く。龜山は霊山であり修行の場でもあった。今はこの両天皇の御陵が庭の景観の一部になっているが、ここに天皇陵があることは意外なまでに知られていない。

この大伽藍の創建には逸話がある。

後醍醐天皇を吉野の山中に追いやり、自ら征夷大將軍となった足利尊氏が禅僧・夢窓疎石に吉野で憤死した後醍醐天皇の菩提を弔うために寺を建立してはどうかと進言したことを受け、憎んで余りある後醍醐天皇のために、正に国を賭けて建立に望んだのだ。その心境は尊氏にしか分からない。ただ、尊氏も夢窓疎石も自ら土を運ぶほどの情熱を傾けた。だが、その大伽藍は金閣寺を建立した足利尊氏にとっても、財政破綻を起こす程のものであった。

夢窓疎石は多くの大商人を口説き、尊氏は途絶えていた宋との貿易船を復活させた。所謂、天竜寺船である。

尊氏は武士による新たな政治に燃えていた。又、夢窓疎石も南都六宗の腐敗した仏教界を禅宗の力で一新しようという野心があったことはいがめない。禅は武士階級に広く行き渡ったが、足利尊氏の理念は引き継がれず、水戸国学により天皇を追い払った希代の悪党とされ、維新の志士達の行動原理を起こすに至った。皮肉としか言いようがない。

蛤御門の変では長州の志士が天竜寺に籠もった結果、天竜寺は焼失している。これも歴史の皮肉かもしれない。

そんな歴史の復習をしながら歩いていると、天竜寺の門に着いた。参拝者用の旧来の門は驚く程小さい。その門の横に駐車場へ向かう大きな門がある。そちらが正門だと思っただのか、観光客は皆ぞろぞろと大門を潜る。おかげで参拝者用の門を潜ったのは僕達一行のみだった。参道は長く正面に独特の造りの庫裏がそびえている。人払いの結果のおかげなのか、参道に人の姿は無い。参道の右側には庵とも寺ともつかぬ建物が並んでいる。と、鈴ちゃんがびたりと足を止めた。

理由は僕にはすぐに分かった。前方300メートル前に真新しい朱の鳥居が見えた。気で分かる。弁財天だ。そして、いつ現れたのか正面に渋い紺の留め袖を着た30代前半の女性が庫裏の方向からこちらに歩んで来る。紫の風呂敷に四角い箱を入れている。

遠目でもその女性は目立った。背筋がピンと伸び、立ち居振る舞いに凛とした筋が通っている。人の域を超えた霊格を感じさせる細身の女性だった。女性は立ち止まる僕達に黙礼すると、自然な動きで弁財天の中に入り、柏手を響かせた。弁財天から出て来た女性は、そのまま歩を進めて、僕達の横を通り過ぎた。

「ようお参りやす」

頭をさげてた。僕達も無言で頭を下げたが、その女性の気品に比べると、下卑たものと言わざるをえなかった。

「——凄いな」

僕は嘆息を交えて言った。どうしても僕は剣道を基準に考えるのだが、その女性は遂に打ち込む隙を見せなかった。

「——あんな怪物。いるものなのね。負けたわ。わたしはあの域に達せられない」そして、首を捻る。「——本当に人間なのかしら？」

さらりと怖いことを言う。

「おいおい。怖いこと言うなよ。少なくとも……影はあったよ」

苦笑いする僕に、鈴ちゃんは食ってかかった。

「だって、あり得ないわよ。あの霊格で肉の枠に収まるはずがないんだもん！」

「——まあ、何だって起こりえるさ。京都だしね。僕は何でも受け入れるつもりでいる」

「——至言ね。なら、良いわ」

珍しく鈴ちゃんはすんなりと引き下がった。そして視線を朱の鳥居へ向ける。

弁財天は最近立て直されたのか、真新しく鮮烈な気を放っている。これは無視して通れない。

「神崎君。お参りしていきましょう」

鈴ちゃんが微笑んで言う。

「二人で？ 不味いだろう？ 弁財天だけ。やだよ。嫉妬されて別れさせられるのは」

「確かに、いわたにむかた棕谷宗像神社と繋がりがあってるんでしょね。でも、弁財天じゃないわ。これは祓戸大神よ。(こ)で筋を通せと言うことなのでしょう」

「——行くしかないのか」

僕は無言で石畳の階段を登った。びったりと鈴ちゃんが付いて来る。二人して並んで柏手を打つ。僕達はすでに様々な神社を回っている。互いの呼吸は合わすまでも無い。二人は同じタイミングで柏手を叩き、同じタイミングで一礼する。顔を上げるのも同時だった。確かに弁財天の厳しさはない。頭の上で袖を振るわれた心地がした。僕達は後ろ向きに後退し、鳥居で再度、一礼するとくるりと反転して階段を下りた。降りると、はいからさんが目を丸くしていた。

「お二人は神道をなさっているのですか？」

「——いいえ」

鈴ちゃんは冷えた声で答えた。

「あんなに息の合ったお参りは初めてみました！」

「まあ、寺社仏閣は良く行くものですから……」

僕は照れ隠しにそう答えたが、鈴ちゃんは表情の消えた顔で視線も向けない。

「明美、伊達君。次はあなた達がお参りしなさい。間違えても願掛けするんじゃないわよ」

「え〜？ なら拝む必要ないじゃん。功德がないんだろ？」

「功德が無くても崇るくらいはするかもよ。ここは入り口なの。チェックインはしないからね」

崇りと言う言葉に伊達の表情が一変する。無理もない。夏休みは呪詛との戦いだった。

伊達と明美は真剣な表情で頷き合うと階段を上がった。不揃いの柏手を聞きながら、鈴

ちゃんは、はいからさんに言った。

「はいからさん。貴女は願掛けしなさいね」

「——え？ でも願掛けはするものじゃないとおっしゃりませんでした？」

「貴女は別よ。半分向こう側だしね。こう願をかけなさい『道を開いて下さい』と」

「——道をですか？」

鈴ちゃんは真摯な表情で頷いた。

はいからさんは、じつと鈴ちゃんを見つめていたが、きりりと答えた。

「分かりました」

はいからさんのお参りの仕方も堂に入ったものだった。毎日、神棚でも拝んでいるのではないだろうか？ でないと、ああも自然体で拝めるものではない。底の知れない女性と言えた。ああも真摯に拝まれては、神様も感じ入るだろうと思わせた。

目を細めてその様子を鈴ちゃんは慈愛が籠もった眼差しで詰めていた。僕は少なからず驚きを覚えた。『絶対零度の魔女』。高校一年生の夏休みにはその通り名が全校に広がっていたのは伊達ではない。神秘的な美貌は超一級品だが、喋りかけるだけで、その冷え切った青光りのする目で相手を射貫く。射貫かれた者は言葉を失い背骨が凍り付いたように固まってしまう。文字通り近づきがたい美少女だったのだ。加えてルーン占いを嗜み、その的中率は外れなしと囁かれていた。姉御がいなければ、鈴ちゃんは高校三年間を全く友人を作ることなく終えただろう。明美がはばかり無い笑顔で、自分の友人や占いを望む女学生を鈴ちゃんに押しつけたので、性格が人嫌いで無いことは認知されたが、通り名が変わることは無かった。それほど筋金入りの冷徹な視線に慈愛が溢れる様子など、恋人である僕ですら滅多にお目にかかれない。鈴ちゃんの洞察力と直感常人の域を超えている。鈴ちゃんは、はいからさんの正体も素性も見抜いているのかもしれないと僕は思った。

はいからさんがお参りを済ませて石段を下りて来ると、鈴ちゃんは高らかに言った。

「さあ、龍を見に行くわよ！」

瞳が爛々と輝いている。何故か、彼女の機嫌は良いものに代わり、彼女らしからぬハイテンションになっているようだ。

もう、眼前にある法堂に僕は向かった。法堂は仏教を学ぶ巨大な教室だと思えば良い。参拝客は法堂内には入れない。木戸越しに天井に描かれた雲龍図を見る。その瞬間、僕は強い視線の波動を受けて、思わず後ずさりした。法堂の天井で渦巻く巨大な龍が僕を睨み据えていた。

（本当に人間が描いたのか？）

そう思った。傍らに息を飲んで雲龍図を凝視している鈴ちゃんに言った。

「なあ？ この龍、本当に生きていないかい？」

「——生きてるわね」

雲龍図を見上げたまま、鈴ちゃんは答える。目の輝きが増している。

「平成に入ってから落款したと聞いたけど——凄いわね。平成の世にこれだけのものが描ける人が居たなんて、信じられないわ」

僕は慌ててパンフレットに目を通す。加山又造画伯の手による渾身の力作とある。平成9年に落款したとある。

「平成9年？ ——震災から二年後じゃないか！」

「そうね。多分だけど、そう言うことも頭にあって描いたんじゃないかしら？ 彼の名は向こう百年残るでしょうね。歴史に名を残すような日本人がまだ居たんだね」

鈴ちゃんの声には珍しく感動の響きが感じられた。彼女は答えながらも雲龍図から視線を外さない。そう言えば、幼い時の鈴ちゃんの遊び相手は食客の若い日本画家だったと聞く。日本画への思い入れが強いのもしれない。僕はそつと鈴ちゃんの横を離れ、回廊へ出る。鈴ちゃんの『人払いの結界』が作用しているのだろうか？ 回廊に人はまばらだ。他の連中はどうしているのかと周囲を伺う。伊達は厳しい顔つきで、回廊をぐるぐる回っている。四方の一角で止まっては親の敵を見るような目つきで雲龍図を睨み上げ、又、移動する。

（犬か？ あいつは？）

呆れてそう思う。伊達の保護責任者の姉御はと見ると、はいからさんと手を繋ぎ、嬌声を上げながら、「あつ、こつちから見ても、龍が見てるよ♪」とハイテンションである。育児放棄も甚だしい。無理矢理、腕を引っ張られているように見えるはいからさんは、明美に言われて雲龍図を見上げる度に、困っているような、戸惑っているような、形容し難い苦笑を浮かべている。

どうやら、姉御はいからさんのケアに徹するつもりらしい。

野犬となった伊達は回廊をぐるぐると回っていたが、やがて立ち止まると、うんこ座りで天井の龍にガン付けを始めた。顔も粗野に歪めてけんか腰である。魂を清める名刺でヤンキー化するのには止めて欲しい。まばらな観光客も遠巻きにして恐れている。僕はため息をつく、伊達の後ろに回った。ガン飛ばしに懸命になっている伊達は気づかない。仮にも鳴神あさぎ先生の下で三年間剣を学んだにしては未熟の一言に尽きる。

僕は無言のまま伊達の後ろ頭につま先蹴りを放った。伊達は盛大に頭から倒れ込み、障子戸の敷居にしたたかに額を打ち付けた。ちなみに、つま先蹴りは素人がするものではない。足の指を拳固を握る様にしっかりと曲げておかないと、頭のような堅いものを蹴ると足の指を折る。まあ、後ろ頭を蹴るなら、かかと落としの方が良いが、それでは伊達が気の毒だ。下手すれば、頭蓋骨陥没である。従って、敢えてつま先蹴りにしたのは伊達への僕の思いやりである。しかし、伊達は僕の友愛に感謝するでもなく、おでこを抑えたまま倒れ込んで動かない。大袈裟な男である。

「おい、伊達。そんな所で倒れ込んだら、他の人に邪魔だ。早々に起きろ」

「————お・ま・え・く。何しやがる？ 俺に恨みでもあるんか？」

「恨みか——多々あるな。かかと落としの方が良かったか？ まあ、お前こそ何をして

いる？ ヤンキーは卒業したんじゃないのか？ 誰にガンつけしているんだよ？ 公共の面前で馬鹿やってるんじゃないか！」

僕は静かに怒気を放った。伊達は条件反射で、きちんと立ち上がり言った。

「あの龍！ 俺にガンつけやがった。どこへ行っても睨みやがる。俺はもう負けないと決めたんだ！」

——駄目だ。こいつ馬鹿になっている。

僕は耳の後ろをポリポリと搔き、周囲に救いを求める。ここは現役の新禅寺だ。救いの神様くらいいるはずだ。姉御の姿が、真つ先に目に入った。はいからさんと一緒に呆然と僕達を見つめている。僕は姉御に目で救いを訴えた。姉御は困ったように微笑むと、僕に向かって両手を合わせて、深々と拝んだ。僕は即座に鈴ちゃんを捜した。表情の無い顔で天井の龍を真摯に見つめている。振り返りもしない。神は我を見放した！ 跪いて天を仰ぐうかと思つたが、それでは伊達と変わりない。

「あのな？ 伊達……。パンフレット読んだか？ あれは八方睨みの龍と言つて、どの方向から見てもこちらを見るんだよ」

「そんなもん、描ける筈がない！」

「描いたんだよ。人の身で。龍を封じたんだ。50年も経てば国宝指定もんだ。分かったか？ 分かったら、行くぞ。旅の恥はかき捨てと言うが、巻き込まれるのはゴメンだ。恥は一人で背負ってくれ。それとも3年振りに僕の鉄拳味わうか？」

伊達の顔色が青ざめる。

「ごめんだ。勝てない喧嘩はしない。ただな、神崎よ。ああ言うものにもう負けないって言う俺の気持ち汲んでくれ」

夏の体験を踏まえての言葉だろう。

「……分かるがね。TPOを弁えてくれ。やるんなら一人でやれ」

伊達は頷きながら、額をさすりながら立ち上がった。

(三)

僕たちは大方丈へ向かうべく庫裏へ足を向ける。春の陽差しの中、庫裏はそびえるように大きい。これ程の大きさの庫裏はそうあるものではない。その姿は異形とも言える。鋭角の屋根の上には、大きな^{とつ}税がある。税は平屋家屋しかなかった時代に、煙突代わりに税を建てた。もつとも、誰でも税を建てられた訳ではない。許可を得た豪農・豪商のみが建てるのが出来たものだ。「うだつが上がる」とは、このことから生じた言葉でもある。白い漆喰が陽光を浴びて目を射る。門を潜り、中へ入るとひんやりとした空気が僕たちを包む。

伊達が怯んだように後ずさった。僕と鈴ちゃんも立ち尽くした。

睨んでいた。巨大な達磨が眼を爛々と輝かして僕たちを睨み据えていた。

それが屏風絵だと気づいたのは、一瞬、後だった。思わず吐息が漏れた。

「……凄いな」

そう評するしかなかった。目を見開いていた鈴ちゃんも無言で頷くだけだった。僕たちはそれを合図に、靴を脱ぎ、下足箱にしまうと、スリッパに履き替え大方丈へ向かおうとしたのだが、ここで又、奇行に走る奴がいた。言うまでもない。伊達である。伊達は土足

のまま土間にうんこ座りをして、達磨さんと睨めっこを始めたのだ。今度こそ踵落としたなと思っていると、受付の若い僧侶と目が合った。苦笑いを浮かべている。

「すいません」

そう頭を下げると、「お気になさらずに、先に方丈の方へどうぞ。ああ言う方は希におられますが、なに、5分も保った方はいらはりません」そう答えた。

僕は乾いた笑顔で後ろから伊達の背中を見ている姉御に、目線で先に行くぞと知らせると、姉御は頷き「ゴメン」とばかりに合掌して頭を下げる。その後、鈴ちゃんとも何やら意味ありげなアイコンタクトをしていたが、気にしないことにする。

気の毒なのは、はいからさんで、姉御に手を握られているので逃げられず、羞恥に頬を染めて項垂れている。はいからさんは付き合う必要がないだろう。そう思い、声をかけようとすると、そのタイミングを見取ったように、鈴ちゃんが僕の手を握り、短く「行くわよ」と言った。こうなると僕は首輪をつけられた犬に等しい。鈴ちゃんの掌は柔らかく温かだった。男とはまるで違う、柔らかで小さな手は、今まで何度も握っているのに、優しく細心の注意を払って握り返さないと、幻のように霧散するような儚さがあった。僕は極力優しくその手を握り替えした。はいからさんのことは頭から霧散していた。

『方丈』と言う言葉に耳馴染みの無い方も多いだろう。主に禅宗のお寺で使われる言葉で、本堂と客間が一緒になった家屋を指す。天竜寺の場合、大方丈と言う位だから、家屋の大きさも相当の規模になる。達磨が居た庫裏は言わば玄関口だ。

「こっちゃん」

鈴ちゃんは僕の手を握ったまま、すすと摺り足で前へ出る。歩調に迷いが無い。まるで自分の家であるかのように進んで行く。

と、突然、視界が開けた。

そこは大広間だった。回廊越しに、大きな池のある見事な日本庭園が一望出来る。その素晴らしさに僕は言葉を失った。

「座りましょう」

広間の中央で鈴ちゃんは呆然とする僕に、そう言葉をかけた。鈴ちゃんは流れるような仕草で、着物を折り畳んで正座する。それに倣って、僕は鈴ちゃんのすぐ隣に正座した。

鈴ちゃんは、そんな僕を見てクスリと笑う。

僕は何か粗相をしたのかと思ひ「なに？」と鈴ちゃんに問いかけた。鈴ちゃんは慈愛に溢れた観音様のような微笑みで僕を見つめている。

「足を崩して良いのよ。楽な姿勢でくつろいで頂戴」

思わず僕は目を丸くした。こんなに優しい表情と声色で接しられたのは、付き合ってから初めてだ。恋人に優しくされて、裏を考えてしまうと言うのも如何なものか？

「でも、鈴ちゃんは正座じゃないか？」

「わたしはこれが一番落ち着くのよ。回りを見てみなさい」

言われて僕は他に観光客が居たのに、ようやく気づいた。大広間に5人の観光客が居た。あまりに少ない。これも鈴ちゃんの人払いの結果の賜物なのだろうか？

二組の若いカップルと大きな一眼レフのカメラを持った老人がいるだけだ。皆、弛緩した姿勢で日本庭園を眺めていた。開け放たれた障子戸から入る風が心地よい。僕は大きな

吐息を付くと、力を抜いてあぐらをかいた。

鈴ちゃんは相変わらずそんな僕に慈愛の視線を送ってくる。

「……和むでしょう？　ここ」

うん。何なんだろう？ 『絶対零度の魔女』なんて気配もないぞ。鈴ちゃんは弛緩したら、こうなるのか？　こう側にいられると、着物ごしにも、むっちりとした肉感の太ももに目が行く。膝枕とかせて貰ったら気持ち良いだろうな〜と不埒なことを考えていると、鈴ちゃんが笑顔で言った。

「ここじゃダメ」

吃驚した。ああ、吃驚した。何？　心を読むの？　この娘？

「貴方の考えることくらい分かるわよ？　モーゼの十戒は守ることね。汝、目にて視姦するなかってね」

お見通しか……余程、ガン見していたんだな。僕は庭に視線を移して、耳の後ろをポリポリと搔く。

鈴ちゃんはクスリと笑った。

「——二人きりになったら、してあげる」

「えっ？」

振り返った僕は余程喜色に溢れた顔をしていたのだろう。鈴ちゃんはぷつと吹いた。

「浩ちゃん。分かり易すぎ！」

「——凹んで良いかな？」

「ダ・メ。それより気づかない？」

「——ああ。もしかして、気の流れ？　ちよつとした聖地だね。この広間」

「分かっていて、女の太ももに見入るとは、とんだ久米仙人ね。」

クスクスと鈴ちゃんは笑う。恐ろしい程に機嫌が良い。

「この日本庭園は創建時から、まるで変わっていないそうよ」

「へえ」と僕は嘆息した。背後の山並みまでもその景観に取り入れた見事な庭園だ。陰陽五行の思想により池や岩磐が配置されている。背後の山並みも只の山ではない。その気は霊山のそれに近い。その気を陰陽五行の理に乗っ取って、自然に無理なく取り込んでいる。そのため清冽な霊気が庭で増幅されて、それが風に乗って広間へと流れ込んでいるのだ。それは人をして柔らかに包み込む柔和な気に変わっている。広間にいる人は雑念を忘れ、弛緩して庭へ魅入る。この庭を毎日眺めていたら、それだけで悟ってしまうのではないかと思われた。

「元々は嵯峨天皇の離宮だったそうよ。だから、嵯峨野と言うのね」

「——嵯峨天皇？」

僕は顔を鈴ちゃんに向ける。

「じゃあ、空海が関わっているんじゃないかい？」

「正史にその記述はないけれど、関わっていると思うわ」

鈴ちゃんは桜の花で桃色の靄にたなびく山並みの頂きを指さす。

「……見えるかしら？　頂きの稜線に等間隔で岩磐が並んでる」

僕は目を細めた。見える。ここから見えるのなら相当の規模の岩磐だ。

「古代からの霊場だったと思うの。あの山並みは大昔から禁足地だしね。あれを空海が利

用しないとは思えないの」

「だね。彼はちやっかりしていたそうだから。——ああ、それなら電電宮が虚空蔵求聞持法で、明星が落ちた場所とされるのも納得出来る」

「——理屈はともかく、ここは人の心に平安を与えるの。客をもてなすには最高の場所だと思わない？」

「つくづく思うね。暫くここで居眠りをしたいよ」

大きく伸びをして頷く僕に鈴ちゃんは笑った。

「仏法では惰眠を貪るのは厳しく禁じていたと思うけど？」

僕はあぐらの姿勢で背を後ろに倒し、両手で弛緩した上体を支えていた。たおやかな気分で鈴ちゃんを見る。自然と微笑みが浮かぶ、鈴ちゃんは僕に慈愛の微笑みを返す。満ち足りた気分になった。

僕は時間と言う概念を忘れた。

忘我の境地でただ庭を見る。

見ていると、桜の花びらが一枚、ゆっくりと風に漂い落ちて来た。花びらは陽光を照り返し、天女が舞うようにゆるりゆるりと落ちて来る。僕はそこに永劫と刹那を同時に感じた。二律背反するそれが同じだと感じた時、何かが分かったような気がした。とは言え、頭で理解したのではない。僕は庭全体を見つめて忘我の中にいる。目の端で桜の花びらの舞を捕らえたにすぎない。些細なことだ。豊の感触が紫雲の上のそれに変わる頃、見計らったように鈴ちゃんが言った。

「ねえ。庭を回りましたよ」

「ああ」と頷いたものの、僕は半ば寝ぼけた状態で腰が上がらない。僕は肉の重みを失い魂魄だけのようになっていた。鈴ちゃんは微笑みを浮かべたまま、右手で僕の左手首を掴むと、そつと持ち上げた。僕は本当に魂魄だけになっていたのかもしれない。鈴ちゃんは、さして力を入れていないのに、僕の体は軽々と持ち上げられた。鈴ちゃんは顔を近づけて言う。

「行きましょう」

僕は左手首を掴まれた姿勢で鈴ちゃんに誘われる。なんだか、鈴ちゃんが僕を涅槃へ導く観音様のように感じられた。

親切と言うか、天竜寺には庭を巡る回廊が設置されていた。スリッパのまま広い庭の外周を回れるように設計されている。回廊には船底天井の屋根があり、床板には赤いフェルト地の絨毯が敷かれている。もつとも、色はほとんど抜け落ちていて、元の色が赤かったのだろうと推察出来るだけの代物だ。それでも、これだけ広い外周を回廊で覆い、その床に絨毯を敷くと言うのは贅の極みと言えるだろう。

回廊は緩やかな坂を登るようになっていた。こうして回って見ると、この庭園の奥深さが良く分かる。見る場所、見る場所で表情が変わるのは当然として、どの位置から見ても完璧に調和の取れた顔を崩さない。奥まった所へ行くにつれ、樹木が増え、神韻渺々たる気配が強まる。静けさの中に響く自然の音、風のうねりや鳥の声すら庭の世界観に取り込まれているのだ。自然、僕は口を開くことを躊躇う。鈴ちゃんに至っては、最初から無

言だ。いや。その佇まい、歩の進め方が庭と一体になっている。僕は改めて鈴ちゃんに感嘆した。禅の境地とは体現するもので、言葉にするものではないと聞く。ならば、鈴ちゃんはすでに悟りの境地にいるのかもしれなかった。

剣道の世界では『劍禅一如』と言う境地が説かれることがある。剣の道を突き詰めれば、禅の悟りの境地に至ると言うのだ。もっとも、剣の師匠である鳴神あさぎ先生はそれを鼻で笑っているのだけど……。曰く「悟りたいなら、端から頭を丸めて出家すれば良いのよ。剣を取る必要はないよ。わたしのように剣にしか生きる術を見いだせなかった者が行き着く所は自ずと違う。お前もわたしの同類だよ。神崎」

なのだそう。そう語って突き抜けた笑い声で僕の肩を叩いた鳴神先生の嬉しげな表情は、僕の目に焼き付いて離れない。

雑談の一端で出た戯れ事と思っていたが、今、ここでもありありと思いつくところを見ると戯れ事などではないのだろう。禅の悟りに憧憬はある。だが、それは僕の世界とはまるで別の世界だから抱くのかもしれない。

と、鈴ちゃんの歩みが音もなく止まった。真後ろを付き従っていた僕はどうしたのかと、鈴ちゃんを見る。彼女は船底天井を見上げていた。そのままの姿勢で彼女は言う。

「あれを見てくれる」

鈴ちゃんを目線を追うと、船底天井に真新しく見える板の敷居があった。椿だろうか？花の様な文様が彫刻されて鮮やかな彩色が施されていた。

「——覚えておいて。あれは彩宮の家の印よ」

一瞬、意味が分からなかった。

「え？ 家紋は違ったよね？」

そう問うと

「華押の様なものよ。もつと呪的なものだけど……彩宮の家でも家長クラスの僅かな人間しか知らないわ」

鈴ちゃんと接していると、血管とか家と言うものの意識の違い——いや、格の違いか——に圧倒される時がある。時代錯誤とかそう言うものじゃない。彼女の場合、それは歴然と息づく現実で受け入れざるを得ない重責なのだ。三代前の先祖を赤の他人のように感じる僕ら凡俗とは違う世界に彼女はいる。彼女と付き合うと言うのは、そう言う別世界の重責を共に担うことに他ならないことを僕はすでに学んでいる。だから、黙ってその文様を細部まで目に焼き付けた。

鈴ちゃんは背中が僕が素直にその文様を覚えているのを確かめると、顎を引き瞑目する。何かの印を結んだようだが、「見て」と言われなかった以上、覗き込むような真似はしない。鈴ちゃんの喉からくぐもったリズムのある低い音が漏れて来る。呪を唱えているのだ。呪は発声するものではない。呪は自らの内に唱える。その背骨を打ち振るわせるように、自らの内に響かせるものだ。僕は光明真言しか知らないが、教えてくれた高野山真言宗の僧侶はそう言った。

鈴ちゃんの背中から冷気が溢れ出す。空気がきんと張り詰める。僕は立ち会いに臨む心地で心を鏡のように澄ませた。鈴ちゃんの呪が止まった。静かに僕を振り返った瞳は正に『絶対零度』。感情が読み取れない。

僕は彼女越しに向こうを見やって息を飲んだ。彩宮の華押から向こう一間、空気が凍っ

ていた。結界だ。何者の侵入も許さぬ厳しい結界だ。

そつと僕の手を鈴ちゃんが握った。氷のように冷たい。

「行くわよ」

鋭利な声で鈴ちゃんが言う。僕はたじろいだ。

「えっ？ でも、この結界は……」

「彩宮の者なら通れるわ。それ以外は決して潜れない絶対の結界よ」

鈴ちゃんは有無を言わず、ぐいと僕の手を引いた。僕は腹を括った。分かっていたことだ。彼女と付き合うには生半可な覚悟では駄目なのだ。

結界を潜る瞬間、体温を半分奪われた。どんな結界だ？ 神域ですら、ここまでの結界は無い。彩宮と言う家系の尋常無さを思い知らされた。

結界の向こうは闇夜だった。漆黒の闇の世界に変わっていた。驚かなかったと言えば嘘になる。それでも僕は動じなかった。その変化を受け入れた。闇の中にぼつと松明の灯りが点った。目を瞠った。回廊の欄干の向こうの庭に緋毛氈が敷かれている。白装束の武士と女中が緋毛氈の左右の端にきちんと正座して対面を向いて動かない。松明は彼らの後ろでたなめいている。彼らの影がゆらゆらと揺れている。奇態なのはそれだけでは無い。彼らは全員、和紙で顔を覆っていたのだ。僕は欄干から身を乗り出すようにして見た。鈴ちゃんは後ろに控え、口を閉ざしている。僕の正面、庭の奥に白木の社があった。和蠟燭が灯され、紅白鰻頭と御神酒が供えられている。その社を背に白無垢の花嫁衣装の少女が僕に対して深く頭を垂れて、お辞儀をしている。細い肩が震えている。

僕は胸を掻き笔られる思いを抱いた。

何と言うことしたのだ？ 何と言うことを僕は忘れていたのだ。花嫁衣装の小さな娘の横の席は空いている。どれ程の歳月を彼女は待っていたのだろうか？ 落涙しそうになった。と、足下で猫が鳴いた。汚れを知らぬ白い毛並み。間違いない。あの古刹で僕を誘い、鈴ちゃんの式を務める子猫だ。淡雪と言うその猫は、僕を見上げると、又、にやあと鳴き、とんと庭に下りた。下りた瞬間、変化した。紅の振り袖を着た市松人形のような童女となった。下りた場所で正座して、僕に向かって頭を下げる。

何をなすかは分かっていた。僕はやり残した大きな儀式を終えないとならない。それでも僕は鈴ちゃんを振り返った。鈴ちゃんは真摯な瞳で大きく頷いた。

僕は欄干を飛び越えて、童女の前に下りた。下りると僕の姿が変わった。羽織袴の姿で帯刀していた。童女はすつと立つ。頭が僕の腰あたりしかない。童女は僕の手を掴んだ。顔を和紙で覆っていた者達は姿勢を崩すこと無く「高砂や」と謡い出す。童女は緋毛氈の真ん中を通って、花嫁の横へと僕を誘う。僕が幼い白無垢の娘の横に正座する。その花嫁はお辞儀の姿勢のまま、涙を数滴零した。正座した僕を見届けた童女が、僕の後ろに回る。社を拝み、柏手を打つ。そして花嫁の横に回り込むと、ちんまりと正座して、懐から真っ白の晒しの布を取り出し、花嫁の顔を拭く。花嫁はすつと背を正して前を見る。一瞬、垣間見えた横顔は鈴ちゃんそのものだった。松明の光が照らす闇の中、謡が響く。欄干の向こうの回廊は闇に閉ざされ、まるで見えない。その闇から媼と翁の面を付けた二人の男女が現れた。盆の上に白磁の杯と瓶を載せ、差し抱くようにして僕たちの前へ出る。

僕たちが無事、三三九度を上げると、周囲からすすり泣きが漏れて来た。僕は花嫁を見

た。

「——待たせた。済まぬ」

そう言うと、花嫁は僕を見た。鈴ちゃんの顔で微笑みながら、大粒の涙をぼろぼろと零した。そして花嫁は僕に向かって深々とお辞儀をする。周りの者達も僕に向かって深々と頭を下げた。その瞬間松明が消え、無明の闇に僕一人が残された。僕は騒がない。静かにまぶたを閉じる。数瞬の間。僕は眼を開けた。古ぼけた社を背に、苔むした土の上に座る自分を見いだす。氷を思わす結界の空気は未だ周囲を覆っている。僕は座ったまま、顔を上にする。鮮やかな振り袖姿の鈴ちゃんが僕を見つめていた。先ほどの花嫁同様、微笑みながら涙を零している。僕は回廊へ戻り鈴ちゃんへ近づく。そして、強くその華奢な体を抱き締めた。鈴ちゃんも、顔を僕の胸に埋めて、その腕を僕の背中に回した。

「ありがとう」

僕は鈴ちゃんに囁く。

「そして——ごめん。僕は君をも待たせていたんだな」

鈴ちゃんは僕の胸の中で頭を振る。

「ありがとう。浩ちゃん。これでわたしたちは、ようやく前に進めるわ」

その時だった。泣きながら感極まった女性の声が僕たちに掛けられた。

「なんて、切ない。そして、なんて素晴らしいお話でしょう。貴方たちは前世から結ばれる縁を結んでおられたのですね……」

その声は気配もなく、唐突に現れた。「化生か？」そう思い、僕は鈴ちゃんを背に回して、その声に向き合う。鈴ちゃんは声が出た瞬間、電気に打たれたかのように背骨を仰げ反らせた。僕が手を放した瞬間、猫のように後ろへ飛び退いていた。

その声の正体に僕は慄然とした。

声の主は——はいからさんだった。

結界は——生きている。「何者だ？」心底そう思った。

「どこから入ったの！」

はいからさんに向かって進みながら、鋭く甲高い声を鈴ちゃんは上げる。僕は身体で鈴ちゃんを押し止めた。結界を破ることなく、ここへ入り、しかも、あれを見ていた。人とは思えない。警戒しなければならぬ。が、鈴ちゃんは歩みを止めない。僕を押しどけ、僕たちの剣幕に怯んだはいからさんに挑む。鬼神の様な殺気を放っていた。凄く怒気だ。睦言を覗かれた怒りだけではない。彩宮の場に無断で踏み込んだ者への怒りだ。化生の者なら、この場で打ち殺す気であることが読み取れた。

鈴ちゃんは、はいからさんの襟を掴み持ち上げる。どこからこんな力が出るのか分からない。

「答えなさい！ どこから来た？ 明美と居た筈よね。名を名乗りなさい！」

はいからさんは首を締め上げられている。それでも苦しい息の下で名を名乗ったようだ。

僕には、その声は聞こえなかった。

「何ですって？」

鈴ちゃんは驚愕に打ち震える。

「もう一度、名乗りなさい！」

ますます首を締め上げる。はいからさんの顔は青く充血していた。微かにもう一度名乗

ったのは分かった。鈴ちゃんは突然、力を抜いた。どっと床に落ちたはいからさんは激しく咽せ込む。

「——なんてことなの……」

鈴ちゃんは青ざめて上を見上げていた。その視線の先には彩宮の家の華押があった。

(一)

結局の所、僕はいからさんと二人にされて置き去りにされた。鈴ちゃんは走り去ってしまった。いや、着物だから裾を乱して本当に走ったわけではない。なで肩でいながら、身体の芯に真っ直ぐな棒を通している様な凛とした姿勢は崩さず、優雅な足裁きの摺り足で立ち去ったのだが——その移動速度はやはり走り去ったとしか形容出来ない。ちよつとしたホラー映画を見るかの様だった。和服での優雅な摺り足のお手本の様な歩みなのに、まるで摩擦係数が存在しないかの様に、そう。フィギュアスケートで氷のリンクを滑る様に、瞬く間にその姿を僕の視界から消して行った。

「……なんだよ？ いったい？」

そうぼやきながら僕は未だしやがみ込み咳き込んで苦しむ『はいからさん』の背を摩っていた。はいからさんの目尻からは涙が零れている。余程、苦しかったのだろう。喉が笛の様な音をたてている。後数刻締め上げていたなら、間違い無くはいからさんは鈴ちゃんに絞め殺されていたに違いない。自分より背丈の高い相手を締め上げる鈴ちゃんの臂力には恐怖を覚えざる得ない。あの細腕のどこからこんな怪力が生まれるのだろうか？

般若の形相ではいからさんを締め上げていた鈴ちゃんだが、はいからさんの名を聞いたとたん、怒りを忘れて脱力し、蒼然となった。心配した僕が肩に手を置くと、ビクンと身体を震わせた。

驚いた。

振り向いたその顔に表情があった。

『絶対零度の魔女』

学校中からそう評される程に感情を表に出さない鈴ちゃんの顔は激しい焦燥感に泣き出さんかの様だった。

何か伝えようとしたのだろうか？ 鈴ちゃんの口が酸欠の金魚の様にパクパクと開き閉じる。だが、言葉は出ない。そんな自分に業を煮やしたかの様に鈴ちゃんは激しく頭を振った。鈴ちゃんは慌ただしく懐から小さく畳んだ紙を取り出し僕に押しつけた。それが何かを訊く暇も与えずに、鈴ちゃんは早口でまくし立てた。

「先に行つて！ 彼女をお願い。すぐ追いかけるから！ 間に合わなかったら化野念仏寺で待つて！ 陽が落ちる前には必ず行くからね！」

そして脱兎の様に姿を消した。

小さく畳まれた紙は嵯峨野の地図だった。ルートが書き込まれ、尋ねる場所で見えるかも綿密に書き込まれている。伊達の立てたプランから嵯峨野を選んだのは鈴ちゃんだが、神経症かと思う程に綿密に書き込まれた地図を見る限り、この旅行には相当な思い入れがあった様だ。

はいからさんの介抱をしながら、慌てて姿を消した僕の彼女を思い浮かべる。メロスの様だと思った。『走れメロス』のメロス。自分の代わりに囚われの身となった友人の命を守る為、ひた走りに走ったメロスの姿が鈴ちゃんと重なる。恋人の僕だから分かる。鈴ちゃんはメロスの様に大切な誰かの為に、今、全力疾走しているのだ。

僕は去り際の鈴ちゃんの言葉を思い返す。

「貴方には言うまでも無いけれど——いい？ 何があっても驚いてはダメよ。明美にそう伝えて。あの娘は心得ているから。伊達君をいなしてくるわ」

夏休みの異常な体験を思い返した。

あんな異常な事がそうそう起きるとは思えない。けれど、鈴ちゃんが言う以上、常識の埒外の事が起きるのは覚悟した方が良さだろう。僕はいからさんを凝視する。こうして苦しんでいる以上、彼女は真つ当な人間だとは思う。けれど、彼女の登場は常軌の埒外ではなかったか？ 彼女の言動はどこか常識から逸脱していなかったか？

僕は頭を振って彼女を化生とする自分の考えを打ち消した。鈴ちゃんは言った「彼女をお願い」と。鈴ちゃんは、はいからさんに、はぐれた恋人と会わせてあげると約束していた。僕には鈴ちゃんの様な能力はないけれど、追われていると言う彼女を守り通す位はしないといけない。鈴ちゃんが「頼む」と言ったのだ。事情はまるで把握出来ないけれど、僕は一命を賭しても彼女を守る義務がある。それが僕と鈴ちゃんの関係なのだから。

僕はいからさんに声をかける。

「大丈夫ですか？」

自分でも驚く程に朗らかな声が出た。はいからさんは驚きの色を浮かべた。だが、答えようとして、また、激しく咳き込む。僕は優しく背を摩ったが、はいからさんの背を丸めてしゃがみ込んだ姿勢では埒が明かないと判断した。剣道で防具の無い脇の下に激しい打突を受けた時と同じだ。あれは肺を激しく打突された様なもので、片肺の空気が追い出され呼吸困難に陥る。まあ、一人前の剣士になるには、そういう打突への耐性を身に付けないといけないが、簡単に鍛えられる部所じゃ無い。新入生がそういう打突でしゃがみ込み呼吸困難に陥った時は無理矢理気道を上に開けて活を入れ、失った空気を補充させる。

僕は摩るのを止めて、はいからさんの胸と腹の間、横隔膜の辺りに右手を差し込む。はいからさんの予想外に豊かな乳房が右腕に押しつけられる。その柔らかな感触はブラジャーを付けていないもので、狼狽を覚えたが、かまわず横隔膜の中央に掌をあてがい、下から強く押し上げて気道を真っ直ぐに確保する。ややのけぞったはいからさんの背中、貝殻骨が作る背骨中央の凹みのやや下に、もう片方の掌を勢い良く押し当てる。

「——カハッ」

はいからさんは白いのど笛を天に晒す様にして、肺の空気を全てはき出す。次の瞬間、体が自然に深呼吸で肺を健全な空気の満ちた状態にする。後は暫くその姿勢を維持させて呼吸が落ち着くのを待つ。はいからさんの身体に力が戻ったので、僕は横からはいからさんを抱きかかえていた姿勢を解いて、はいからさんからやや距離を置いて離れる。

「失礼な真似を許して下さい。でも、もう、普通に息が出来るでしょう？」

はいからさんは抱きかかえられる様な仕草に羞恥を覚えたのか、顔を朱に染めて立ち上がり、俯いたまま

「ありがとうございます。楽になりました。お恥ずかしく思います」と言った。

「いえ、役得ですよ。貴女の柔らかい身体を抱く果報を得たのですから」

はいからさんはきつと顔を上げ、唇を尖らし、僕を睨んだ。僕はそれが可愛くて思わず柔らかい微笑で答えた。それではいからさんは首まで朱に染め俯いた。

「——神崎様は悪い男の子ですわね。そんな笑顔は鈴香様以外には向けてはなりません

よ」

そう言つてはいからさんは初めて鈴ちゃんが消えているのに気づいた。

「鈴香様はどちらに？ わたし、お詫びをしないとイケません」

「貴女のお名前を聞いて火急の用が出来た様です。後から追いつくと言いついてどこかに行つてしまいました」

はいからさんは顎に指を当てて少し難しい顔で宙を仰いだ。

「もしかして——わたしの為なのかしら？」

「多分。あれはそう言う女です。あのように激すると鬼女の様ですが、滅多にあることではありません。御理解の上、お許し頂けると有り難く思います」

はいからさんは暫し思案して無言になる。そして小さく呟いた。

「——あれは女性なら怪気を起こしてしかるべきでしょう。わたしが迂闊に過ぎました。神崎様にも心からお詫び申し上げます。美しい睦言を土足で穢したのですから、お詫びの言葉もございません」

泣き入りそうな声だった。僕は気分を害してはいなかったもので、朗らかに尋ねた。

「貴女はああ言うことを受け容れられる女性なのですね？ 巫女でもなさっていたのですか？」

「わたしの家系は女系相続を貫くものです。ですから世の不可思議はあるがまま受け容れる下地があるのでございますよ。わたしの家系では婚姻には七生を本気で誓います。ですから、あのような前世からの契りが深く結び直される様には乙女心が突き動かされます」

「貴女の思い人も七生を誓つた方なのですか？」

「——はい」

はいからさんの言葉は力強いものだった。

「では、鈴香は貴方方の契りの為に紛走しているのです。あれは約束は魂を賭けて果たすものとしていますから。僕は鈴香に貴女を任された。僕には鈴香の様な特別な力はありませんが、貴女が思い人と出会えるまで命を賭してお守りいたします。大丈夫。鈴香が紛走する以上、貴女の願いは叶います」

そう言いながら、僕はいからさんの手を引き立ち上がらせる。はいからさんは目を丸くして為されるがままだった。立ち上がったはいからさんは、目を丸くしたまま、ずいっと僕へ近づいた。顔が近い。顔が近い。よく見ると顔の造りが鈴ちゃんと似通っている。姉妹でも通用するだろう。でも、同じ顔の造りでも印象はまるで違う。僕が言うのはなんだけど、鈴ちゃんには抜き身の日本刀のような凄みがある。対して、はいからさんは日向でまどろむ子猫を連想させる。

そのはいからさんが目を驚きに丸くして詰め寄って来る。鈴ちゃんに詰め寄られている気がして、僕は後ずさった。思い詰めた様にはいからさんは言った。

「なぜです？」

「——はい？」

「なぜ、そんなに良くして下さるのです？ あなたたちは御仏の使いなのですか？」

真顔で言った。

僕は（このお姉さん、変な宗教にかぶれてるんじゃないか？）と思った。

「身も知らぬ言わば怪しい女ではありませんか？ 貴方方にとってわたしは……。それを

旧知の友人の様に受け容れて下さるばかりか、そこまで親身に力になって下さる。なぜです？ わたしには貴方が御仏の使いとしか思えません」

ああ。そう言うことかと思つた。まあ、確かに人が良すぎる。鈴ちゃんがああ言う風に請け負わなければ、幼なじみである姉御や伊達と僕の三人は彼女に不気味を覚え、お茶を濁して分かれただろう。なにしろせっかくの卒業旅行なのだから。

鈴ちゃん——彩宮鈴香と言う少女は、口数は少ないが、一度こうと決めたことには相手が大人であろうと従わざる得ないオーラがある。名家だから帝王学でも学んでいたのかもしれない。

僕らがいからさんを受け容れたのも、鈴ちゃんがそう決めたからだ。伊達なんかは相当文句がありそうだったが、遂に口にはしなかった。僕たち四人の行動は大抵遊び慣れた伊達が提案するが、その半数は学生の身では受け容れたいものがあり、姉御の鉄槌で強制的に却下される。希に鈴ちゃんが提案するときは、誰も逆らえない。

そう言う事情がある。

故に御仏の使い等と言う言葉は面映いばかりだが、説明も面倒だ。どうしたものかと僕は頭を掻く。

「……まあ、あれです。『情けは人の為ならず』ですよ。僕たちは幼い頃、地震の酷い災害の中、生き残った身でしてね。助け合いの大事さを身に浸みて知っている。それだけです。僕なんか父を失っている。助けて貰わなかったら飢え死にしていたかもしれない……」

言わずもがなのことを言ってしまった。真摯に僕を見つめていたはいからさんの大きな瞳が潤む。

「……辛いこと思い出させてすいません。わたし他人様の好意を素直に受け容れられない嫌な人間になっていました。なにかお礼をしなくては——」

「それこそ無意味でしょ？ 貴女は何時か助けられる人を助ければ良いのだと思いますよ」はいからさんは電撃に打たれた様な表情になる。項垂れて呟く。

「そうですね。そうでないといけないのに……」

何故か落ち込んだ様子で、また、座り込み固まってしまふ。どうしたものかと悩んでいると救いの声がした。

「神崎いー。なにかあったの？ なんか、鈴が凄い血相でどっか行っちゃったんだけど？」

「鈴ちゃんって人間かあ？ 摺り足なのに幽霊が飛ぶみたいに凄いスピードだったぜ」場を弁えぬ大声は姉御の後の伊達のものだ。

「あら！？」

姉御は意外に可愛い驚きの声を上げると、渡り廊下を滑る様に近づいて来る。

「どうしたの？ はいからさん？ 気分悪いの？」

それこそ『あっ』と言う間に、はいからさんの横に座り込み背を摩る。そして息を飲み蔽しい顔つきになる。

「どうしたのよ。この首の痣」

その言葉で僕は漸くはいからさんの白い首に掌の形の旋条痕がくつきりと浮かんでいるのに気づいた。

(鈴ちゃん。どんな握力してるんだよ?)

僕は天を仰いだ。姉御が早とちりする前にここは説明すべきだろうと僕が口を開こうとしたのを、姉御が掌を僕に向けて伸ばして制止する。姉御は厳しい顔で痣を調べていたが、わざとらしい明るい声で言った。

「この手の小ささは鈴香ね。はーん。分かったわ。神崎、あんた、はいからさんに何かエロイことしようとしたのでしょうか？ それとも、はいからさん。貴女が神崎に言い寄ったのかしら？ まあ、どちらのケースでも鈴香はいからさんを責めたでしょうね。あの娘は本性は餓狼並に凶暴なのよ。滅多なことでその本性を現さないのだけどね……。貴方たちがエロイことをしていたとしか思えないわねえ〜」

口調も顔も笑っているが、目が笑っていない。怖いことこの上ない。

「違います！ 違います！」
はいからさんが姉御に抱えられた姿勢で足をばたばたさせる。呆然と立ち尽くしていただけの伊達が、顔を傾げて裾の乱れに熱視線を向ける。本能と脊椎反射だけで生きているんじゃないか？ この男。

「わたしがお二方の密会を邪魔してしまつたのです。それで鈴香様のお怒りを買つてしまつたのです」

「あ——」
姉御が呆れ顔になる。

「生きてて良かったわね。鈴香は瞬時に人を殺す技を持っているからね。で、鈴香は恥じらいに走り去つたの？ 乙女か？ あいつは？ 神崎い〜 どんな過激な営みをしていたの？」

「営みとか言うなし！ 鈴ちゃんは急用が出来てどこかへ行つてしまつただけだよ。大体、そんな可愛げあるかよ？」

「——ないわね。皆目皆無。で、急用つてなに？」
はいからさんを立たせながら姉御が問う。

「いや、皆目検討がつかん。ただ、姉御に伝言があるぞ」
『なに？』と目で問う姉御に耳打ちで伝言を伝える。

姉御は瞬時に凍り付いた。

(一)

姉御は全てを諦めた表情で深いため息をついた。ちらりとはいからさんに視線を送ると、

「じゃあ、そう言うことなのね……」
「勘違いするなよ。彼女は人間だ。それに夏休みの様に禍々しいことにはならないと思うよ」

「そうね——こういうのは鈴で無いと分からないし、鈴はその為に動いているのでしょ？ ならわたし達は鈴が合流するまで、何食わぬ顔で観光しないとね」

「そうだな。楽しもう」

鈴ちゃんが合流するまで、彼女のメモ通り観光を楽しもうと皆に言い、取りあえず、天竜寺の庭を楽しむことにした。鈴ちゃんのメモには無数の書き込みがあり、彼女がどれ程、この旅行に身を入れていたかが伺われた。あの冷たい仮面の下にこんな情熱を隠しているなど、目の潤む話だ。心の中で密かに感涙していたら、伊達が身をすくめて言った。

「鈴ちゃん待ちか。それにしても冷えて来たな。上着を持って来たら良かった」

確かに体感で三度程気温が下がって感じる。それに空気の色も変わった様に思えた。妙にセピア色っぽい。明美も腑に落ちない顔つきだったが、明るく皆に声をかける。

「取りあえず、鈴のメモの通りに観光を楽しみましょう。立ち止まっても何だしね。取りあえず、この庭園、皆で回ろうよ」

当然、異論があるう筈も無く、僕たちは庭園を回る渡り廊下を歩き始める。ただ、恋人である僕だけの心情かもしれないが、鈴ちゃんが欠けただけで、グループから精彩が欠けた様に感じられた。皆、口数も少ない。

と、回廊の向こうから人影が見えた。

もんべ姿の腰の曲がった老婆と着古した紺色の着物を着た同年代の少女だった。その二人は僕たちの姿を見ると驚いた様に目を見開いた。僕たちを通す為に隅に寄り立ち止まる。それだけでは無い。深々とお辞儀をされた。流石に面食らったが、すれ違いざまに、こちらも頭を下げる。すると――

「良いお参りになります様に」

と少女が声をかけた。はいからは当然のことの様に

「ありがとうございます」

と応じる。心なしか生気が増している様に感じた。

「おそれいます」

と僕が答えると再び驚いた顔をした。二人は見えなくなるまで深々と僕たちにお辞儀をしたままだった。

はいからはクスクスと笑う。

「驚かれましたでしたね……」

「何故でしょう？」

「多分、異人さんと思われたんですよ。男の方は」

はいからは含み笑いを止めない。明美が僕の手を掴み耳寄せしてきた。

「神崎。おかしいよ」

「なにが？」

「あの女の子の格好だよ。多分、お参りに来たんだろうけど、今時の娘があんな着古した着物で外へ出るわけない。そもそも、ああ言う普段着の着物なんか売ってないよ。なんか本当に寒気がしてきたよ」

「だとしても――」

僕は鉄面皮のまま小声で答えた。

「それが当たり前前の顔で通すんだ。狼狽えちゃいけない。鈴ちゃんのメモはそう言う意味なんだと思う。兎に角、伊達を頼むぜ。あいつが騒ぎ出す前に明美がたしなめてくれ」

「――了解したわ」

姉御は低い声で答えたが、その顔色は青ざめていた。

回廊を一周して方丈に戻る頃には、何故はいからさんが僕たちを異人と称したのか理解していた。回廊では何組かの人たちとすれ違ったが、皆、深々と頭を下げる。そして洋装の人は殆ど居なかった。唯一出会った洋装の男性は、小柄な中年男で燕尾服に口髭を蓄え

ステッキを持っていた。連れ女性は鹿鳴館のダンスパーティーから抜け出たような、古風でかしまった洋装だった。このカップルも道を譲ってくれたが、男の方が英語で『日本建築は如何ですか？』と尋ねて来たので、日本語で「素晴らしいものですね」と答えてやると、驚きに息を飲んでた。方丈にも洋装の者は何人かいたが、僕らの様にラフな姿の者はいない。それに男性全般が小柄だった。平均身長は160センチと言ったところだろうか？ 僕や伊達は剣道で鍛えているので、逞しい大男に見えてしまう。ましてや伊達のように原色の派手な色使いの布地はどこを捜しても無い。なるほど異人扱いされる訳だと納得した。その伊達は顔色を無くしてなにやらごねていたが、明美に一喝されてからは暗い顔で口を真一文字に結んで堪えていた。静かなのは結構だが、一言も喋らぬ伊達は不気味だった。

その伊達も天竜寺の敷地を出て通りを前にすると遂に石像の様に固まってしまった。無理も無い。はいからさんを除く全員が固まってしまっている。

まず、芋の子を洗う様だった人混みが消えている。眼前にあるのは賑やかな街道だ。道路の舗装は消えていて、土が剥き出しだ。九割の人が和装で人力車がやたらと目立った。異人とは良く言った。僕たちは正に異界へ紛れ込んでいた。明美やはいからさんは景色に溶け込むが、僕と伊達は悪目立ちしていた。視線が集まって痛い。特に伊達は衆目を集めていた。視線を集めているせいか。伊達は硬直し、瞳孔が開いていた。今、まさに叫びだそうとした伊達の腕に明美がしがみついた。

「落ち着いて。怯えちゃ駄目よ」
優しく囁く。

僕は背後から伊達の両肩をがっしりと掴んだ。そして耳元で囁く。

「振り返るな。前を見る。もう負けたくないんだろう？ なら、平常心で受け止めろ」

伊達は暫く固まっていたが、やがて体を小刻みに震わせて「がぁー！」と叫んだ。僕らを振り払い、怒鳴る。

「あー！ 二人して耳元で囁くな！ 気色良いのか悪いのか分からん！」

伊達はそれから気まぐげに顔を背け、拗ねる様に呟いた。

「分かったよ——ありがとな」

僕と明美は伊達の首に腕を回して笑った。

はいからさんはそんな僕らを呆気に取られて見つめていた。

「で、次はどこに行くんだ？」

「ちよつと待って——もう！ 鈴の奴、肝心なときにばっくれて何だって言うのよ？

早く合流しろおー」

「明美。落ち着け。ああ。次は常寂光寺とあるな」

「あの——常寂光寺へ行くのなら、野宮神社に寄って行きませんか？」

会話に割って入ったはいからさんが、珍しく自己主張したので、僕たちは顔を見合わせた。

「ルートずれて大丈夫なの？」

「ずれると言う程じゃない。途中じゃないか。はいからさんは何故、野宮神社へ行きたいの？ やっぱり、恋愛成就？」

「恋愛成就？」

はいからさんははてなと言う表情で首を傾げた。

「違いますよ。天照大神をお祀りする場所ですし、歴代斎宮様がお籠もりになった場所ですからお参りしないと筋違いかなと思っただんです」

そんな大層な神社だったかと疑問に思っていると、伊達が言った。

「でも、このパンフレットには『恋愛成就のパワースポット』ってあるぞ。凄ええー。女子の山だ」

はいからさんは、そのパンフレットを覗き込み、不審げな顔をしていた。

世界が一変しているのだから、そのパンフレットは通用しまいと思った。はいからさんの知識の方が、この世界の標準かもしれない。確かめる価値はあると思った。

「いいよ。行ってみよう。はいからさん、道はこのパンフレットで合ってる？」

「あ、はい。合ってると思います。イメージが随分違いますけど……」

「大丈夫ですよ。そのパンフは虚構ですよ」

僕は自嘲気味にそう答えた。

竹林を分け入って小道に入る。竹の若葉が春の陽に照り返り、小道の中は新緑に染まった水底の様だった。観光客の姿もまばらだった。風がそよぐ度に照り返しがきらきらと輝くのが美しかった。

やがて、道路沿いの奥まった敷地の入り口に『野宮神社』と書かれた提灯がぶら下がっているのが見えた。敷地の奥は深く広い。その入り口には木皮ごと乾燥させて黒く塗った天然木で組んだ鳥居がある。珍しい造りの鳥居と言える。境内に入ると鮮やかな朱色が目を射る。社の囲い戸板が鮮やかな朱色に塗られている。本殿両脇の社も鮮やかな朱色だ。

境内には和装の年配の参拝客が多い。若い女性もいるが皆、袴姿か振り袖だ。境内の空気は落ち着いており、『恋愛成就のパワースポット』と言う様な浮ついた空気は無い。

僕たちは井戸の水を利用した手水で、手と口を清めて参拝した。伊達達が何を祈願したかは知らないが、僕は道中安全を祈願した。この事態である。他に祈願することは無かった。祭神は本殿が野宮大神（天照皇大神）、境内社が愛宕大神（本殿右）、白峰弁財天（本殿左）、白福稻荷大明神（本殿より右側の摂社）、大山弁財天（本殿より右側の摂社）、野宮大黒天（のみやだいこくてん…本殿左）となっていた。弁財天が二つもあるのは奇妙に思えた。また、天照大神と大黒天の組み合わせも奇妙に感じた。僕とはいからさんが本殿から境内社を一つずつ丁寧に回っている間、伊達は本殿を拝んだだけで、社務所の巫女さんに「恋愛成就の社やお守りは無いのか」と尋ねていた。開き直ると肝の太い野郎だ。普通、恥ずかしくて聞けない。余程、こだわりがあったのだろう。巫女さんは伊達の奇抜な格好に引いている様子だったが、お守りを示した後、社務所を出て、伊達と明美を大黒天の前にある亀石に案内した。伊達はしきりに礼を言い、その岩を明美と一緒に嬉しそうに撫で回してから、お守りを買って来た。僕は横目でそれを見ながら、

（こっちの世界の貨幣が通用するのか？）

と危惧したが、無事に買い求めているので、問題は無かったらしい。お参りを終えた僕とはいからさんの下に伊達は駆け寄ると、

「やっぱり、恋愛成就の効能はあったぜ」と嬉しげに言う。曰く、大黒天の前の亀石を撫でて願掛けするらしい。

「お守りも無茶安かったぜ！」

そう言つて白とピンクの勾玉のストラップのセットを見せる。

「いくらだったんだ？」

と尋ねると、

「セットで10円」

と喜色満面に答えた。物価水準が違うらしい。

「そりゃ、心配になるようなデフレだな。で、二人仲良く一本ずつ持つのか？ 明美。お前、恥ずかしくないのか？」

伊達の後に隠れている明美をそう揶揄すると、

「うるさい！」と真っ赤になつて叫んだ。可愛い反応だ。良いことだと思う。伊達も明美も物価の異常さには気づいている。敢えて無視して楽しむ事を優先しているのだ。それに異界にいたと言ふ意識が二人をより強く結びつけている。そこだけはこの状況における利点だ。鈴ちゃんのいない僕は違和感を感じる度に背筋がぞくぞくする。はいからさんもこんな感覚を味わっていたのかもしれない。例えば周囲を見回すと、携帯やデジカメを皆普通に持っているのだ。パシャパシャと写真撮っている。僕にしてみれば、大正時代に逆行した様な世界で、携帯で写真を撮る姿はホラーだ。最初は時代逆行したのかと思つたが、どうやらそんな単純な現象ではないらしい。

袴姿の女学生の一団に「あゝ。一緒に写つてもらえませんか？」と声を掛けられた時には顔が引きつったが、断るのも怖いので、笑顔を作つて写真に写った。

女学生の一団が去ると、はいからさんが近づいて来た。

「もてますね」

揶揄するはいからさんに、

「勘弁して下さい」と力なく答える。

「ああ、縁結びのお守りあつたそうですよ」

「——え？ 本当に？ ここは旅路の安全を願うので有名なのに……」

「この野宮神社は貴女が知る野宮神社なんですよね？ 伊達のパンフレットと違って」

「ええ。そうです。あのパンフレットはどこが作ったのでしょうか？ 現実離れしています」

「お守りが10円と言うのは高いですか？」

「相場だと思います」

「——なるほどね。貴女の世界に今度は僕らが迷い込んだ様だ」

「——どう言う意味でしょう？」

「気にしないで下さい。けれど嵯峨野ってこんなに観光客が少ないものですかね？」

「慰霊や恋の悩みで訪れる場所ですから、そう賑わう場所では無いでしょう」

「ああ、なるほど……」

僕は投げやりに答えた。元の世界へ戻るには鈴ちゃんの力に頼るしかないらしい。僕は鈴ちゃんの合流を切にねがった。

『何があつても驚くな』と鈴ちゃんは言い残したが、やせ我慢の限界は案外早くにやつて来そうだった。その一方で静寂に覆われた嵯峨野に馴染む自分もいた。これが本来の嵯峨野の姿の様に思えた。僕たちの知る観光化されて、人に溢れた嵯峨野こそ異界の様な気もしていた。ならば、情緒を味わつておくのが得策だと、僕は焦燥感を胸の片隅に無理矢理

追いやり、そう思うことにした。

(三)

花冷えと言って良いくらい冷えていた気温も陽が昇るにつけ、肌に心地よいそよ風に変わっていた。嵯峨野はその殆どが竹林で覆われた路地と言って良い。そよ風に吹かれて竹林の新緑がさやさやと囁く。その声色は心の奥底を潤してくれる。時に櫻が淡いピンクの靄となり、青緑の竹林を、艶めいたものに変えている。竹林の路地を進むにつれ、僕たちは寡黙になる。あの伊達ですら無駄口を叩かない。皆、自然に竹林の囁きに心を奪われていた。常寂光寺への道すがらは、静かでそれでいて心豊かなものだった。なにしろ、伊達でさえ神妙な顔で物思いに耽っている。ただ、伊達と姉御の表情には緊張の色が徐々に強まっている。対照的にはいからさんから怯えが消えて血色が良くなっている。

ここに来て、僕はいからさんと僕らの立場が逆転したことを認めた。

はいからさんは異邦人として唐突に現れたが、今は僕らが異邦人だ。いつ立場が逆転したのか分からない。鈴ちゃんの言葉を思い返すに、彩宮の結界を破って、はいからさんが姿を見せた辺りかもしれない。いずれにせよ、天竜寺の庭園から鈴ちゃんがいなくなったときには始まっていたのだろう。

そう。問題は鈴ちゃんだ。この事態を把握していて、物事を正しくあるべき様にする術を知るのは彼女だけだろう。だが、もう、昼時だと言うのに、合流する気配はまるで無い。そう考えて、はたと気づいた。鈴ちゃんが合流しようとしている世界は、この異界か？もし現実世界で僕らを捜していたなら、見つかるはずもない。

うつすらと寒気を覚えた。

僕らは僕らで真剣に現実世界へ戻る方法を模索せねばならないようだ。

考えた。答えは直ぐ出た。

『はいからさんを思い人に引き合わせる』

何を馬鹿なと呆れられただろうか？

僕はそれほど筋を外しているとは思わない。初志貫徹は曲げてはならない筋の一つだ。そして、異変はいからさんから始まっている。僕らが筋を通せば、他の筋も通るかもしれない。だが、問題はどこに居るか分からない、はいからさんの思い人をどうやって見付けるかだ。

風が吹いた、青竹の葉が陽光に煌めき、乱反射する中、桜色の花びらが金色に輝き、一瞬、視界を覆う。目を開けた時、三十メートル程前に、鈴ちゃんの式・猫の淡雪の白く輝く姿が見えた。

一瞬、目を疑った。だが間違い無い。ああも高貴な雰囲気の猫がそうそう居る筈も無い。

淡雪は道の隅に行儀良く座り、顎をくいと上げた。

『ついて来い』と言うことらしい。

僕は姉御の肩を指で突き、「明美。淡雪がいる……」と小声で告げたが、姉御は僕の指さす方向を凝視するが、「え？ どこよ？」と訝しげな声を上げる、どうやら僕にだけ見える様だ。こう言う事はままある。「見えなきや良いんだ。気にしないでくれ」といなす。

実際、淡雪は古いブラウン管テレビの画像の様に、ときおりノイズにかき消されそうに

なる、淡雪は立ち上がると優雅な歩みで歩を進める。僕はその後に従う事にした。僕が先頭に立って歩むと、皆、無言で付いて来る。暫し歩むと伊達が言った。

「おい。常寂光寺はそつちじゃないぜ」

「分かってる。ちよつと黙ってついて来てくれないか」

僕の言葉に伊達は二言を挟まなかった。

竹林の若葉の照り返しが、水底に居る様な錯覚を覚える遊歩道を小一時間歩くと、淡雪は山手へ通じる細い路地へと左に曲がった。竹林がアーチとなった路地は竹の香りが鼻をつくほどに緑が濃い。緩やかな斜面となった路地を登ると、唐突に視界が開けた。思わず息を飲んだ。

緑。緑。緑。緑。

そこは緑の世界だった。濃淡の異なる緑が上も下も覆っている。空気も違う。清涼な水気を含んだ空気はひんやりとしていて、一息つけた。

まず目を引くのは一面を覆う苔の緑だ。入念に手入れされているのだろう。痛んだ箇所は見あたらない。上空は竹と楓が覆っていて、陽光は真っ直ぐ入って来ない。燃え立つ緑の若葉の照り返しとなり、柔らかなたゆたう水のような光に変わり、周囲を満たしている。陽光はストレートには入って来ないものの、陰気な印象は無く、明るい水底に居る様だ。

正面に小さな門がある。

淡雪は躊躇無く門を潜る。淡雪の歩んだ軌跡が白い線になって残る様に思えた。

門を潜ると本堂と呼ぶには余りに小さく貧相な、苔むした庵が現れる。これが祇王寺かと心を打たれた。隠遁生活をするための佇まいが清々しい。淡雪は迷い無く庵の中へ入って行く。ここが目的地らしい。淡雪の案内なら、ここに鈴ちゃんがいる可能性は高い。

しかし――。

と僕は思う。なぜ、よりによって祇王寺なのだと、はいからさんを気遣う。

躊躇していると、伊達が「どうした？ 入らないのか？」と声を掛けてきた。豪放なこの男には祇王寺の由来を気にすることも無い。

「いや。参拝するよ」

僕は無表情でそう応えた。

拝観料は三十円だった。レートの違いも気になるが、僕らの持つ平成の硬貨、紙幣がそのまま使えるのが不気味だ。受付の女性は僕たちの財布に万札があることに目を剥いていた。

祇王寺は隠遁生活の為のものなので、狭い。祇王寺の中には二十名近い人がいたが、それでキャパシティぎりぎりだった。皆、着物姿で女性が八割を占める。僕たちが入ると、一様に奇異の目が僕と伊達に注がれた。氣勢を削がれたが、僕は鈴ちゃんの姿を捜す。広くない祇王寺の中に鈴ちゃんの姿は無かった。淡雪は床の間で丸まっている、僕は膝から力が抜ける様に落胆した。異界に紛れ込んだことは想像以上の緊張を僕に与えていたようだ。何より、鈴ちゃんと遭いたかった。あの、時として辛辣な冷たく整った顔が恋しくて堪らなかった。

僕は腰が砕けるままに、広間に胡座をかいた。無論、内心の落胆を仲間悟らせる様なことはしなかった。僕の右横に姉御、伊達の順で正座する。伊達が正座したことに僕は少なからず驚く。祇王寺の悲しい由来を肌で感じているのかもしれない。はいからさんも僕

の左に正座する。呼吸が聞こえる程、近かったので、多少、慌てる。

僕は視線を祇王寺の特徴である丸窓へ移した。丸窓に障子が閉められている。障子の紙に工夫があるのだろうか？ 日差しを取り込む丸窓から漏れる光は虹色に屈折している。外の木漏れ日の揺らぎが、その虹色の光を柔らかくたゆめかせて、なんとも幻想的な面持ちを作っている。吉野窓と言われる日本建築の妙である。

僕が喋らないので、三人は無言でパンフレットを見つめている。祇王寺の幻想的空間はあの伊達をして無駄口を叩かせない。

僕はパンフレットを見なかつたが、書かれていることは分かつて居る。

祇王寺が祇王寺と呼ばれる様になった由縁だ。その昔、平清盛の寵愛を受けた白拍子三人が、歳と共に美しさに陰りが差すと、たちまち、その寵愛は失われた。それを嘆いた白拍子は仏法に救いを求め、この祇王寺に隠遁して生涯を終えたのである。この祇王寺には今も白拍子達が諦観を以て仏法にかしづく空気が色濃く残っている。時が止まっているのだ。

はいからさんがため息と共にうそぶいた。

「殿方の愛はかくも冷めやすいものなのでしょうか？」

ほら。だから、はいからさんを祇王寺に入れるのを躊躇ったんだ。僕は。

「愛の形は様々だと思えます。それに清盛の情愛は情欲そのもので、愛ではないでしょう。少なくとも、全てを捨てて貴方と一人きりで暮らそうとする方とは覚悟が違います。まあ、僕も愛を語れるほど人生経験があるわけではありませんけれど……」

はいからさんは僕の言葉に静かに目を伏せた。

明美は品定めするような目を伊達に向け、伊達は亀のように首を縮めた。

僕は床の間の淡雪に目を向ける。丸まって寝息を立てている。どう言うつもりで案内したのだと思つたが、猫相手に本気になつても仕方無い。僕たちは祇王寺の苔むした庭を散策し雰囲気を味わつた。本堂に戻ると淡雪の姿は床の間には無く、玄関でちんまりと座っている。どうやら僕らに嵯峨野案内でもするつもりらしい。「牛に引かれて善光寺参り」は聞いたことがあるが、「猫に引かれて嵯峨野参り」はどうにも閉まらない。とは言え、鈴ちゃんの前世から式を務める霊猫である。無視は出来ない。僕は明美にだけ事情を話し、淡雪に誘われることに腹を決めた。明美もそれに真顔で賛同してくれた。

そんな僕らの覚悟に後ろ足で泥をかけてくるのが伊達である。

「おい！ 腹減つたぞ！ どつかで弁当喰おうぜ。いい加減荷物も重いぞ」

この状況下で空腹を覚えるとは大した大物だ。

僕と明美は顔を見合わせ苦笑した。

『精神的理由で食欲が無いときは、三食規則正しく、無理にでも喰え。それが心身を健康に保つコツだ』

剣の恩師・鳴神先生（女性）の言葉だ。乱暴な言葉だが一理ある。僕らは弁当を広げられる場所を捜し、竹林の若葉が天蓋の様に上を覆う窪地を見付けた。腰を下ろすのに適した大ききの岩も点在しているのだが、着物の女性陣を鑑み、緋毛氈を広げた。緋毛氈は半分に折った広さで広げるのがやっとで、僕たちは膝を突き合わせて食事を摂ることになった。重箱を広げながら、明美が言う。

「鈴、間に合わなかったね……」

「うん……」

「仕方無いやろ？ 合流出来たら食事の出来る喫茶店にでも入ろうぜ。弁当も四人前しかないんだろ？」

伊達は明美の肩を叩いて気楽に言う。

「まあ、そうなんだけどね。このお弁当、殆ど鈴香が作ったんだよ。神崎が食べるところ見たかったらうなあ〜って思ってた……」

その言葉に消え入りそうな声で、はいからさんが「……すいません」と呟く。

「貴女の所為じゃないわ。それに気易く謝らないで」

やや強い口調で明美が言う。はいからさんは怯えて狼狽え、「ごめんなさい」と又、謝った。明美が睨むとはいからさんは俯いてしまった。明美は何事も無かった様に顔を上げ、明るい笑顔で全員に声をかける。

「じゃあ、頂きましょう。みんな、鈴に感謝して食べなよ。残したら許さないぞ」

お重は五段。上四つがそれぞれのお弁当で、五段目は皆でつまむおかずが詰められている。

お弁当はタケノコご飯と、八分づきの玄米に梅肉と鰹節を絡めたものを、丁寧に俵握りにしている。どれも判で押した様な握り具合で、大きさに差比はない。几帳面な鈴ちゃんの性格が表れている。やや小ぶりのおむすびに、僕は鈴ちゃんの掌の小さを思い返し、ほくそ笑む。さわらの味噌焼きが二匹づつ入っている。保存食の味噌漬けでは無く、新鮮なさわらを料亭・彩宮秘伝の味噌に浅漬けしたもので、痛むのを避けたのだろう。う巻き横に黄金色の栗に似た一品がある。

「これはなんだい？」

明美に訊くと、「卵黄の味噌漬け。産みたて卵の卵黄を丁寧に取って、秘伝の味噌のベースにガーゼを敷いて、その上に丁寧に乗せて、冷蔵庫で一週間熟成させるの。珍味よ」

と答えが返って来た。箸でつまむと蒸した栗の様で卵黄とは信じられない。一口ほおばると、しつかり固まった卵黄が口の中で溶け、味噌の香ばしい香りが口中を満たす。

旨い！

味噌は卵黄に十分に染みており、上品な一品となっている。大抵の料理は食したつもりだが、それは僕の知らない珍味だった。鈴ちゃんは、一体何日前から弁当の用意をしていたのだろうか？

他に山菜の付け合わせ、タケノコと木の芽の和え物がある。いずれも材料から吟味された手作り、隙の無いもてなしに舌を巻く。

はいからさんは、目を丸くしている。彼女にはこの弁当の凄さが分かるのだろう。伊達は「旨い！ 旨い！」と言いながらがついている。出来るなら、もう少し下味を噛み締めて食べて欲しい。

「明美が三日前から鈴ちゃんの所に泊まり込んだのはこの為だったんだ。大変だったらう？」

明美が首を横にぶんぶん振る。

「私は盛りつけとか手伝っただけだよ。下味の昆布だしすら、私はよう取れなかったもん。本当に鈴が一人で仕上げたんだよ」

「こりや、ありがたく頂かないといけないな」

「明美い。なんか肉っ気はないのか？ 上品過ぎて物足りん」

明美は嘆息をついて、五段目のお重を中央へ押しやる。

「鈴はそう言うだろうと予想してたよ。ありがたく頂きな。わたしが作ったローストビーフだ！」

「ひよおーい！」

と伊達が喜びに奇声を上げる。僕は女性陣の情の深さにたじろぐものを感じながら、明美に再度、問う。

「ローストビーフ。一からお前が作ったの？」

「まあ、そうよ」

「大変だったろうに……」

「鈴に比べればたかが知れているわ。あの子、ろくに寝てないわよ」

「本当にすまん」

僕は深々と頭を垂れた。

「——彩宮様は板前も出来るのですか？」

驚きに箸が進んでいないはいからさんが呆然と尋ねる。

「あの子の家は料亭も営んでいるからね。門前の小僧なのかしら？」

「そんな？ きちんと修行しないとこの味は出せんわ」

はいからさん自体、味を見分けることの出来る上流階級の人と分かる発言だった。

先程から、喰うことに没入して僕らの会話など耳にも入らない伊達とは育ちが違う。ま

あ、伊達はあれで人物ではあると思うが……

弁当を口に運びながら、僕は言う。

「鈴香は凄いです。なんでも一流にこなす。およそ動じると言う事が無い。その鈴が貴女の名を聞くと同時に、慌てふためいて駆けて行ってしまった。こんなに楽しみにしていたお弁当も失念して」

「はいからさん。僕たちは貴女と思い人を会わせて上げたいと思って行動している。いい加減、貴女とその思い人の名を聞かせてくれても良いのじゃないですか？」

明美が弁当を食す手を止めぬまま、鋭利な視線を僕たちに送る。

はいからさんは電流に打たれた様に動きを止めた。弁当を横に置き、居住まいを糾す。

「誤魔化していたのではありません。お会いした時は自分が何者かも分からなかったのです。今は全てを思い出しました。」

わたしは梅埜沢家の一人娘・真魚まおにございます」

そこではいからさんは言葉を句切った。僕らに反応が無いのを見て、大きく吐息をついて言った。

「やはり皆様は違う世界の方々ですね」

「——この世界の住人なら知っていないとおかしいと？」

「五大財閥の一つにございます」

口調からして、こちらの世界では財閥解体はなされていないのだと思った。

「わたしは七生を誓った殿御がおりました。わたしが幼少の頃から、兄の様に面倒をみてくれた書生の羽生三悟様です」

「書生と申しましても身分の卑しい方ではございません。播磨国の名家・羽生家のご長男です。父も大事にしており、ゆくゆくは財閥を任せる腹でした。わたしが十五の歳にわたしと三悟様は晴れて婚約を交わしました。全ては夢のような日々でした」

「ところが昨年の園遊会で、わたしは宮家のお方に見初められました。わたしが婚約していることを知ると破棄を迫り、宮家の圧力で父の商売の邪魔も始めました。宮家を敵に回しては、いかな財閥とは言えまともな商いは出来ません」

「父はわたしと三悟様に婚約の破棄を伝え、わたしを宮家に嫁がせると言い出しました。わたしは三悟様に心中を持ちかけました。三悟様は笑って「それならば、道行きをいたしましよう」と申されました。「宮家と梅埜財閥を敵に回せばまともな暮らしは出来ませんが、それでも守ってみせます。如何ですか？」

わたしがどんなに嬉しかったか分かりますか？」

「わたしは父の言葉に従順に従う振りをし、三悟様は逐電されました。でも文のやり取りでお互いの状況は十二分に把握しておりました。三悟様はわたしの親友の名を借りて文を下さいました。無論、親友のみはわたし達の計画を知っておりました」

「三悟様は嵯峨野で出家し、わたしを迎える準備を整えて下さいました。そして、みちゆきの決行はわたしの短大の卒業式となりました。唯一、警護の者の手が手薄になる日でございます。卒業式の当日、お祝いをしようという友人達と共に東京駅近くまで来たわたしは、そつと離れて京都市の特急に着の身着のまま飛び乗ったのです」

「最終電車で嵯峨野に着きました。ところが、父の配下の者に追われ、わたしは我を忘れて逃げたのです。今正に捕まらんとした時、わたしは守り本尊として信仰していた虚空蔵菩薩に真摯に祈りました。白い霧に包まれ足下がほつれて、転倒しそうになった時、世界は一変し、わたしは貴方たちと出会ったのです」

僕と明美は、途中から弁当をついばみながら話を聞いていたのだが、はいからさんの独白が終わると同時に二人とも箸を置き、ぽかんと口を開けて見つめ合う。はいからさんは嗚咽を殺して泣いている。零れる涙を拭きもしない。伊達は嬉しそうにローストビーフを頬張っている。話が聞こえなかつた訳でも無いだろう。自称フェミニストが女の涙に気づかぬ筈もないだろう。だが、泰然と我関せずを貫いている。人物だ。自分には理解の及ばぬことだから、口を挟まない。潔すぎるスタイルだ。

では、僕と明美に理解出来たかと言うと、理解出来る訳が無い。

むしろ謎は深まった気がする。鈴ちゃんが、彼女の名を聞き、慌てふためいた理由など、この真魚と名乗る少女に尋ねても分かるまい。ましてや、鈴ちゃんが姿を消した理由など分かる訳もない。——待てよ。鈴ちゃんは「何があっても驚くな」と言った。僕たちが異界へ迷い込むことも想定していたのじゃないか？

こうなると不条理への対応に慣れた鈴ちゃんの不在は痛い。仕方が無い。僕は『後のお姉さん』に縋ることにした。ところが、念話で呼び掛けても、お姉さんは応えない。お姉さんは気配ごと消えていた。

僕は茫然自失に陥った。なんだかんだ言っても『後のお姉さん』の助けは大きい。それが得られないとなると僕は只の普通の人間だ。

僕と明美が呆けて固まったままでいるので、渋々と言った様子で伊達が口を開いた。

「問題は、俺達がどうすれば元の世界へ戻れるかじゃないのか？」

至言だった。僕は勢い込んで伊達に尋ねた。

「何か案があるのか？」

明美も期待に満ちた視線を伊達に送る。伊達は大笑した。

「よせよ。俺は一般人だぜ。なにも分かるもんか。こう言うのは鈴ちゃんや神崎の領分だろう？ 鈴ちゃんはいねえ。神崎にもお手上げと言うなら意見はあるぜ」

「——聞こう」

「はいからさんとはここでお別れすべきだ。俺達はいからさんに引っ張られていると思う」

はいからさん、真魚さんは目を伏せて微動だにしない。明美は、暫し息を飲んだ後、小声で反論した。

「だけど、鈴にはいからさんを頼むと言われてるし……」

「言葉にして言われたか？ 彼女は俺達とは別の世界の住人だ。一緒に行動するのが得策とは思えねえな」

伊達の言うことは正論だ。だが、正論が正しい道とは限らない。違和感を覚えた僕は反論した。

「そいつは下策じゃないかな？」

伊達は眉を怒らせた。

「なんだよ？ 妙案でも閃いたのか？」

「妙案って訳じゃないんだけど……鈴ちゃんだよ。鈴ちゃんは真魚さんに約束したぜ。思いに合わせてあげるって。鈴ちゃんは出来ないことは約束しない。こうなることも予測していたと思うんだ。鈴ちゃんと合流するには僕たちも彼女の思い人捜しをするべきだと思っただ。それに正直、鈴ちゃんが側にいないと生きていけそうにない」

僕は視線を下げた。明美が苦笑する。

「はい。はい。ごちそうさま。でも、筋は通ってるわね」

「そうかあ？ 楽観主義の最たる例だと思うが……」

はいからさんは終始俯いたまま無言である。

「それじゃあ、僕の案で良いかな？」

「是非も無し」「善哉。善哉」なぜか漢文調で答える二人。はいからさんは小さく「すいません」と呟いた。

僕はそれには取り合わず、はいからさんに尋ねた。

「そう言う訳です。今、この世界はあなたが元居た世界で間違いないですか？」

はいからさんは顔を上げた。

「多分、間違い無いと思います」

「それなら、あなたの思い人を捜すのも楽になる。写真なんかお持ちじゃないですか？ 待ち合わせの場所は思い出しましたか？」

「写真なら——」

はいからさんは、そう言って、首からロケット型の銀のネックレスを外した。ロケットの中には書生姿の青年の写真があった。精悍な顔立ちで、きりりと結んだ唇が禁欲的な性格を現している様に思えた。

「この方が羽生さんですか？」

「ええ」と頷くはいからさん。どれどれと明美と伊達も肩越しに覗いて来る。

「神崎に雰囲気が似てるね」

明美が呟く。

「――よせよ」

生理的嫌悪を覚えて、僕は否定する。そして、はいからさんに尋ねる。

「待ち合わせの場所。思いだしたんですよね？ どこです？」

「直指庵です。住職の方に言えば取りなしてくるようお願いしてあるとのことでした。」

――ああ。わたしは何故こんな大事なことを忘れていたのでしょう？」

記憶が蘇った喜びからか、はいからさんは顔を両手で覆って泣き崩れた。明美が背を摩つて慰める。

「目処が立ったな」

伊達が僕の顔を見て言った。

「鈴ちゃんのプランにも直指庵が入ってる。期待して良いんじゃないか？」

破顔する伊達に僕は「ああ……」と素っ気なく答えた。それほど樂觀的にはなれなかったのだ。はいからさんは卒業式の日に嵯峨野へ向かったと言った。今の嵯峨野は桜の季節だ。一ヶ月ほどのタイムラグがある。追っ手までかけられ、正にその手に落ちようとしていたはいからさんが、今こうしてのんきでいられることに違和感を覚えずにはいられない。

考えすぎかなと思っていると、明美がみんなに声を掛けた。

「目的地も分かったし、昼飯をかたしましょうよ。それこそ鈴ちゃんに申し訳ないでしょう？」

道理である。僕たちは昼飯を再開し、ことさら明るい話題で盛り上がった。これから直指庵へ行く事への期待と不安が誰の胸にもあった。と、足下で「にゃあ」と猫の声がした。まだ若い猫の甘えた肉声である。「え？ どこから？」と捜す間もなく、白い塊がはいからさんの膝に乗った。ちりりんと鈴の音がした。純白の猫は赤い首輪をしており、動く度に首輪の鈴が鳴る。猫はごろごろと喉を鳴らしてはいからさんに甘える。さわらの味噌漬けをねだっているようだ。鈴ちゃんの式・淡雪を知る僕たち三人は固まってしまった。淡雪は霊体で触れないし、首輪もつけていない。だが、眼前の猫は淡雪そのものに見えた。

「あら！ あら！ 淡雪！ お前どうしたの？ どこから来たの？」

固まる僕たちを尻目にはいからさんが嬌声を上げる。さわらの味噌漬けを分け与え、一心不乱に食する猫を撫で回している。うっすらと涙を浮かべていた。

「あの……。その猫、なんすか？」

伊達が恐る恐る尋ねる。はいからさんは嬉しげに答えた。

「わたしの愛猫の淡雪です。羽生様と一緒に逐電したのです。三悟様はわたしと思って可愛がるとおっしゃっていました。三悟様、お近くにおいでなのかしら？」

はいからさんは喜々として浮き足立っている。

「さんごさまー！」と三回、周囲に呼び掛けたりもしたが、返事は無い。明美が僕に耳打ちする。

「ねえ。ねえ。これって偶然の一致なの？」

「馬鹿な！」

僕は言下に斬り捨てた。

「こんな偶然の一致があつてたまるか」

はいからさんと鈴ちゃんの縁は想像以上に深いのだろう。

昼飯が終わると淡雪はぽんと道へと進み、そこでちんまり座って僕らを待った。

「どうやら道案内をしてくれるらしい……」

呆然と呟く僕の言葉に、はいからさんは

「三悟様の所に連れて行ってくれるんですね！」

と少女の様にはしゃいだ。

僕は答えられなかった。

(どこに連れて行かれるのやら……)

そう不安に感じたのは僕だけではなかった筈だ。

(一)

淡雪は狭い路地を選んで優雅に歩を進める。白く長い尻尾をピンと立て、ゆらゆらと揺らして歩む。着いて行く方としては人一人がやっと通れる路地などで、苦勞が伴う。明美が着物を傷つけないよう細心の注意を払わねばならないので、どうしても遅れが出る。竹藪の隙間を縫う様に歩いているので、方向感覚が分からない。太陽の位置で確認しようにも、頭上は新緑の竹のアーチで覆われている。竹林の迷路巡りをしているようだ。時折、どこからともなく、桜の花びらが風に舞い降りて来る。人の声はまるでせず、野鳥の囀りが木霊する。

随分な距離を歩かされた。はいからさんの明るい笑顔に影が差す。

「淡雪はこんなに行動範囲の広い猫ではないのに、どうしたのでしょうか？」

僕は答えに窮した。淡雪は雌猫で家猫だと聞いている。餌に窮しなければ家から出ることも希だろう。羽生三悟なる人物の手元を離れて久しい可能性がある。そこには事件性があるように推測された。淡雪はいからさんをどこへ誘おうと言うのだろうか？

細い路地からやや広い道へ出て、味わっていた閉塞感から解放された。寺の門前に出ていた。清涼寺の門前だった。ここも観光スポットとして名高い。寄りたいと思ったが、淡雪は僕らに休むことを許さず。東へと北嵯峨方面と進む。今度はやや広い道だ。観光地からは大きく外れることになる。北嵯峨にも観光スポットは点在するが、中心の観光地からは大きく距離が離れているので、こちらを回るのは余程の好事家に限られる。

周囲には田園風景が混じるようになり、人影は綺麗に消えた。人影と共に物音も消え、梢を揺らす風の音と、時折、聞こえる鶯の声が高く響く。後は僕らの足音のみだ。道は比較的広く、僕たちは並んで歩くことが出来た。とは言え、道は舗装されている訳ではない。黒い腐葉土から白っぽい野道にいつの間にか変わっている。乾燥して土埃が立つので、明美は裾を相当気にしている。周囲は竹林の小道から完全な田園風景へと変わった。見渡す限り畑で、農家の小屋が点在する。けれど、人っ子一人も目にしない。まるで世界に僕らしか居ないような錯覚に陥る。不安が入道雲のように湧いてくる。

けれど、淡雪はそんな僕らに意にも介せず、早足で前に行く。

堪えかねて口を切ったのは伊達だった。

「おい。俺達はどこへ連れて行かれてるんだ？」

「北嵯峨へ向かっているから、直指庵じゃないか？」

「なんで人が居ないんだ？」

「観光コースじゃない。農家の人は、お日様がっぺん回ったら仕事しないだろうよ」

「本当について行って大丈夫なのかよ？ 相手は猫だぜ？」

「きまぐれも起こさず真っ直ぐ案内してるじゃないか。信じなくてどうする？」

会話に加わらなかつた、はいからさんと明美は息苦しそうだ。着物で歩くには随分な距離を歩いている。顔はやや上気しているが、それでも精神力で汗を抑えているのは流石と言えた。軽装の僕や伊達はとっくに汗をかいている。それでも口をきく気力はないらしい。

唐突に広い道に出た。

直角に北へ向かう道で、舗装はされていないが轍の跡がある。遠くに小さくバス停が見

えたので、車道を兼ねているらしい。淡雪は僕らを振り返ると、バス道を北へと歩み始めた。進行方向にはこんもりとした森に覆われた古刹がある。大きな古刹の背後は大きな池で周囲を桜で囲まれているので、薄桃色の霞の雲があるように見えた。

僕は地図を取り出し、その古刹を確かめた。

——大覚寺？

確かに直指庵に向かうには、この道しかない。だが、はいからさんには鬼門ではないか？遠回りしてでも避けたい古刹だが、淡雪の足取りに迷いは無い。他のメンバーは黙って淡雪の後をついて行く。やや送れた僕は（ままよ！）と内心叫んで、追い付いた。まさか、大覚寺には寄るまいと思った。

だが淡雪は躊躇無く、大覚寺の門を潜ったのだった。

大覚寺。

皇室縁の真言宗の古刹である。

元は平安時代初期の嵯峨天皇の離宮である。嵯峨天皇の知己の空海が離宮に五大明王を祀ったことから、寺院の性質を帯び、嵯峨天皇の死後、その菩提寺となった。写経の寺として知られ、歴代天皇が写経を奉納している。

そう言う性格の寺だ。官家を敵に回しているはいからさんには完全アウェイの場所である。どうするのだろうかと思つて見ていると、はいからさんは躊躇せず山門へ向かったのので、僕達はその後に従った。

山門の受付の初老の女性は、駆け寄って来る僕ら一団にぎよつとした表情を浮かべた。

「拝観。大人四名！」

僕は短く叫ぶ。山門を潜った淡雪は駆ける様な勢いで奥へと姿を消す。それを追つてはいからさんが、慌てて山門を潜る。チケットは持つてない。姉御と伊達はいからさんを追いかける。姉御が振り返りざまに「神崎！」と叫んだ。

「先に行け！」僕は姉御に応えた。「直ぐに追い付く」

拝観チケットは大沢池庭園の周遊券がセットになって、五十円だった。気を急いでいる僕に受付の女性はチケットと一緒に四人分のパンフレットを押しつけた。僕はそれを脇に抱え走る。気配では大覚寺に入った様子は無い。真っ直ぐに大沢の池へ向かっていた。大覚寺の正面を右折れして迂回する。大覚寺の大伽藍を横目に大沢の池へと走る。

予感があった。ここで何かが起きると。

その予感が焦燥となり、僕たちを急かしたのだ。

理由はあった。淡雪の歩みが迷い無く、一直線のものに変わっていた。スピードも速くなっていた。淡雪は目的地に僕たちを誘おうとしている。そう感じた。

唐突に視界が開けた。

桜色に輝く靄が視界の周囲を彩っている。静かな水面は鏡の様だ。空の青と桜色の靄を映して輝いている。仏塔の朱塗りの赤が鮮やかに湖面を割っている。

はいからさん達は四百メートル程離れた岸部に立っていた。呆然と。

鮮やかな湖面に背を向けて、岸辺の土手を見つめている。僕は心臓が高鳴るのを感じたので、呼吸を深くし、ゆっくりと三人に歩み寄った。伊達の肩に手を置くと、伊達はぶる

つと身体を強ばらせた。ぎこちなくこちらを振り返る。

「———どうした？」

そう尋ねると、伊達は土手の一角を指さした。

そこにはいかにも手作りの六十センチ程の高さの不細工な石仏があり、淡雪が身体をすり寄せていた。喉をごろごろ鳴らしている。正確には石仏と言うより地蔵だ。その地蔵が異形に見えるのは、白粉を塗り、口紅に朱をさしているからだ。無骨な素人じみた造りがリアルに見えて不気味を感じさせる。地蔵の足下には数束の花束が添えられている。

「———知っている。」

この地蔵の意味を僕は知っている。

新仏が出たのだ。この場所だ。地蔵は墓標だ。京都では仏の出た場所に地蔵を置く風習がある。地蔵に化粧するのも京都独特の風習だ。

淡雪が案内したかったのは———示したかったのは、この新仏か？ それは何を意味する？ 背筋を冷たい汗が流れ、僕は言葉を失う。

「なあ？ 神崎？ こりや何だ？」

供えられた花束から流石に何かを察しているのか？ 伊達は引きつった笑顔で尋ねる。

「———地蔵だよ」

僕は機械的に答えた。伊達は僕の胸ぐらを掴んだ。

「なんで、俺らは地蔵なんか案内されてるんだよ？ この地蔵は何なんだよ？」

僕は貝の様に口をつぐむ。はいからさんは蒼白な顔色で地蔵を睨んで動かない。姉御はそんなはいからさんをじっと見つめている。伊達は口をつぐんで棒の様になった僕を放し、不機嫌そうに唾を吐いた。とたんに姉御の鋭い一瞥が飛ぶ。伊達はぺこぺこ頭を下げた。姉御は吐息をつく、視線をはいからさんに戻した。この間、無言である。空気は張り詰めて重い。僕はいからさんに掛ける言葉が見つからない。仕方が無い。どこの誰かは知らないが、これも何かの縁だ。仏さんに手を合わせておこうと、しゃがんで合掌しようとする、伊達の怒号が飛んだ。

「神崎！ やめろよ！ 不謹慎だろうが！」

見るとはいからさんまで殺気だつて僕を見据えている。姉御はやれやれと首を振っていた。

「いや……この地蔵はだな……」

気まずい空気に僕は言い訳を始める。その時だった。低くて渋いだみ声が響いた。

「こんにちは。ご苦労様です。お参りですかな？」

本堂から続く一本道を初老の僧侶がやって来る。作務衣だが、筋骨隆々とした肉体が見て取れる。顔も含めて仁王像の様な人物だった。手に白の菊の花束を生けた木桶を持っている。僕たちの装束の異様さはまるで意に介していない様子だった。初老の僧は真っ直ぐに地蔵目指して進んで来る。気押されて、僕たちは場所を空ける。仁王の様な初老の僧は無言で笑みを浮かべると、優しい目で僕たちを見つめながら、ぺこりと頭を下げた。僧は地蔵の前で手を合わせて一礼すると、膝をついて座ると、合掌したまま低い声で真言を唱え、数珠を鳴らした。木桶の水を柄杓ですくい、地蔵の頭にかける。そうして長いお経を唱えた。僕たちは呆然とその僧の広い背中に見入っていた。

僧侶はお経を唱え終わると、地蔵に一礼し、菊の花束を地蔵に供えた。僧侶は座ったま

ま、僕らの方へ向きを変えて言った。

「この手向けの花は君たちが供えてくれたのかね？」

皆、緊張に身体を強ばらせて、即答出来ない。やむなく僕が答えた。

「いいえ。違います。僕らは旅行者客です。ここも初めて来ました」

「旅行者客の方で、この大覚寺まで足を伸ばす方は珍しい。これも何かの縁です。どうかこの仏を拝んでやってくださらんか？」

僧侶は地蔵にじやれついていた淡雪をそっと抱きかかえて言った。

「このお地蔵様はお墓なんですか？」

意を決した様に明美が問う。

「墓は別にありますが、亡くなられたのはここです。まあ、墓標のようなものです。京都の地蔵は殆どが亡くなった方への供養の為のものです」

そう答えて、淡雪を撫でる。淡雪は安心しきって身体を預け、喉をごろごろと鳴らした。

「今日が初めての祥月命日になります。むごたらしい殺され方をされたので、菩提を弔ってやって下さい。仏もさぞ無念だったと思いますので……」

「——殺された……？」

はいからさんが血の気の失せた顔でうわごとのように呟く。伊達の表情が厳しいものとなる。

「殺人事件なのですか？ 仏様はどのようなお方だったのでしょうか？ 犯人は捕まったのですか？ なぜ、仏様は殺されたのでしょうか？」

殺人という異常な事態に僕は勢い込んで尋ねた。その勢いに僧侶は苦笑を浮かべる。

「殺される様な方では無かった。二ヶ月ほど前から、直指庵に居候された若い書生さんにしてな、人格者で学もあつた。直指庵の若い修行僧らと良く仏道について語り合っておられました。何か事情があつて身を隠しておられた様だ。人を待っているとも言っておりました。一月前に無法者十数名に夜襲をかけられましてな、ここまで逃げて来たが、多勢に無勢。しこたま殴る蹴るの暴行を受け、気を失ったところを簀巻きにされて、池に投げ込まれた。寒い夜でしたな、池には氷が張っていた。直指庵の若い者達が騒ぎを聞きつけ助太刀に駆けつけましたが、無法者共は池に近づけぬ様立ち回り、半時が過ぎた当たりで闇の中に蜘蛛の子を散らす様に逃げた。直ぐに池から引き上げましたが、もう息は無かつたと聞きます」

「警察は動かなかったのですか？」

「そこです！」

僧は厳しい表情で応えた。

「どう言う訳か、大覚寺側が事が公になるのを嫌つてもみ消しに動きましてな。賊を捕らえることも敵わず、仏様の氏素性も分からぬままです。大覚寺と直指庵の僧侶のみが知る所です。我々に出来たのは、こんな地蔵を置く程度でしたのじゃ」

僧はそう言う淡雪に頼ずりした。

「この子猫は仏様の飼猫でしたな。今も主人を求めてこの辺りを彷徨っている。不憫なので、我らが餌を与えております」

その瞬間、はいからさんの身体が崩れ落ちた。

(二)

大覚寺の庫裏にはいからさんは運び込まれ、ふかふかの布団に寝かされた。明美が「男の方は出て行ってくれますか？」と厳しい声音で言うので、僕と伊達、仁王の様な老僧、大覚寺の男衆は襖を閉めて、広い廊下に出た。僕と伊達、僧侶が廊下に胡座をかいて座り込む中、男衆は慌ただしく庫裏の奥へと消えた。ろくに会話も交わしていない。

「———どうにも剣呑だな」

胸中に浮かぶそんな思いを、僕は瞼を閉じて瞑想することで打ち消した。

淡雪は老僧の膝の上で暢気に寝息を立てている。伊達は右の親指の爪を嚙りながらしきりに身体を揺らしていた。

「畜生。何がどうなっているんだ？」そんな呟きが漏れ聞こえる。老僧は黙って静かに猫を撫でている。

庫裏の奥で人の気配が動いた。

大僧正と思える痩せた老僧を先頭に若い僧侶が行列を作ってやって来る。痩せた老僧の僧衣は実に煌びやかなもので、頭に頭巾を被っている。僕と伊達は即座に正座に切り替え、庫裏からの一団に向き直る。仁王の様な老僧は平然として視線すら動かさない。

大僧正とおぼしき人物は僕たちの手前で止まり立ったまま言った。

「管主の慈雲と申します」

僕と伊達は両手をつけて礼をする。

「この度はご迷惑をおかけしています」

「実際に迷惑なのです。ハイヤーをご用意しますから、直ぐに病院へ行って頂けませんか」あまりに怜悯なその言葉に僕は驚いて顔を上げる。伊達も同時に顔を上げるが、喧嘩をする時の野卑な顔つきをしていた。慈雲と名乗った老僧は能面の様に無表情だ。

「おい。それはなかるうよ。慈雲さん」

間延びした揶揄する様な口調で語りかけたのは、仁王の様な体格の老僧だった。ニヤニヤと笑っている。

「円覚さんは当寺院とは関係が無い。口を挟まないで頂こうか」

「同じ仏門に身を置く者として、それは出来んよ。死、老、病、飢えの苦しみから民を救うのが、我らの務め。境内で倒れた者を追い出すのは如何かな？」

追随する様に伊達が吼えた。

「俺達は客だぞ！」

「そうそう。浄財を払って境内に入った者を追い返したとあつては禍根を残そうと言うものだ」

「円覚さん。脅されるか？ 風説を流す気ではなかるうな？」

能面が崩れて焦る。円覚と呼ばれた僧侶はニヤニヤ笑顔を崩さず言う。

「脅す？ 風説？ 流されて困る風説がおありですか？」

慈雲は憎々しげに睨み付けるが、言葉は出ない。

僕は静かに立ち上がった。慈雲にすれば足下から頭一つ分高い若い肉体が圧倒する様に立ち上った様な感覚を抱いただろう。

「———御坊」

僕は慈雲の白い顔を見下ろして言う。

「——な、なにか？」

慈雲は僕の気に押され怖じ気づく。

「ご迷惑は承知。だが、わたし達も目的があつて嵯峨野を訪れています。その目的を果たすまではこの地を離れられない。どうか、連れが目を覚ますまで、休ませては貰えませんか？ この通りです」

僕は頭を垂れた。

慈雲と言う老僧は口籠もった。「何時、目覚めるか。分からないではないですか？」と敬語で返して来る。僕は襖越しに聞き耳を立てているだろう相手に呼び掛けた。

「明美」

「——はい」

澄ました声が応える。

正座して襖を僅かに開けた明美は、半身を滑らす様に廊下に出ると、正座したまま襖を閉める。見事な所作だった。明美は慈雲に向かい正座のまま、両手を揃えて礼をすると、頭を上げずに言う。

「帯などを緩め、頭を冷やさして頂いています。呼吸は平常に戻りつつありますので、半時もすれば目覚めるでしょう」

言い終わると明美は視線を僕に送る。僕は明美にウインクを返してから、慈雲と向き直る。

「お聞きの通りです。半時の間、休ませてやって頂きたい。そうすれば、何も他言いたしません」

半時ですぞ。約定ですぞと何度も念を押して慈雲は庫裏の奥へと下がった。明美は早々にはいからさんが寝かされている部屋に戻っている。

大覚寺の関係者は僕たちを蛇蝎の様に避けたので、僕と伊達、円覚と言う僧侶は広い廊下にポツネンと取り残された。暫しの沈黙の後、円覚さんが「かかかかかっ！」と突然、高笑いをしたので、僕と伊達は身体をビクリとさせる。

「いやいやいや。あの慈雲をやり込めるとは小気味良い若者達じゃ。相当に出来るな。お主達」

僕と伊達は肩をばんばん叩かれる。

「いえ。恐れ入ります。御坊こそ、助け船を出して頂きありがとうございます」

「なに。それこそ礼には及ばん。慈雲の奴を苛めるのは僕の趣味じゃ」

円覚はまた「かかかかかっ」と笑った。

「なににせよ、お主ら気に入った。あの娘御が目覚めたら、ウチの寺へ来るが良い。貧乏寺だが、白湯くらいは振る舞おう」

「円覚様のお寺は何と言うのですか？」

「儂の寺ではない。寝起きを許して貰っているだけじゃよ。——そうじゃの。寺の名は直指庵と言う」

円覚は指を立てて悪戯っぽく言う。

「どうせ寄るつもりじゃったじゃろ？」

僕は無言で苦笑した。伊達がむくりと立ち上がる。

「坊さん。それじゃあ、羽生三悟って男のことを知っているのか？」

「無論。良く知っておる。あの娘御にはとくと話して聞かせる必要があるじやろう」

円覚は瞑目して深く頷いた。こちらの素性はお見通しらしい。

「羽生三悟は殺されたのか？」

目を剥いて、押し殺した声で伊達は訊いた。敵討ちでもしそうな気迫があった。円覚は顎を撫で、値踏みするように伊達を見る。

「さて。どうだかな——今、ここでする話ではなからうよ」

そう言つて、「のう？」と僕を見る。

「そうですね……」

僕はそう答えざる得なかつた。

暫し沈黙があつた。襖がするすると開く音が沈黙を破つた。正座して襖を開けた明美は僕、伊達、円覚氏の順に瞳を見据えると、「——目を覚ましたわ」と告げた。様子を尋ねようとした僕を手で制して、さらに言う。

「とても落ち着いているわ。怖いくらいに」

「入つて良いかの？」

円覚氏の問いに明美は「はい」と答える。円覚氏に続いて襖を潜つた僕は全身が凍り付く。はいからさんの枕元に鈴ちゃんが座つて、はいからさんの手を取つている。何か言おうとしたが声が出なかつた。後から伊達が「早く行けよ」と機嫌の悪い声で言う。その伊達を振り返つた一瞬で、鈴ちゃんの姿は煙の様に消えていた。白日夢にしては異様にリアルだった。桜吹雪をあしらつた振り袖が目に焼き付いている。しかし、明美も伊達も騒がない。見えていないのだ。僕は幻を見たことを自分の心に仕舞つた。妙な騒ぎを起こしても意味が無い。円覚氏だけが、興味深げに僕を振り返つていた。

(三)

僕たちが枕元に座ると、はいからさんは明美の手を借りて上半身を起こし、丁寧にお辞儀をした。

「——どうも。ご迷惑をおかけしました」

その声色は落ち着いたものだったが、どこか儂げで、目を離すと消えてしまふような心地になつた。元々、色白な肌の色も血の気が失せて更に白くなつている。いや、透明感が出ていた。向こうが透けて見える錯覚に陥る。その儂さ危うさが、彼女の美しさを際立たせていた。僕はただ息を飲む。

誰もはいからさんの言葉に応えないので、伊達がひょうきんに言う。

「いや、全然、迷惑じゃないつすよ。それより、体調はどうなんすか？」

「ありがとうございます。もう、大丈夫です」

そう言つて、頭を垂れ、はいからさんは微笑むが、その笑顔すら儂げだった。どこか人間離れしている。咳払いして、円覚氏が口を開いた。

「儂は直指庵で世話になつとる円覚と言う者じゃが、お嬢ちゃんは真魚さんで相違ないか？」

暫し瞑目して、はいからさんは首を縦に振つた。

「そう言うことなら、この寺に長居は出来んな。直指庵に来るかね？ 三悟君の残した物もある。積もる話もある」

「是非、お伺いしたいです」

はいからさんは毅然として言った。

「では、行こう」

円覚氏は破顔した。男達が席を外そうとしたとき、「神崎様」と僕はいからさんに声を掛けられた。

「なんですか？」と応じるとはいからさんとはとんでもないことを口にした。

「わたし。今まで鈴香様と一緒にいました。鈴香様は三悟様は生きていますと請け合つて下さいました」

その言葉に明美は目を丸くして、息を飲む。伊達に至っては狂人を見る目をしていた。僕は鈴ちゃんの幻を見ているから、その言葉が無碍に出来ない。一端、浮かした腰を下ろして「どう言うことですか？」と問い糾した。円覚氏も驚きに目を丸くして座った。はいからさんは独白する。

「わたしは夜の闇の中、階段を駆け上っていました。追っ手から逃げていたのです。背後からは「こっちだ！」と言う声が迫って来ます。最早、ここまでかと思ひ、懐に俵ばせた短剣に手を伸ばした時、後から強く「こっちよ！」と手を引つ張られました。わたしは落ちる様に上下の感覚すら無い深淵の闇へと引つ張られたのです。すぐそこまで迫っていた追っ手の声も聞こえません。闇の中、鈴香様の御姿だけが煌めいて見えました。

鈴香様は短刀を握りしめたわたしの姿を見て、涼やかにお笑いになりました。

「なに、物騒なこと考えてるの？」

わたしは鈴香様に縋って号泣しました。

「三悟様が——三悟様が殺められてしまいました。せめて後を追いたいです！」

「馬鹿なことを——それは未来の可能性の一つよ。貴女の為なら未来くらい変えて上げるわ。貴女は今、過去にいるのよ。そして、この狭間から出る時、改めてわたし達と出会うの。その時、未来は変わっているわ。三悟様は生きておいでよ。彼もまた狭間にいるの。貴女が生きていると信じれば、その力で彼は狭間から出てくるわよ。わたし、約束は違えたことが無いのが自慢なの」

「本当ですか？ 本当に三悟様は生きておられますか？」

「わたしを信じなさい。会わせて上げると言ったでしょう？ 会える未来へ誘ってあげる。それまで手を握っているわ。だから、安心して」

鈴香様は今の今までわたしの手を握ってくれていました。その温もりが残っています。だから、わたしは三悟様は生きておられると信じます」

強い視線で僕を見つめて、はいからさんはそう言い切った。

僕は戸惑いを覚えた。鈴ちゃんなら何でもありだと思ふ一方で、あまりに突拍子も無い話を受け容れられずにいた。明美と伊達は哀れみの眼差しをはいからさんに送っている。

「それは白い振り袖の天女の様な娘かね？」

重々しく円覚氏が尋ねる。

「はい。天女のように慈悲深いお方です」

はいからさんが答える。

「慈悲深いかどうかは知らんが、その娘なら今さっき僕も見た。お主も見たじゃろ？」

そう言つて円覚氏は僕に顔を向ける。厳しい表情をしていた。僕が苦しげに頷くと、明

美と伊達は白昼に幽霊を見た様な表情になった。

「その振り袖の美女は一月前の今日、直指庵の境内でも目撃されている。夕暮れ時に三悟君と話し込んでいるのをウチの若い者達が見ておる。三悟君はその娘に茂みに連れ込まれた。見ていた若い者は、人間離れた美しさと、眼差しの異様な冷たさに、その娘を異形の者と思つた。茂みに消えたのを見て、慌てて追いかけたが、三悟君は煙の様に消えていたそうじゃ。それで、直指庵の者が総出で捜して、怪しい暴漢共と事前に遭遇していた。暴漢共は直指庵に入ろうとして咎められ、逆上して「羽生三悟を出せ！」と抜かした。その暴漢共に「羽生三悟はここよ。引き取りに来なさい」と引き渡したのも白い振り袖の娘じゃった。小柄な体なのに、大の男の腕を万力の様に締め上げ、動きを封じていたそうじゃ。結果として一人の男が死ぬ羽目になった。鬼女じゃな」

円覚氏は嘆息気味にそう締めくくった。

はいからさんは「嘘です！ 鈴香様が三悟様を売るような真似をするはずがありません！」と喰つてかかったが、円覚氏は困惑したように「だが、事実じゃ」と呟いた。

僕は円覚氏の一連の発言に何となく齟齬を覚えた。だが、それよりも何やら黒い気が外から漏れ入って来るのに気づき、「静かに」と全員に小声で伝え、足音を殺して襖に近づいて腰を抜かした。慈雲僧正だった。僕は目を細めて慈雲僧正を睨み据え、「立ち聞きですか？」と軽愚の声をかけた。慈雲僧正は「違う！ 違う！」と叫びながら、腰の抜けた姿勢で後ずさる。

僕の後には円覚氏の立つ心配がした。

「慈雲……。お主、なんて様だ？」

心底、情け無いという声だった。円覚氏は廊下に出ると慈雲僧正の前で立ち塞がる。

「言え。慈雲。お主、何に怯えておる？」

「お、怯えてなぞおらん」

「いや、一月前のあの夜より、お主は確かに怯えておる。人相が変わつとるぞ？」

その瞬間、慈雲の顔には確かな恐怖が浮かんだ。

「——帰れ！」

唐突に慈雲は叫んだ。

「目覚めたら、帰る約定じゃ！ 帰れ！ 今すぐ帰るのじゃ！」

まるで駄々っ子だった。四肢をばたつかせて狂ったように「帰れ！」と叫ぶ。騒ぎを聞きつけた大覚寺の僧侶達が集まって来たが、皆、師の狂態を遠巻きにしている。話にもならない。僕たちは大覚寺の庫裏を早々に後にした。明美も流石に切れて、伊達と一緒に散々捨て台詞を残して来た。それでも足りず今も不満を零している。円覚氏は悲しげに苦笑を浮かべるだけで、はいからさんは黙り込んでいる。そして、きつちり後を付いて来る淡雪。

僕たちは寺の大門を潜り外に出た。その瞬間、僕たちは氷結した。門の外をとんでもない冷気が覆っている。僕はすぐに冷気の正体に気付いた。門の外に背を預け、のんびりと夕焼けを眺めている少女がいた。人形のように端正な顔立ち、桜吹雪をあしらった振り袖姿。間違い無く生身の鈴ちゃんだ。呆然と立ち尽くす僕らに顔を向けて鈴ちゃんは言った。

「……やっど追い付いたわ。皆さん、ご機嫌如何？」

鈴ちゃんは小首を傾げ、微笑んで見せた。それで、僕と明美と伊達の三人は彼女が何かとんでもない事をしてかしたと悟った。

(四)

桜並木が夕日に染まり、燃え上がる炎の様に見える。その炎をバックに鈴ちゃんは腰を少し曲げて、僕たちの顔を覗いている。妙に可愛らしい格好だ。その顔には嬉しげな満面の笑顔が張り付いている。無邪気で愛らしい笑顔に見えるが、鈴ちゃんとの付き合いが長い僕や明美、伊達には分かる。作り笑顔だ。鈴ちゃんの作り笑顔は愛嬌があるほど、とんでもない事をしてかした事を意味する。なによりもその身体に纏わり付く冷気が尋常では無い。冷気は靈氣に通じる。鈴ちゃんが靈的に大きな事をしてかしたのは、僕ら三人には明かだった。

そんな鈴ちゃんに、はいからさんが勢い良く駆け寄り、首に抱きついた。

「——鈴香様！ 鈴香様！ ありがとうございます！ ありがとうございます！」

鈴ちゃんは強くはいからさんを抱き締めると言った。

「ごめんなさい。待たせ過ぎたわね。でも、これしか方法が無かったの。会わせて上げるわ。貴女の思いに」

その声音はトーンが低く、表情も真顔になっていた。その眼差しの鋭さに僕は背筋が凍る思いがした。漸く会えた嬉しさなどは消し飛んでいた。

「ああ。嬉しい。わたしは嬉しゅうございます」

盛り上がっているのは、はいからさん一人だ。他の者は鈴ちゃんの雰囲気には肝を冷やしていた。

「ちよつと待ちなさい。君は人かね？ 羽生君が生きていると言うのかね？」

鈴ちゃんは天女の様な笑顔を造った。

「円覚様、わたしが人以外の何に見えまして？ 羽生三悟様は息災ですよ。これから皆さんを彼の元にご案内いたします」

「腑に落ちぬことがある——」

円覚氏の声は震えを帯びていた。

「なぜ、儂の名を知っている？ 羽生君は八方手を尽くして捜したが、今に至るまで行方不明じゃ。どこに居たと言うのだ？ 羽生君として殺められた仏様は誰なのだ？」

「御坊とは何度も何度もお会いしておりますが、ご記憶にありませんか？ 羽生様はどこにも行かれていません。あなた方が認識出来なかっただけのことです」

「——彩宮鈴香。今、思いました。だが、貴女と儂は初対面の筈じゃ。何より、羽生君が生きているなら、殺められた男は誰なのだ？ 顔が潰されていたから、時を同じくして失踪した羽生君として葬られたのだぞ。年格好も似ていたしな。何よりも夜陰に紛れて、大覚寺の前、そうまさにここで、暴漢共に『羽生三悟だ』とその哀れな男を引き渡したのも君ではないのかね？ 目撃証言ではまさに君なのだ……」

「何百回も会ってお話しているのに、冷たいこと……。それと、わたしは今日、嵯峨野に来たばかりです。死んだ男の事など知りません。無縁仏として葬られる運命にあった男な

のでしよう」

「顔を潰され、暴行され、糞巻きにされて良い人間なぞおらん！」

円覚氏はそう叫ぶと、「改めさせて貰おう」と鈴ちゃんの手首を掴んだ。鈴ちゃんは一瞬殺気を走らせたので、僕たちは鈴ちゃんが円覚氏を投げ飛ばすのではないかと肝を冷やしたが、鈴ちゃんは無抵抗に手の甲を晒した。傷一つ無い絹の様な肌がそこにあった。

「失礼した」

円覚氏は素直に鈴ちゃんを解放する。あることに思い至って、目を剥いてその光景を見つめていた僕と目が合った鈴ちゃんは、悪戯が見つかった子供の様に、ペロリと舌を出した。背筋に怖気が走った。

顔を潰すのに拳を使うのは素人だ。武道を嚙った者なら、肘か膝を使う。その見知らぬ男の顔を潰し、羽生氏と偽り暴漢共に引き渡したのは間違いないが、僕にはそんな理由を抱えた。鈴ちゃんがそこまでやるには相応の理由があるはずだが、僕にはそんな理由を抱えた男の存在には心当たりが無かった。人の顔を潰すなど並の根性で出来ることではない。僕は鈴ちゃんが恐ろしくなった。

「——何百回も会っているじゃと？」

難しげな表情で円覚氏が呟く。

不思議な言葉だ。僕は鈴ちゃんが異なる時間軸、異なる世界線を何百回となく行き来したのではないかと推察した。何百と言う異界の門を潜った結果が、この異様な冷気ではないかと思った。最も『電話レンジ』の様なタイムマシンも無いのに、どうやって異なる世界線へ行くのか想像は出来ないが……、だが、僕らも異なる世界線の世界へ迷い込んでいく訳だ。それを思うと世界線を超えるにはタイムマシンなど必要無いのかもしれない。

はいからさんの涙を指で拭いながら、鈴ちゃんと言う。

「じゃあ、三悟さんの所へ行きましょうか？」

はいからさんは迷いなく「はい」と応じる。

「あなた達も来て頂戴」

鈴ちゃんは僕らを見つめて言う。

「応よ」と応じたのは伊達だ。「ここまで来たら見届けないと気が済まねえぜ」

それは僕達三人の総意でもあった。

「農も付き合わせて貰おう」

円覚氏が口を挟む。苦虫を噛み潰した様な表情をしていた。

「羽生君が生きているなら、会いたいし、納得のいかんことが多すぎる。仏の身元も明らかにせねばならぬ。このお嬢ちゃんは説明する気は毛頭無いようだしな」

「いいですよ。御坊は異界潜りは初めてではありませんものね」

鈴ちゃんは悪戯っ子の微笑みで答える。円覚氏は表情を厳しくしたが、無言で通し、鈴ちゃんの挑発には乗らなかつた。

陽は傾き、夜の紫が中天を覆い、夕日の赤を侵食している。

黄昏時だ。隣の人の目鼻立ちも曖昧になる。

「おあつらえ向きだわ……」

鈴ちゃんがそう独りごちたのを僕は聞き逃さない。

「では、行きましようか？」

鈴ちゃんは皆に声をかけると、竹で覆われた小道を先に歩き始めた。ひよいと淡雪が飛び出して、誘うように先行する。その後をはいからさんが追いかける。

「三悟様はどちらにおいでですか？」

声が無邪気に弾んでいる。この女性は不安にならないのだろうか？

「化野念仏寺よ」

鈴ちゃんが短く答える。それにあり得ないと突っ込んだのは円覚氏だ。

「それはおかしい。あそこは禁足地じゃ。予約しないと入れない。今でも風葬が行われているからな。午後五時になれば住職も寺男も居なくなる。この時刻に人が行くべき所ではない」

「人が密会するには絶好の条件じゃないですか？」

鈴ちゃんはさらりと受け流す。

（おいおい——）

僕は内心、突っ込みを入れる。

（風葬？ 何時の時代の話だ？ 禁足地？ 観光のメッカじゃないか？）

どうやら、僕らの時空とは随分有り様が違うようだ。それにしても、鈴ちゃんに顔を潰された男は何者だろう？ どんな逆鱗に触れたのだろうか？

そんなことを考えながら歩いていたので、僕は俯いて列の後方を歩んでいた。

「——浩ちゃん」

薄闇の世界に良く響く声で呼び掛けられて、僕の心臓は驚きに跳ね上がる。その声音には切なさが詰まっていた。

「どうして無視するの？ やつと会えたのに声もかけてくれないの？」

悲哀を帯びた声色だったが、僕は鈴ちゃんを怖いと思ってしまった。鈴ちゃんの表情は暗くて見えなかった。明美と伊達が道を空け、「ほら、行け」と促す。僕は親しい友人から『哲学者』と揶揄される表情を殺した顔で鈴ちゃんの横に立つ。

「やつと、来てくれた」そう言っって笑う鈴ちゃんの表情は無邪気に見えた。僕は小さく「ごめん」と言う。鈴ちゃんは恋人繋ぎで僕の手をしっかりと握ると、樂しげに歩み始めた。前を行く淡雪の白い身体は闇に侵食され滲んで視える。僕にはそれが鬼火に見えた。淡雪は細い路地を何度も曲がる。僕と鈴ちゃんの後には、はいからさんと円覚氏。そして、明美と伊達と続く。化野念仏寺に向かう道を歩んでいるとは思えないのだが、円覚氏を始め何も言わない。僕は『方違え』と言う古代の呪術を思い返す。四つ辻を何度も曲がって進むことで異界へ行くと言うものだ。鈴ちゃんは強い力で僕の手を握っていて執念めいたものを感じさせた。少なくとも普段の鈴ちゃんではない。その手からは緊張が伝わって来る。

闇が濃くなり足下がおぼつかなくなった頃、僕は階段を踏み外した様な感覚に襲われ体を崩しかけた。次の瞬間、驚きに「えっ？」と口を開けた。

唐突に開けた場所にいた。

無数の朽ちかけた石仏が整然と並び、その前には灯の灯った和蝋燭が立てられている。幻想的な無数の灯明が小さな寺の境内を照らし浮かび上がらせていた。

本堂は開け放たれ、やはり灯明で照らし出されている。その本堂の縁側に鷹を思わす鋭い容貌の中年の僧侶と書生姿の背の高い青年が座っていた。

「——三悟様！」

ひときわ高い叫びを上げて、はいからさんが書生の胸元に飛び込む。青年は優しくそれを抱き留めて、目線を鈴ちゃんに送ると、深々と頭を下げた。鈴ちゃんは顎を引いてそれに応じると、皆に向かつて言った。

「化野念仏寺よ。ここでわたしは約束を果たしたのよ」

鈴ちゃんには珍しい、派手なドヤ顔だった。

(五)

「わたしは約束を果たしたのよ」

派手なドヤ顔でそう言うと、鈴ちゃんは僕の腕にしがみつき、体を預けてきた。潤んだ瞳で物言いたげに僕を見上げて来る。僕はどきまぎとする。どんな言葉を掛けて良いのか分からない。と、はいからさんの号泣の声が境内に響き渡った。僕は内心、安堵の息を吐いて、視線を鈴ちゃんから外し、はいからさんを見た。蝋燭の陽炎越しに、はいからさんが長身の書生に抱きついて「おう！ おう！」と獣のように号泣している。書生はしっかりとはいからさんを抱き締め、はいからさんの髪に顔を埋めている。二人の頭上を覆う桜花の天蓋は千本を超える蝋燭の炎に妖しくたなびいている。ふと横を見ると鈴ちゃんは潤んだ瞳で抱き合う二人を凝視していた。瞳の底には歓喜の色がある。

僕は千本を超える灯明にゆらめく境内を見回す。僕らの他に人影は無い。

(現実の千灯供養ではないようだ……)

この光景は夢か幻の類いだろう。化野念仏寺の千灯供養は有名だ。八月二十三日、二十四日の地藏盆に行われる幽玄な催しには全国から多くの人が集まる。蝋燭は一本一本参拝者が供えるのだ。

この幽玄な光景が春の桜の下で広げられることはない。その意味では、この光景の下に集った僕らの存在も夢・幻のようなものだ。

僕は改めてはいからさんと羽生三悟のカップルを見る。激しく抱きつくはいからさんを羽生三悟は抱き締め返し耳元で何事かを囁いている。羽生三悟は長身でしなやかな体軀をしていた。その顔は柔和で落ち着きがあり、今ははいからさんを慈しむ感情に溢れている。

この異様な状況下で、落ち着いていられるのは大した肝の太さだと思う。

「はいからさん、良かったね。大団円だね」

明美が胸に手を置き、かすれた声で鈴ちゃんに言う。その側で伊達は突然、光景が変わったことに狼狽を隠せずにいる。空気を読まない質問をしないのは伊達なりに自省しているのだろう。夏休みのことを思えば格段の進歩だ。

対応で言えば伊達が正しい。大団円？ なにが？ なにも解決はしていない。むしろ、これからどうするのだと問いたい。

だが、僕は羽生三悟を見た瞬間から、概ねのからくりには本能的に気付いていた。

——羽生三悟。

いけ好かない男だ。生理的嫌悪が先に立つ。

断っておくが、僕は滅多なことで人を嫌いにならない。第一印象で人を嫌う事も無い。生まれつきそう出来ている。

その意味で羽生三悟は僕にとって特殊な存在だった。

僕は鈴ちゃんと繋いでいた手をそっと外した。明美と話していた鈴ちゃんは流し目で僕を見たが、その行為を咎めることはしなかった。

伊達同様周囲を見回し呆然としていた円覚氏は、「こう言う仕掛けか……」と呟き、本堂へ向かう。鋭い容貌の僧侶とは知り合いらしく、親しげに挨拶を交わしていた。その後、遠慮気にはいからさんを抱く、羽生三悟に近づき肩を叩いた。羽生三悟は顔を上げ、円覚氏と言葉を交わす。何を喋っていたのかは分からない。ただ、喋る内に円覚氏の表情に驚愕が浮かび、恐ろしいものを見る視線を鈴ちゃんに向けたと思うと、直ぐに視線を外した。僕は横目で鈴ちゃんの表情を伺う。そこにあつたのは『絶対零度の魔女』の二つ名で呼ばれる凍てついた表情だった。

半時程、号泣していたはいからさん、もう名前の真魚さんで良いだろう、真魚さんは落ち着きを取り戻し、淑女らしく羽生三悟から離れた。円覚氏から何か諭されている。ずっと二人の逢瀬を邪魔せぬよう動かずにじっとしていた僕らだったが、鈴ちゃんの「わたし達も行きましょう」のかけ声に本堂へ向かった。僕は内心、これから僕らがどこへ向かうのかを考えていた。

僕らが本堂に近づくと飛び出すように迎えてくれたのは、真魚さんだった。遅れる形で羽生三悟も出迎えに出る。

真魚さんは両手で鈴ちゃんの手を取るとぶんぶんと振り回す。

「鈴香様！ 鈴香様！ ありがとうございます。ありがとうございます。鈴香様のお力で羽生と会うことが出来ました。皆様もお力添え、ありがとうございます。皆様のお力添えが無ければこの縁が成就することはありませんでした」

真魚さんの後から羽生三悟が口を開く。

「真魚の許嫁の羽生三悟と申します。彩宮殿は元より皆様のお力添えは真魚から聞きました。どうか私からお礼を言わせて下さい」

真魚さんに比べれば随分と落ち着いていたが、十分過ぎるほどの誠意が伝わる口調だった。僕は怖気を覚えた。明美と伊達が「わたし達は何もしていない」と恐縮する様を見て、嫌悪感に限界を超えた。

「宮様を犠牲にしてまで結ばれるのが嬉しいか？ 羽生三悟？」

気付いたら刺々しい言葉で羽生三悟をなじっていた。

皆、毒気を抜かれてポカンとした表情を浮かべる中、鈴ちゃんが泡を食った様子で「ちよつと、浩ちゃん。やめてよ。違うのよ」と取りなすのと、羽生三悟が苦笑を浮かべ、頭を掻くのは同時だった。

「やはり自分に敵しい性格は同じですか……。彩宮殿の連れ添いだけあって、そちらの世界の私は随分と聡いのですね。私自身、未だ状況が飲み込めていないのに……」

その口調が癪に触り、僕が再び口を開こうとすると、鈴ちゃんが肘鉄を入れて、強制的に黙らされた。

「浩ちゃんは黙ってて！ この人達が幸せに結ばれるのが大事なのよ！ 黙って！」

不本意だが鈴ちゃんにこう言われては黙らざるを得ない。

その時、ポンと手を打つ音がした。円覚氏が納得の行った顔をしている。

「なるほど！ あの仏は例の宮様か！ あの夜、大覚寺で真魚さんが連れ込まれるのを待

っていたのじゃな。げすな男よ。慈雲が手引きをしたのじゃな。それで道理が通る。なんだ、天罰の様なものではないか」

そんな事は分かっている。問題はそこじゃない！ 僕は無言で羽生三悟を睨んだ。僕の視線に羽生三悟は申し訳ない顔をする。

「君の憤りは分かるよ。君の彼女の手を汚させたのが許せないのだろうか？」

殴ってやろうかと思った。この怒りは激しい自己嫌悪から来るものだど理解はしている。僕は他人を嫌うことはまず無いが、自分は別だ。僕は自分自身を激しく憎悪している。故に他世界の自分となれば、生理的嫌悪を禁じ得ない。そんな僕を無条件に慕ってくれる鈴ちゃんの存在は特別なのだ。かけがえのない存在なのだ。その存在が穢されるようなことは僕は決して許しはしない。

「すまない。けれど、私は真魚さんの笑顔を守る為なら悪魔にでも縋るのだ」

羽生三悟は僕に対して、礼儀正しく頭を下げた。僕は思わず拳を握る。

鈴ちゃんが遠慮がちに僕の握り拳を包み込んで言う。

「こらえて。お願い。あれはわたしにしか背負えない業だったのよ。罪だなんて言わないで。わたしは浩ちゃんの為にやったのよ」

その意味することに気付いて、僕は改めて鈴ちゃんの情の深さに慄然とした。常に淡雪が僕らを先導していた意味も分かった。天竜寺の回廊で起きた不可思議な出来事の焼き直しなのだ。少なくとも鈴ちゃんにとっては……

僕は嘆息して天を仰いだ。

蒼い三日月が夕闇の空に浮かんでいる。西の空は淡く金色に滲んでいる。根拠の無い怒りに熱していた脳が冷めていく。冷めていく過程で考える。立場が逆なら僕はどうしただろうかと。鈴ちゃんと僕が結ばれるのを、ストーカー気質の権力者の横恋慕で道が閉ざされた時、僕はどうしただろう？ 鈴ちゃんに『みちゆき』を口説かれたなら、その為に全てを捨てて、猪突邁進しただろう。人殺しも厭わなかっただろう。それを思えば、羽生三悟は僕より余程分別はある。

鈴ちゃんの前に真魚さんが現れたのも偶然ではあるまい。恐らく何百とある世界線の中、唯一、結ばれぬ未来を迎える僕達の姿が真魚さんと羽生三悟なのだ。そして数多ある世界線の中で未来を変える力を持っていたのが、唯一、僕の知る鈴ちゃんだったのだ。そりゃ、鈴ちゃんは助ける。身を切っても助けるさ。

僕は羽生三悟の横で一言も発せず、身を固くして、成り行きを見つめていた真魚さんに目を向ける。改めて見ると鈴ちゃんと顔立ちが良く似ている。

僕は真魚さんに言った。

「宮様がすでに亡き人なら、みちゆきはせずとも良いのではないかな？」

真魚さんは悲しげに首を振った。

「わたし達は反逆者ですから、結ばれるにはみちゆきしかありません」

表情は悲しげだったが、その口調はきっぱりしていた。生涯を日陰者で暮らす覚悟があった。

「——ああ、それだけだね」

鈴ちゃんは自分の懐をまさぐる。

「これを取りに行っていたので、遅くなったのよ」

そう言って取り出したのは、上等の絹の袋に入った三十センチ程の丸い棒状の物だった。「はい」と真魚さんに手渡す。

「これを持って福井の大叔母様を頼りなさい。悪いようにはしないはずよ」袋を手にはりとした真魚さんは「中を改めて良いですか？」と尋ねる。鈴ちゃんは横柄に「どうぞ」と応える。出て来たのは青い竹の棒だった。表皮を削って達筆で何か書かれている。達筆すぎて僕には読めなかったが、真魚さんの表情が厳しいものとなる。真魚さんは竹の上部を引っ張る。切れ目など見えなかったのに、竹の上部がボンと外れる。残った筒から出て来たのは年代物の茶杓だった。真魚さんは小刻みに震えている。

「これをどこから？」

震える声でそう尋ねる。鈴ちゃんは何でも無いことの様に答える。

「わたしの世界では、わたしは家督を相続したばかりなの。その祝いに頂いたのよ。こっちの世界でも福井の大叔母様に逆らえる者はいないわ。良い通行手形でしょ？ あなた達は堂々と一緒になれるはずよ」

真魚さんはぼろぼろと涙をこぼした。

「本当に何から何まで……。お礼の言葉もございません」

「いらないわ。わたしの為にしたことだもの」

そして鈴ちゃんは本堂を振り返る。猛禽類を思わせる面立ちの中年の僧侶に声を掛ける。

「六角堂様、お待たせしました。始めましょう。手筈通りにお願います」

六角堂と呼ばれた僧侶は首で会釈すると無言で立ち上がり。灯明の灯った本堂へ上がった。無言である。その容貌と所作から僕はこれは人では無いと思った。もっと高位の存在の様な気がした。

(六)

六角堂は巻物を取り出し壁に掛けた。地藏菩薩の御姿が描かれている。香を焚き、所作を整え、巻物に向かって座る。

「円覚！」

甲高いだみ声でそう叫ぶ。自分より年下の僧侶に呼び捨てにされたのに、円覚氏は「はっ！」と下手に答える。

「従者を務めよ」

六角堂がそう言うと、円覚氏は頭を垂れた姿勢で素早く本堂に上がり、六角堂の左下座に正座した。六角堂がリーンと五鈴を鳴らすと、打ち合わせも無く、地藏菩薩真言の唱和が始まった。

「オンカカビサンマイソワカ。オンカカビサンマイソワカ——」

腹に響く重低音の唱和が境内に響くと空気が変わった。気温が二三度低くなり、空気の質が重くなった。西風が吹き、灯明が一斉に揺れたかと思うと、灯りが絵巻に吸い寄せられる様に流れた。境内から金色の光の川が出来、絵巻に流れて行く様だった。光は絵巻に当たると垂直に曲がり、天を指して登って行く。化野念仏寺に眠る霊や思いが浄化されているのだ。光の噴流は伊達や明美にも視えるようで「何だ？ 何だ？」と騒いでいる。明美に至っては僕の肩にしがみついて来た。と、立ち上る光の柱の向こうから何か近づいて来た。最初は黒い点に見えたそれは十五分程で向こうへ繋がる夕暮れの道となった。

六角堂の姿は道に押し消され半透明になっている。左下座に座っていた円覚氏は道の脇で座っている。

肩を抱き合ってその光景を見ていた羽生三悟と真魚さんに、鈴ちゃんが声をかけた。

「これがあなた達の道よ。行きなさい」

二人は永久の別れとばかりに鈴ちゃんの手を取り、泣きながら礼を述べる。鈴ちゃんには何もなかった。

「うっとうしいから、やめて。時間が無いのよ。早く行きなさい」

二人は地藏菩薩真言が響く中、恐る恐る道へと進み、やがてその姿は闇に飲まれた。

鈴ちゃんは懸命に真言を唱えている円覚氏の肩を思い切り叩いて唱和を止めさせた。

「何をしてるの？ あなたも戻りなさい。帰れなくなるわよ」

「——し、しかし、師匠のお許しが出ていない」

「現実の師匠ではないでしょ！ わたしが代わって許すから、早く戻りなさい。わたし達が戻る時間が無くなるわ！」

円覚氏は渋々立ち上がった。道を行こうとして振り返る。

「鈴香殿。そなたは——」

「さっさと行けえええ！」

鈴ちゃんは言葉の続きを許さず、円覚氏の尻を思い切り蹴り上げた。その瞬間、道は消え、真言を唱える六角堂の姿がはつきりと露わになる。六角堂は瞑目したまま五鈴鈴を取り、リーンと鳴らすと、真言を唱えるのを止めた。

化野念仏寺の境内を静寂が支配する。圧力のある静寂だ。伊達も明美も何も言わない。

六角堂は音も無く立ち上がると、絵巻に一礼して、本堂から下りて来た。立ち尽くす僕らに目礼するとすたすたと歩みを進める。鈴ちゃんが「さあ、行くわよ」と号令を掛けたので、僕達はカルガモの親子よろしく、六角堂の後を歩く。六角堂は墓地の敷地を回る様に歩くと思ったら、角を回って暫く行った所で唐突に止まった。回れ左をして路地を外れて奥へ行くと思ったら、ひっそりとした神社があった。小さいが立派な社で時代を感じさせた。これほどの神社が気配を殺していることに違和感を覚えた。六角堂は鳥居の二本の柱に和蝋燭を立てると、すつと身を退いた。身を退くときに僕の耳元で囁いた。

「ご同輩。ここに道を開くのは君の役目だ」

不本意だった。こんな人外の輩に朋輩呼ばわれする覚えが無い。何よりするべきことが分からない。慚然としてみると、「浩ちゃん。早くして」と鈴ちゃんに急かされた。鈴ちゃんの様子は余裕が無く、明らかに焦れていた。やむを得ない。兎に角、神社の敷地に入るのだからと、二拍二礼して顔を上げて驚いた。神社が入れ替わったのかと思った。先程まで夕闇に閉ざされていた神社が、今は明るい夕日を受けて浮かび上がっている。同じ神社だが、明らかに別物だ。

光景の変化に僕や伊達、明美が驚いて立ち尽くしていると、鈴ちゃんが後から僕達の腰を押し、神社の境内に押し入れようとす。

「入って。兎に角、早く入って」

僕達は意外に力のある鈴ちゃんに押されて、神社の境内になだれ込む。「六角堂さん、いずれました」と早口で挨拶する鈴ちゃんの台詞が耳に残った。

光景が一転した。カメラがパンする感覚に似ていた。僕は間もなく夕方になる神社の境内にいた。境内は気配を殺した静寂な空気がある。が、鳥居の向こうの参道は人の渦だった。人々の気配と服装から僕は元の世界に戻ったと悟った。

「あゝ 焦った。もう少し向こうに居たらやばかったわね」

僕達を力尽くで神社に押し込んだ鈴ちゃんは、肩で息をしながら、そう安堵の声を漏らした。

「やばかったのかよ?」

思わず突っ込みを入れてしまう。伊達が恐る恐る尋ねる。

「あのゝ 鈴ちゃん。どうやばかったの?」

「戻れなくなっただでしょうね、あそこは人が居て良い世界じゃなかったから」

鈴ちゃんは事も無げに言う。伊達は癖癖とした顔になった。

「あの二人は大丈夫かな?」

明美が遠い目をして言う。

「大丈夫よ!」

鈴ちゃんが即答する。

「わたしが請け負うわ。もう、障害も無いんだもん。二人は祝福されて一緒になるわ」

「そっか。鈴が言うのなら安心だね。次は——鈴の番だね」

「とりあえず。今晚結ばれるわ」

明美のねっとりとした笑みに朗らかにそう答えると、鈴ちゃんは僕の腕にしがみつく。

あんまりな台詞に咳き込みながら、僕は尋ねた。

「なあ、鈴ちゃん。君は全ての世界線の僕らを結びつけるつもりかい?」

「敵うものなら」

「その為なら、手段を問わず障害を排除するのかい?」

「ええ。そうよ。軽蔑する?」

「——いや。嬉しく思うよ」

内心、怖いものを覚えないでもなかったが、僕はそう答えた。喉の奥で笑いながら、鈴ちゃんはしがみつく力を強くする。

僕達が境内で騒いでいるので、参拝客も神社に気付き始めた。「あら? こんなところに神社がある」異口同音にそう呟いて、神社にも参拝の列が出来る。ところでん式に僕達は押し出され、帰路の列に並ぶ。

「ああ。お腹空いたあゝ あ、浩ちゃん。お弁当美味しかった?」

「旨かったよ」と答えると鈴ちゃんは小さくガッツポーズを取り、明美とハイタッチをする。

「鈴ちゃんは昼抜きだもんな。どこか食べれる店に入ろう」

鈴ちゃんは嬉しげに大きく「うんっ!」と頷くと、拳を天に掲げて叫んだ。

「食べるぞー! 遊ぶぞー!」

徹夜明けを思わずテンションの高さだった。その姿に、鈴ちゃんを除く三人は苦笑する。長い夜になりそうだと僕は思った。

(完)